

京都教育大学
平成22年度 修士論文

現代日本語の 形容詞と認知

教育学研究科
教科教育専攻
国語教育専修2回
氏名： 古野 典

指導教員：森山 卓郎
浜田 麻里

目 次

第1章 目的と次元形容詞についての先行研究

- 1-1 研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- 1-2 次元形容詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 1-3 「高い・低い」「大きい・小さい」分析における先行研究・・・・・・・・・・5
- 1-4 概念認知と比喻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
- 1-5 研究の内容と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第2章 形容詞の比喩的用法の分析1

—「高・低」関係と「大・小」関係で表せる概念—

- 2-1 「高い・低い」「大きい・小さい」で表せる「～性」「～度」「～率」・・11
- 2-2 「～性」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
- 2-3 「～度」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
- 2-4 「～率」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
- 2-5 「～力」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
- 2-6 概念の量を表す「高い・低い」と「大きい・小さい」・・・・・・・・・・70

第3章 形容詞の比喩的用法の分析2

—「高・低」関係と「大・小」関係の概念構造—

- 3-1 「～が大きい」「～が小さい」で言い表せる群・・・・・・・・・・73
- 3-2 「～が大きい」は言えるが「～が小さい」が言えない群・・・・・・・・77
- 3-3 「～が大きい」「～が小さい」では言い表せない群・・・・・・・・・・79
- 3-4 「高・低」概念と「大・小」概念の認知の広がり・・・・・・・・・・82

第4章 熟語構成と認知の関係

- 4-1 「高・低」の語構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
- 4-2 「大・小」の語構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
- 4-3 熟語構成と認知・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

第5章 概念認知の比喩と語彙教育

- 5-1 学習指導要領における語彙の獲得・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
- 5-2 教科書に見られる概念認知と比喩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
- 5-3 文体の差と語彙の選択・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
- 5-4 概念認知と言語の理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

終章 まとめと課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111

参考文献

第1章 目的と次元形容詞についての先行研究

1. 研究の目的

本研究は、抽象的概念を表す言葉の程度を、空間を表す形容詞で示していることについて分析を行う。その実際の認知のされ方を分析することで、それらの概念がどのように表されているか知ることができる。そこから語彙の教育をどのように行っていくか考えるというものである。

社会生活を送っていく上で、言葉を正しく理解した上でそれを正しく使うことは、文章の読解や表現をしていく上で必要不可欠である。そのためには、学校教育での言葉の教育が重要になる。学校教育の中できちんと言葉を理解し、表現する能力を子どもたちに教えていかなければならないからである。特に言葉の学びである国語教育の中で語彙を正しく理解した上でそれを正しく使うことは、文章の読解や表現をしていく上で必要不可欠である。

現状の問題として次のことがある。平成 20 年度の全国学力・学習状況調査の語彙の問題でおよそ次のような問題が出された。(小学校 6 年 A 問題)

「走行する」と「走る」を比べて

●分かったこと

◆自動車が主語のとき、「走行する」も「走る」も使う

(例) 自動車が走行する ○

自動車が走る ○

◆人間が主語のとき、「走行する」は使わないが「走る」は使う。

(例) 山下さんが運動会のリレーで走行する ×

山下さんが運動会のリレーで走る ○

●まとめ

■「走行する」は、「走る」と比べると、[] と考えた。

この括弧の中に次のうち、どれが入るか。

- 1 使い方の範囲が完全に同じで、いつも置き換えて使える。
- 2 使い方の範囲が広く、人間が走る場合にも使える。

- 3 使い方の範囲が重ならないので、それぞれ別に使う。
- 4 使い方の範囲がせまく、人間が走る場合には使えない。

この問題の正解は4だが正答率は53%であった。このような問題に子どもたちが慣れていない可能性もあるが、2つの言葉を比べて、その意味と用法について考える力が十分にっていないことが分かる。

また、「走る」「走行する」という言葉は、小学校6年生にとって、意味を理解できるし、表現として用いることもできるだろう。しかし、2つの言葉を使い分け、語彙として認識することはできていない。子どもたちが日常使用している言葉であっても、どのように使用しているか、言葉の内省はできていないと考えられる。

このことは子どもたちだけの話ではない。大人であっても同じことである。日本語の基本的な語彙であっても、それが社会の中でどのように認知されていて、どのように使用されているのかについての研究は十分に行われているとは言えない。

たとえば、2006年の「YAHOO 知恵袋」に次のような質問が挙がっている。

可能性が高い、可能性が大きい、可能性が強い、、どの使用法が正しいですか。または使い分けがあるのでしょうか。(2006. 1. 24)

このように大人であってもこのような語彙の使い分けに悩む場面がある。日本語の研究として、このように使い分けが曖昧な語をきちんと分析する必要があるのではないだろうか。

本研究では、語彙の中でも形容詞、特に「空間」を表す形容詞(次元形容詞)「高い・低い」「大きい・小さい」を中心に扱う。その中でも実際に高さや大きさのない抽象的な概念を比喩的に表す用法について研究する(例:「可能性が高い」「可能性が大きい」「可能性が低い」「可能性が小さい」)。

これらの形容詞が、実際にどのように認知されているのかを分析する。そこには比喩的な認知が入っている。我々が言葉をどのように比喩的に扱っているのか、概念をどのような比喩で扱っているのかを考える。そこから国語教育における語彙の比喩について考え、それらが国語教育だけでなく言語教育としての広がりを持っていることを示していく。

2. 空間を表す形容詞（次元形容詞）の分類

空間を表す形容詞はいろいろある。まずはそれらの形容詞がこれまでにどのような分類や扱いがされているのかということについて見ていきたい。

国立国語研究所（1972）ではこれらの形容詞は「空間的な量の大小に関する形容詞」「程度によって区別される形容詞」の中で取りあげられている。まず、「空間的な量を表す形容詞」では次元ごとにこれらの形容詞を分けている。

(1次元) ながい—みじかい、とおい—ちかい、たかい—ひくい、ふかい—あさい、
あつい—うすい

(中略)

(1・2次元) ふとい—ほそい

(2・3次元) あらい—こまかい

(1・2・3次元) おおきい—ちいさい

ひろい—せまい

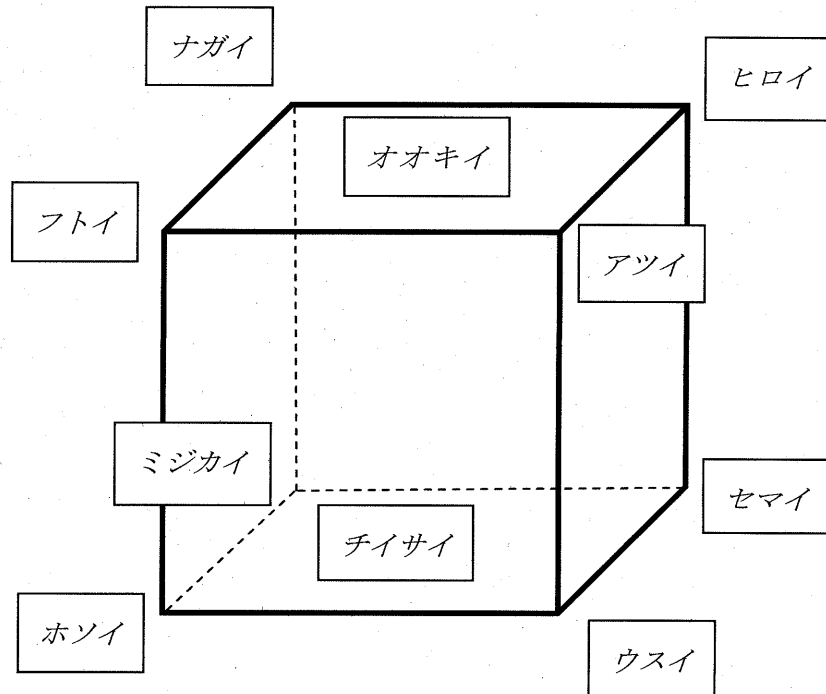
その上で、「基準」や「形」、「量」「数」等の観点からこれらの語を以下のようにまとめている。

以上に問題にしてきた、基本的な諸単語を、意味の大まかな性格によって分けると、まず「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」は基本的な用法にかんしては、重力のはたらく線上に存在する性質に存在する性質である点で、個々の人や物を越えた客観的な性質である。次に、「ながい—みじかい」「あつい—うすい」「ふとい—ほそい」「おおきい—ちいさい」「あらい—こまかい」は、言及される物に即した、量的な性質である。「ひろい—せまい」は人間の目的・関心からみた、空間的な量の大小である。

このように空間を表す形容詞を「次元」の関係と、「人や物」の「主観・客観の関係」で分類している。

国広（1982）では、空間を表す形容詞を「次元形容詞」としてまとめており、「その構造はわれわれの空間的認識を反映している」と論じている。国広は「高い・低い」「深い・

浅い」「遠い・近い」をベクトルの方向性から別扱いとした上で他の次元形容詞（「大きい・小さい」「太い・細い」「厚い・薄い」「広い・狭い」「長い・短い」）をその関連性から次のような正6面体で組み立てている。（図1）



（図1）

『分類語彙表 増補改訂版』（2004）では、これらの形容詞は次のようにまとめられている。

3 相の類

3. 1 抽象的關係

【3. 19 量】

3. 1910 多少

3. 1911 長短・高低・深淺・厚薄・遠近

3. 1912 広狭・大小

3. 1913 速度

3. 1914 輕重

3. 1915 寒暖

このように空間を表す形容詞は、状態を表す「相の類」の、「抽象的な量」を示すところに分類されている。数を表す「多少」の関係から、一次元的な矢印で表す「長短・高低・深浅・厚薄・遠近」をまとめて、二次元の面や・三次元の空間を表す「広狭・大小」をまとめていると考えられる。「広狭・大小」には「太い・細い」の関係も含まれている。また「広狭・大小」には「些細」「ちょっとした」「大規模」のような実際には大きさを持たないものの量もこの分類の中に入っている。

3. 「高い・低い」「大きい・小さい」分析における先行研究

先行研究に言及する前に、まず辞典における「高い」「低い」「大きい」「小さい」の意味を挙げておく。ここでは空間に関する意味と、価値や程度について言及しているもののみを取りあげる。

〈精選版 日本国語大辞典〉

たか・い

㊦空間的に上の方にあったり、上の方まで広がってあったりするさま。

①上の方にある。

②盛り上がったり積もったりして、上の方まである。

③丈が長い。

④外部に盛り上がり、突き出ている。

㊧価値や序列について、上位にあるさま。

①身分や地位が上位にある。高貴である。

②容姿や品位がすぐれている。上品である。

③精神的にすぐれている。思念、理想などが、すぐれている。

④みずからすぐれていると思ったり、振る舞ったりするさまである。高慢である。

⑤ (抽象的な事柄について) その力量・機能などの点ですぐれている。

ひく・い

☐ 空間的に下の方にあったり、下の方まで広がってあったりするさま。

① 下の方にある。下の方に位置している。

② ある基点からの盛り上がりや突き出しの程度が少ない。

③ 丈が短い。

④ 態度、物腰などが謙虚である。丁重である。

☐ 価値や序列について、下位にあるさま。

① 身分や地位、生活態度などが下位にある。

② (抽象的な事柄について) その力量・知力・思想や機能などの点で劣っている。

一定の知的水準に達していない。

③ 体裁、構成、調子などの張り、緊張感に乏しい。説得力に欠ける。

おおき・い

① (物の形について) 空間を占める容積や面積が大である。

④ 価値がある。重大である。

⑤ 規模が大である。盛んである。豊かである。

⑥ 度量が広い。寛大である。

⑦ 程度がはなはだしい。たいへんである。

ちいさ・い

① 空間を占める体積・容積・面積・身長などが小である。小形である。

④ 抽象的なものごとについて、その程度、度合、価値などが比較的の小である。

① 事柄の価値や重要性が乏しい。些細である。

⑥ 数量や程度がわずかである。

「高い・低い」「大きい・小さい」ともに、抽象的なものごとである程度や価値について言及している。また「高い・低い」については「上下」、「大きい・小さい」については「空間を占める～」という言葉を用いて意味の記述を行っている。

次に「高い・低い」「大きい・小さい」の分析を行っている先行研究を挙げる。

まず国立国語研究所(1972)を挙げる。「高い・低い」「大きい・小さい」の語を雑誌や文学作品等の文例から分析を行っている。

「大きい・小さい」については基本的には3次元の量を表すが、2次元（畑・影・空地）、1次元（人の身長・木）の量も表すものもあるということについて言及している。ただし、1次元について、文脈からは体や木全体を表す3次元の量と背の高さを表す1次元の量を表すかははっきりと区別がつかないと述べている。そして1次元の方向を持つときには「高い・低い」に相当する上方向についてのみ使われる、と結論づけている。

さらに「高い」については個別的に記述している。まず「高い」は山・建物・樹木など、床や地面などの基準面がしっかりしていて、そのものが安定した位置を保っている場合の量を表している、としている。また例外として水平面以外のものが基準になる（「鼻」や「額」）ことがあることも示している。

また、空間的な量を表すだけでなく、「高い」が比喩的に慣例的に使われていることについても言及している。その場合の「高い」は「質・価値が大きく、すぐれていること」を表している、としている。それは人間が価値を計る場合に、「上下の関係」で考えるからであり、「うえ」や「あがる」が質的によくなることに使われるのと同じである、と考察している。

そしてそこから価値的な要素が失われて、たんに量的・程度的な要素がいちじるしいことを表すようになった、としている。これらの語には「～度」や「～率」のような名詞につくことが多いことも示している。

次に、国広（1982）では、「高い・低い」「大きい・小さい」の形容詞について、これらの「意義素」、できるだけ中心の意味を分析している。ここで「高い・低い」は、

タカイ（ヒクイ）：〈水平面を基準とし、それと注意の焦点との垂直方向の距りが標準値よりも大きい（小さい）〉

と表されている。また「大きい・小さい」は、「形態上の特徴に関する制約が最も少ない形容詞」とした上で、

オオキイ（チイサイ）：〈形のある物を全体として捕えた時の空間占有量が大きい（小さい）〉

とまとめられている。また、「次元形容詞の中でも最も抽象度の高いもので、この語を説明

するさらに抽象的な形容詞は存在しないのである」と述べている。

この他に、空間を表す形容詞を「物」と「場所」に分けて分析を行った久島（1993）では、「大きい・小さい」は辺が大小に分割していない立体の量を表すとし、「高い・低い」は鉛直（垂直）方向の量と距離が〈+〉であることが述べられている。小出（2000）では、空間を表す形容詞を「次元形容詞」とし、空間的用法と非空間的用法に分けて意味を記述している。その次元形容詞の非空間用法において、「高い」は「顕著さ、価値の度合い」を表すとして、「大きい」は「経験や活動を通して得られたもの」を表すとし、まとめている。

4. 概念認知と比喻

ここまでは、空間を表す形容詞についての先行研究を確認した。ここでは、概念の認知と比喻が我々に言語の運用を助けていることを示す。

なぜ、比喻についての話題がここで挙げるのか。それは形容詞の意味を分析する際に比喻的に捉えられているものが多くあるためである。

「高い」では「山が高い」「背が高い」のように、「上下関係」の量を表す一方で、「格調が高い」「志が高い」というように実際の「上下関係」が無い抽象的な概念にも使われている。

「大きい」も同様である。「体が大きい」「建物が大きい」等、実際に形のあるものの空間的な量を表すことに対して、「事件が大きい」「罪が大きい」等、形のない概念に対して、比喻的に用いられている。

G・レイコフ（1993）では我々の概念を比喻的に表す能力についてこのように述べている。

—われわれの日常の経験の中にある概念形成以前の構造と相互関係にある記号構造を形成する能力。このような記号構造は基本レベルの概念及びイメージ・スキーマ的概念である。

—物理的領域における構造から抽象的領域における構造へメタファー的に投影する能力。これは物理的領域と抽象的領域との間の他の構造的相関関係により制約を受けている。このことによって量や目的といった抽象的領域に関して推論するわれわれの能力が説明される。

一構造化の仕組としてイメージ・スキーマを用いることによって複合的な概念や一般的なカテゴリーを形成する能力。この能力によって、われわれが複合的な事象構造 (event structures) や上位カテゴリーと下位カテゴリーを伴った分類法を構成することが可能となる。

G・レイコフは概念を比喩的に表す能力を上記のように3つに分けている。まず1つめが「日常生活における基本レベルの概念を習得する能力」である。2つめが「物理的な構造から抽象概念における構造へ投影する能力」である。最後の3つめが「構造化の仕組として集まった概念を集めて集約化する能力」である。

そしてそういった認知能力によって、我々は「概念」という「抽象的」なものを操ることが出来、また「思考」できる。そしてそれを他人に伝え、高度なコミュニケーションを図ることが出来ていると考えられる。

このようにG・レイコフは比喩的に概念を捉えることが人間のコミュニケーション能力を上げていることについて言及している。

5. 研究の内容と方法

ここまでは空間を表す形容詞の分類と、「高い・低い」、「大きい・小さい」の先行研究、概念を比喩的に捉えることについての研究についてみてきた。

空間を表す形容詞の分類と個々の記述については詳細に分析が行われている。また空間を表す意味については、それぞれの形容詞の意味の違いが細かく分析されている。しかし空間を表さない、抽象的な概念について分析を行っているものは少ない。しかもそのような抽象的概念のほうが、「可能性が高い」「可能性が大きい」のように同じような意味で使われることが多く、意味の違いが分かりづらい。このような例を分析している先行研究は見つからなかった。

また抽象的な概念と比喩的な認識との関係について論述している研究も見あたらなかった。

本研究ではこのように抽象的概念の量を表す形容詞「高い・低い」、「大きい・小さい」の分析を行う。

まず、第2章では「～が高い」が言えるものを「～性」「～度」「～率」「～力」に分け、

その語に「大きい・小さい」が使えるかどうかについて分析する。また「上がる・下がる」等の語も調べ、言えるかどうかを調べた。そこから「～性」「～度」「～率」「～力」等の言葉のうち、どのような言葉が「高い・低い」関係で表されるのか、どのような言葉が「大きい・小さい」の関係で表されるのかについて調査する。

言えるか言えないかは、検索サイトの「GOOGLE」における検索数をもとにする。実際のインターネットのサイトにおける書き言葉において、そのフレーズが何件使われているのかで調査を行っている。

次に第3章では第2章で調査した語彙についていくつかのグループに分ける。『～が大きい』『～が小さい』で表せる群や『～が大きい』『～が小さい』では言い表せない群等のグループに分けて、それぞれのグループの語にどのような共通性があるかを調査する。そこから「高い・低い」と「大きい・小さい」がどのような概念を持っているのかを分析し、これらの語の利用に際する使い分けしている認識がどのようなものを明らかにする。

第4章では、「高い」「大きい」等の語構成について分析を行う。熟語の構成と我々の形容詞についてどのように関わっているかについて記述していく。

第5章では、概念認知と比喻の関係が国語教育にどのように活かさせていけるのかについて考える。学習指導要領における語彙教育についての記述や教科書に見られる概念の比喻からその理解をどのように考えるかについて記述する。また文体による我々の語の使用をどのように気付かせていくかについても言及する。

第2章 形容詞の比喩的用法の分析1

—「高・低」関係と「大・小」関係で表せる概念—

前章では「高い・低い」や「大きい・小さい」の先行研究や本研究の課題について記述した。先行研究から「高い・低い」が1次元的な「上下関係」を「大きい・小さい」が3次元的な「空間の広がり」を表すことが分かる。

では実際にこれらの言葉がどのように生活の中で用いられているのか。この章では、インターネットでの調査からどのような概念に「高い・低い」「大きい・小さい」が用いられるか調査している。

この調査から「高い・低い」は科学的・数值的・具体的な概念を表しているのに対し、「大きい・小さい」は評価的・物的・曖昧な概念を表しているという考察を得られた。また「大きい・小さい」については、その概念に対する我々の評価が表現されているのではないかと考えられる。

以下、「高い・低い」や「大きい・小さい」形が使われる語を「～性」「～度」「～率」「～力」等の概念ごとに分けて考察し、記述していく。

1. 「高い・低い」「大きい・小さい」で表せる「～性」「～度」「～率」「～力」

第2章では「高い・低い」「大きい・小さい」の語について、それぞれの語の使用のされ方を見ながら、論述していく。第1章で述べたようにここでは、抽象的な概念を表わす語について使用される「高い・低い」「大きい・小さい」について考える。これらの形容詞で表される概念は、後ろに「～性」「～度」「～率」「～力」のような接尾辞がついているものが多い。これらの語について、それぞれ分析を行っていく。

使用については言えるか言えないかは、検索サイトの「GOOGLE」(2010年11月8日(月)～2010年11月15日(月))における検索数をもとにする。実際のインターネットのサイトにおける書き言葉において、そのフレーズが何件使われているのかで調査を行っている。

「高い・低い」「大きい・小さい」については、「～が高い・低い」「～が大きい・小さい」という終止形、「～の高い・低い」「～の大きな・小さな」のように後ろに名詞が続く形、「高い・低い～」「大きな～・小さな～」のように「～」を形容する形、について調査

を行った。

この他に、「～が上がる・下がる」の上下の動きで表す形、「～が増える・減る」という3次元への広がり動きを表す形についても「高い・低い」「大きい・小さい」との関連で調べている。

(今回の調査は「その表し方について使用例があるかどうか」を目的としている。このため、活用形については調べていない。)

2. 「～性」

まず名詞の後ろにある「性」についての意味を確認する。

〈日本国語大辞典精選版〉

⑤ (名詞の下に付いて) そのような性質、状態、程度であることを表わす語。

このように「性」がついて、その名詞に「性質、状態、程度」を付け加えることを表わしている。「～性」がついた場合、どのようにその語が運用されているのかについて分析を行う。以下、「～性」のつく語について分析を行う。

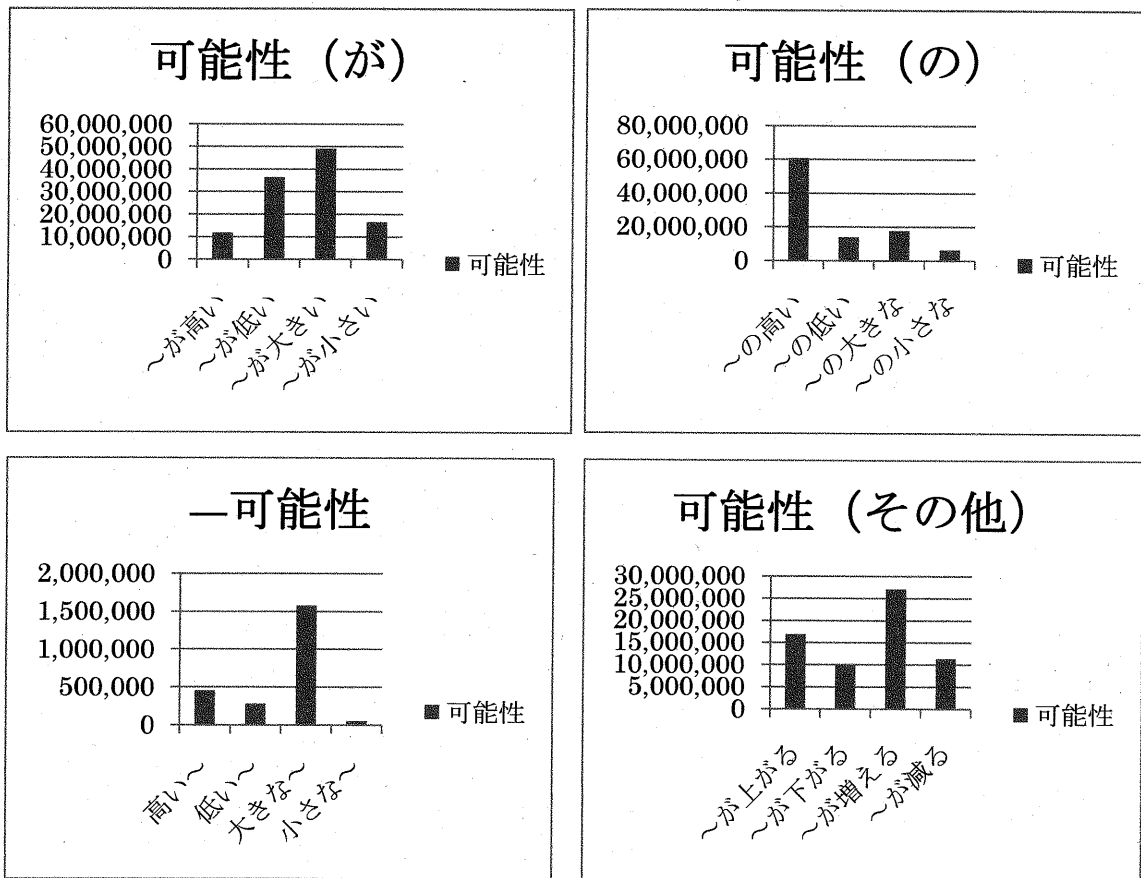
①可能性

「可能性」の検索結果と表は以下のようになった。(表1)(図2)

	可能性 (件)
～が高い	11,800,000
～が低い	36,500,000
～が大きい	49,100,000
～が小さい	16,600,000
～の高い	60,900,000
～の低い	14,000,000
～の大きな	17,800,000
～の小さな	6,490,000

高い～	454,000
低い～	281,000
大きな～	1,580,000
小さな～	55,500
～が上がる	16,900,000
～が下がる	9,870,000
～が増える	27,100,000
～が減る	11,400,000

(表 1)



(図 2)

まず、「可能性が高い」と「可能性が大きい」という使用を比べたとき、「可能性が大きい」の方が使用されやすいことが分かる。これは「可能性」と言う語を私たちが考えるときに、「可能性」という抽象的概念を立体物として考え、その物「が大きい」として認識してい

る。また「大きな可能性」のように連体詞の「大きな」も「可能性」にはよく使われる。これも「大きな可能性を持つ」という言い方ができるように、私たちが「可能性」という語を物として比喩的に認識していると考えられる。そして大きな物として認識することで一種の「価値性」を表わしている。

「大きな可能性」という語が多く用いられていることは、「大きな可能性」で一つのまとまりを持った言葉として考えられていると言える。そこには「可能性」という概念が持っている「期待」や「望み」というものが表れているのではないだろうか。

しかし、「可能性の」という「の」がつくときには、「可能性の高い」というほうが圧倒的によく使われている。また「可能性が小さい」や「可能性が小さな」は使用例があるが、「小さな可能性」は使用例が他に比べ少ない。「可能性の高い」は「可能性の高い～」という形で「～」に名詞が入ることが多い。

「可能性が高い」、「可能性の高い～」という使い方をするときは「可能性」を上下関係のレベルで、確率的に高いことを表わしている。「可能性の高い」が「可能性の大きな」より使用が多いのは、文中に「高い」「大きい」が挟まれるため、「大きい」の「価値」を表す効果が薄くなってしまうためだと考えられる。また確率としての「可能性」が重視され、「可能性の高い～」が使われるのではないだろうか。「可能性が小さい」や「可能性の小さな」が使われづらいのは、「大きい」に比べて、抽象的な比喩を表わす「小さい」は使われづらいためだと考えられる。「高い可能性」という語について使用数が少ないのは、「大きな可能性」に比べて「大きさ」が持っている「期待感」や「希望」が表せないためであると考えられる。

可能性はその他「可能性が上がる・下がる」、「可能性が増える・減る」とも言えるため、上下関係の動きでも、3次元方向の体積の動きでも言える。それだけ「可能性」という言葉は1次元的にも3次元的にも認識されていることが分かる。

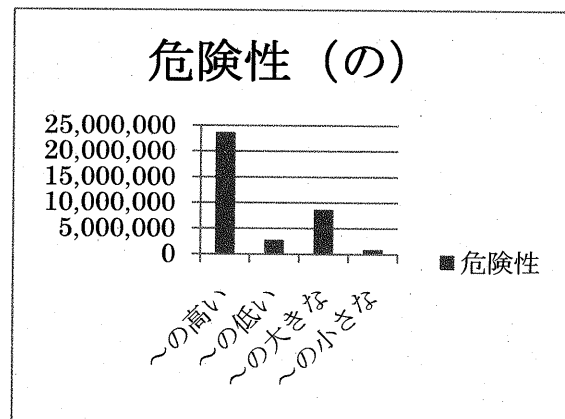
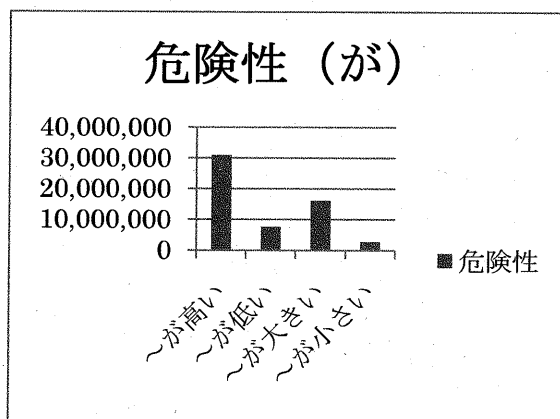
②危険性

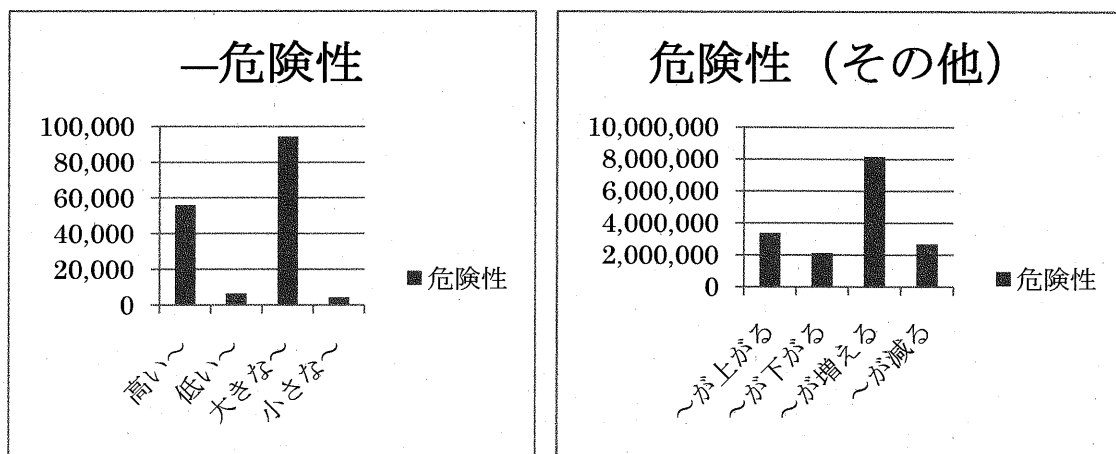
「危険性」の検索結果と表は以下のようになった。(表2)(図3)

	危険性 (件)
～が高い	30,900,000
～が低い	7,700,000

～が大きい	16,200,000
～が小さい	2,750,000
～の高い	23,700,000
～の低い	2,800,000
～の大きな	8,720,000
～の小さな	951,000
高い～	55,900
低い～	6,380
大きな～	94,500
小さな～	4,250
～が上がる	3,380,000
～が下がる	2,120,000
～が増える	8,170,000
～が減る	2,680,000

(表 2)





(図 3)

「危険性」については、「危険性が高い」「危険性が低い」「危険性が大きい」「危険性が小さい」とどれも使用例がある。しかし、危険性については「危険性が高い」「危険性の高い」のほうが「危険性が大きい」「危険性の大きな」よりも使われているのに対して、「高い危険性」は「大きな危険性」より使用率は少ない。これは「危険性が高い」や「危険性の高い」は上下関係を示す「高い」で表わすことでその度合いの量が著しいことを表わしている。この点で危険を「大きい」で表わすよりも程度の重大さを表わしていると考えられる。

一方で「大きな危険性」という言葉は、「大きな危険性をはらんでいる」というような言い方をするように、自分の内部に「危険性」という「問題」を抱え持っているような意味を持っている。このような意味の認識でより「危険」であることを表わしたいときに「大きな危険性」という言葉が用いられるのではないかと考えられる。

「低い危険性」や「小さな危険性」は言えないが、「高い危険性」や「大きな危険性」は用いることができ、まとまりのある語として考えられている。「高い危険性」は、科学的な根拠が背景にあることを示唆し、「大きな危険性」は「危険」に対する「不安」といった感情面を意味として持っている。

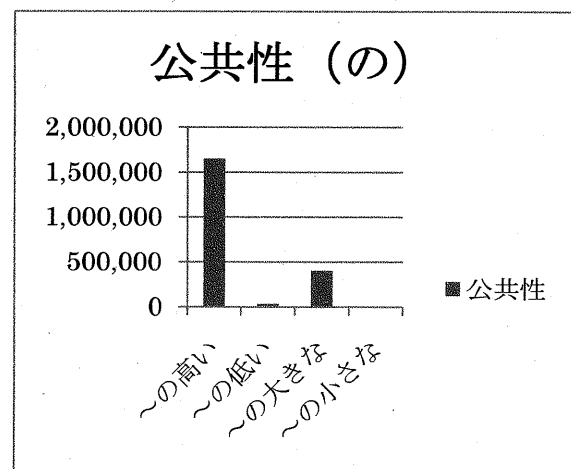
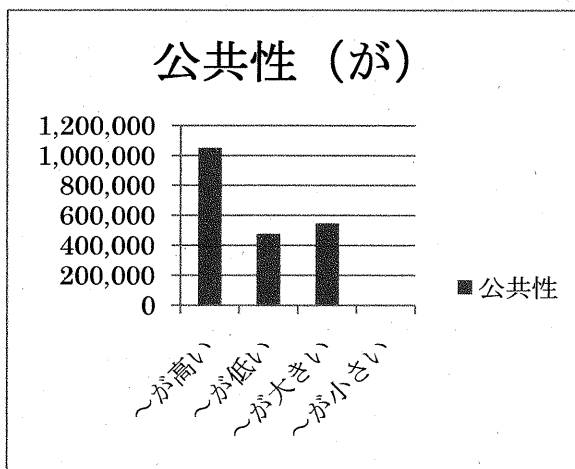
また危険性については全体的に「高い」「大きい」より「低い」「小さい」の使用例が少ない。これは「危険」を知らせる意味で「高い」「大きい」、そして「危険がある」、という言い方をするが、「低い」や「小さい」は使用頻度としては少ない。代わりに「危険性がない」という語の使用例が増えている。「低い」や「小さい」ということを伝えるよりも「ない」ことのほうが情報としては求められるからだと考えられる。

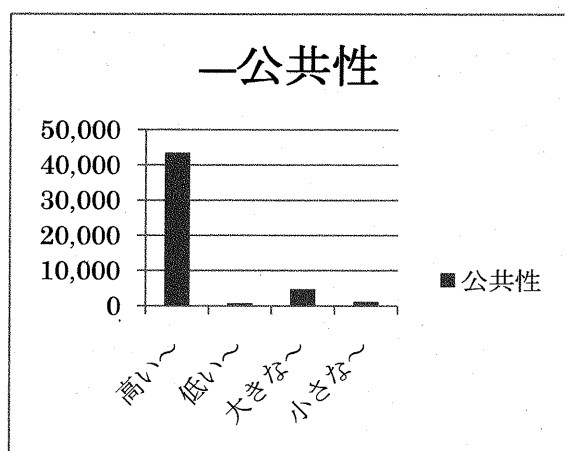
③公共性

「公共性」の検索結果と表は以下のようになった。(表 3) (図 4)

	公共性(件)
～が高い	1,050,000
～が低い	477,000
～が大きい	548,000
～が小さい	4
～の高い	1,650,000
～の低い	33,000
～の大きな	403,000
～の小さな	0
高い～	43,500
低い～	780
大きな～	4,820
小さな～	1,250
～が上がる	0
～が下がる	0
～が増える	1
～が減る	0

(表 3)





(図 4)

公共性については、どの形であっても「高い」が使われていることが分かる。「大きい」の方も使われてはいるが、どれも半数以下となる。また「公共性」という言葉は「公共性が低い」という使われ方はするが、それ以外での使用は少ない。

これは「公共性」という言葉が「高い・低い」という上下の関係で認識されることが多いためである。しかし「公共性」という言葉が広がり、価値的な面から「大きい」が使われ始めていると考えられる。このため、まだ「大きい」形の言葉の使用は少なく、「小さい」形のほうはほとんど使用が確認できない。

同様に「公共性の大きな」「高い公共性」は言うことができるが、「公共性の大きな」「大きな公共性」という言葉の使用は少ない。このことから、「公共性」と言う概念が科学的、数値的な語を持っている概念として認識されていると言える。

また、「公共性」という言葉は状態を表す言葉であると考えられる。ゆえに「公共性が上がる・下がる」「公共性が増す・減る」という量の増減を言葉の使用がほとんど見られない。

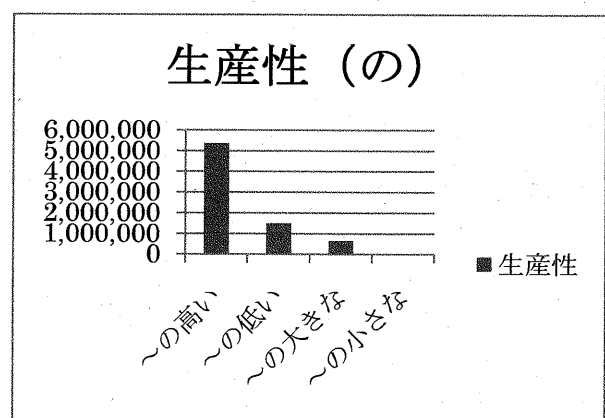
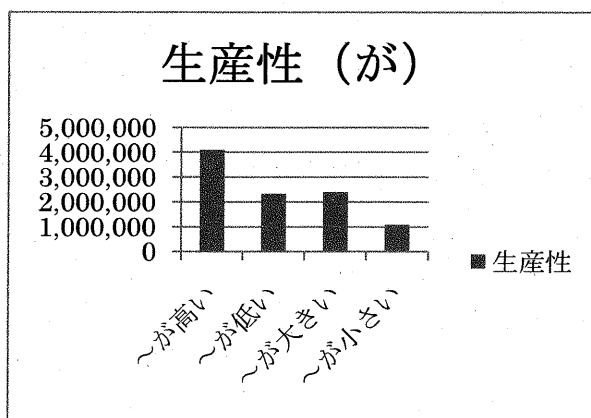
④生産性

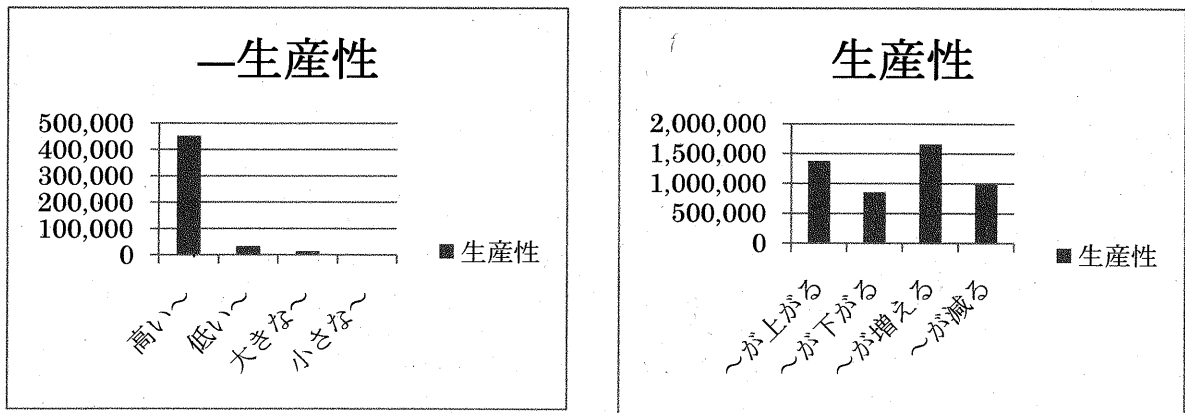
「生産性」の検索結果と表は以下ようになった。(表 4) (図 5)

	生産性 (件)
〜が高い	4,100,000
〜が低い	2,330,000
〜が大きい	2,400,000

～が小さい	1,080,000
～の高い	5,370,000
～の低い	1,510,000
～の大きな	646,000
～の小さな	7
高い～	452,000
低い～	33,200
大きな～	14,000
小さな～	984
～が上がる	1,380,000
～が下がる	854,000
～が増える	1,660,000
～が減る	992,000

(表 4)





(図 5)

「生産性」は「高い」形は全て言うことができる。また「生産性が高い・低い」「生産性が大きい・小さい」も使われている。また「生産性上がる・下がる」「生産性が増える・減る」という動きを表す言い方もできるため、「生産性」という言葉は上下の 1 次元的な関係でも 3 次元的な関係でも表すことができる。これは「生産性」という言葉が上下の数値としても、物体としても認識ができるからだと考えられる。

しかし、「大きな生産性」等の言い方が出来ないように、「大きな生産性を持つ」等の言い方はできないし。また「生産性の大きな～」は使用数が少ない上、「生産性の大きな伸び」や「生産性の大きな差」等、「大きな」は後ろの名詞にかかっている用法が多い。

ではなぜ「生産性が大きい・小さい」のみが言えるのか。それは、「大きい・小さい」が 3 次元的な物体を表すと同時に「価値」の量を「物体」として比喻して言っているためではないだろうか。また「生産性」の量が大きいと当然 (+) の評価であり、小さいと (-) の評価となる。このように「生産性が大きい・小さい」という言葉は物体として比喻することで評価性をあたえていると考えられる。

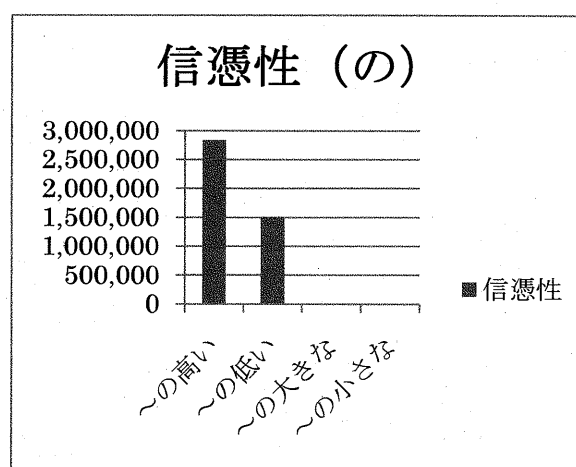
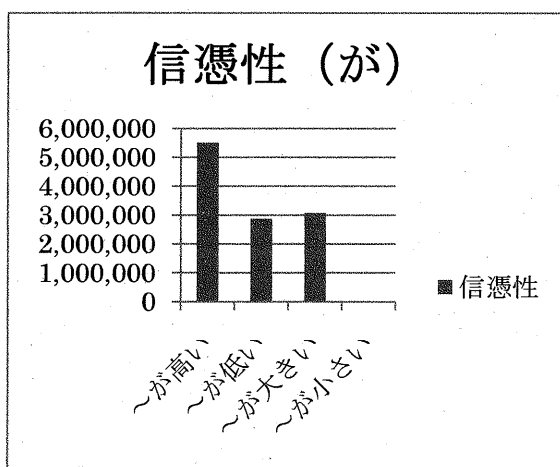
しかし、「高い生産性」という言葉の使用は多いが、「大きな生産性」という言葉の使用は少ない。これは「生産性」と言う概念が「生産」する量としての数値的な要素を持っているためであると考えられる。「大きな生産性」という言葉ではこのような数値的な側面が表せないと考えられる。

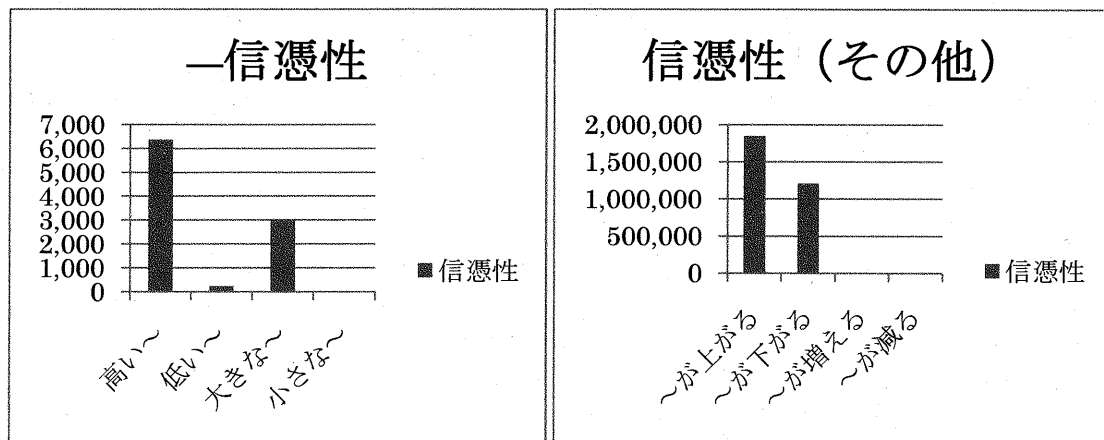
⑤信憑性

「信憑性」の検索結果と表は以下ようになった。(表 5) (図 6)

	信憑性（件）
～が高い	5,510,000
～が低い	2,880,000
～が大きい	3,080,000
～が小さい	1
～の高い	2,840,000
～の低い	1,510,000
～の大きな	0
～の小さな	0
高い～	6,370
低い～	240
大きな～	3,020
小さな～	0
～が上がる	1,850,000
～が下がる	1,210,000
～が増える	4
～が減る	8

（表 5）





(図 6)

「信憑性」という言葉は「高い・低い」形で表されることが多い。しかし、「信憑性が大きい」と「大きな信憑性」と言う言い方はできる。「信憑性が大きい」が使われるのには、「大きい」が意味の中に持っている「評価性」のためではないかと考えられる。また、「大きな信憑性」という使用が見られるのは、「大きな信憑性を持つ」や「大きな信憑性を与えた」という言い方ができるため、「信憑性」と言う概念を「3次元性を持つ物体」として私たちが認識しているためだと言える。

「高い信憑性」というものは、情報として数値的に、科学的に「信じられるかどうか」という概念を表し、「大きな信憑性」と言うところで得られた情報の「価値性」が表れるものと考えられる。

また「信憑性が上がる・下がる」は言えるが、「信憑性が増える・減る」という言い方はほとんど見られない。これは「信憑性」という概念が上下関係の動きでしか認識できないことを示している。「物体」の比喻を使っている、それを動きの概念も含めては考えていないからであろう。

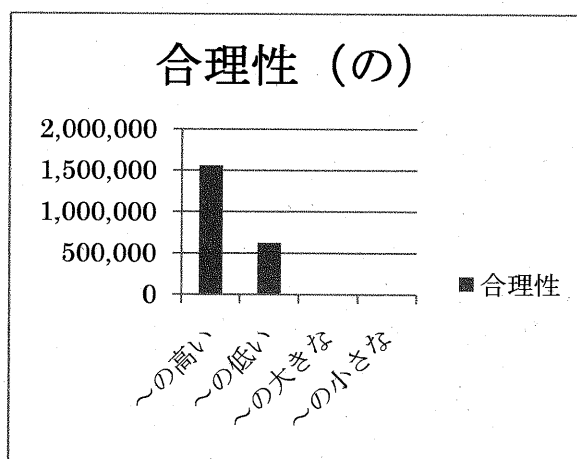
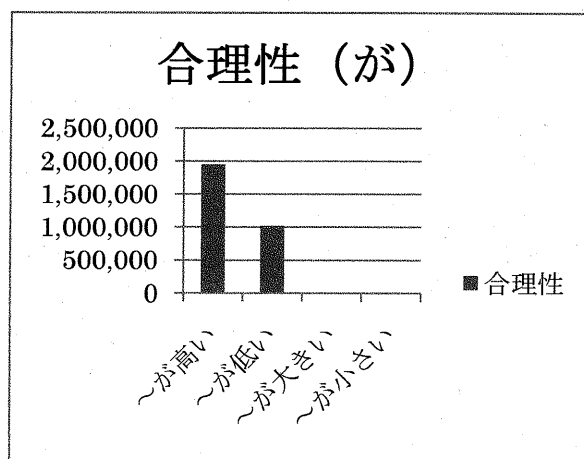
「信憑性」については、「信憑性が大きい」は言えても「信憑性が小さい」とは言えない。価値性を伝えるため、つまり情報として必要なため、「大きい」は使えても、価値性を伝えることがないため、つまり情報としてあまり必要ないため、「小さい」が使いづらいと考えられる。

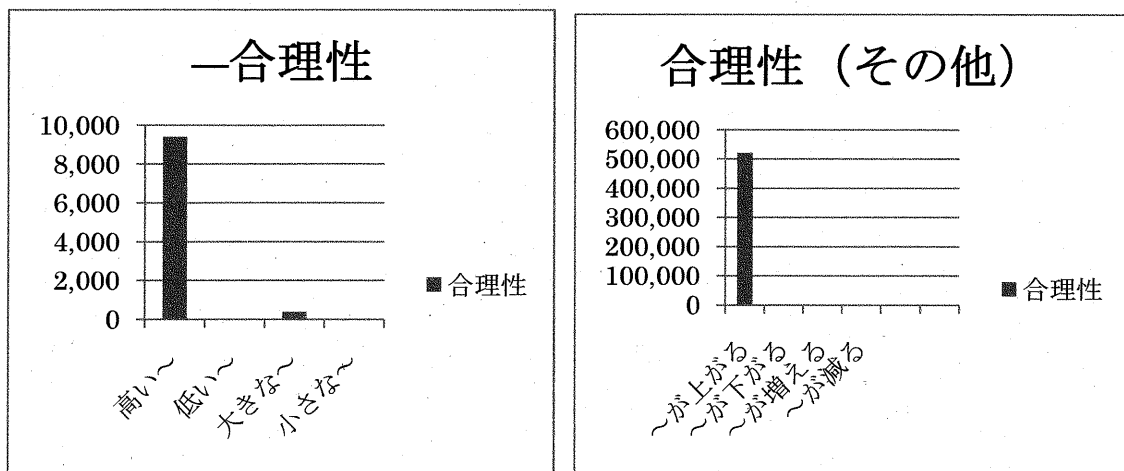
⑥合理性

「合理性」の検索結果と表は以下ようになった。(表 6) (図 7)

	合理性(件)
～が高い	1,950,000
～が低い	1,020,000
～が大きい	7
～が小さい	0
～の高い	1,560,000
～の低い	623,000
～の大きな	2
～の小さな	0
高い～	9,410
低い～	5
大きな～	387
小さな～	46
～が上がる	521,000
～が下がる	1
～が増える	0
～が減る	0

(表 6)





(図 7)

「合理性」という言葉の概念では「高い・低い」形で表すことはできるが、「大きい・小さい」形ではほとんど表すことが出来ない。（「大きな合理性」は少し使用があるのは、「大きな合理性を持つ」等の用いられ方が少しされているからである。）また 3 次元方向の動きを表す「増える・減る」で言い表すこともできない。

これは、「合理性」というものに対して、「物体」や「価値」の認識が生まれにくいためであると考えられる。「合理性が高い」や「高い合理性」という使われ方が圧倒的に多いのは、「合理性」というのはどちらかという学術的・科学的な語であることと関連しているのではないだろうか。温度や確率というような数値等を表す場合、「高い」が使われる。それと同じように「合理性」という本来数値化できない語を数値化のように比喻して使っているのではないだろうか。また「低い合理性」とも言いにくいため、「高い合理性」という一つのまとまりを持った言葉として認識されていると考えられる。

このような理由から、「合理性」は「高い・低い」でしか言い表すことが出来ないと考えられる。

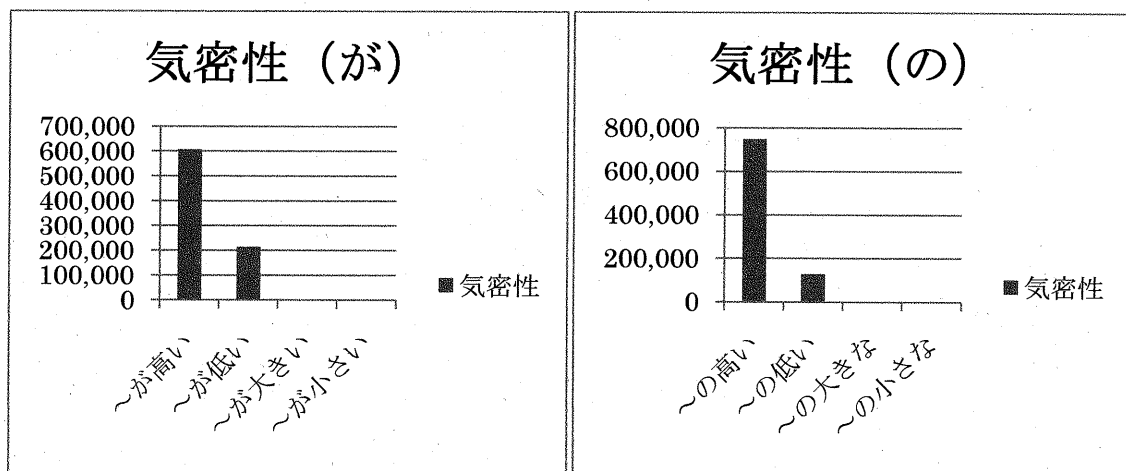
⑦気密性

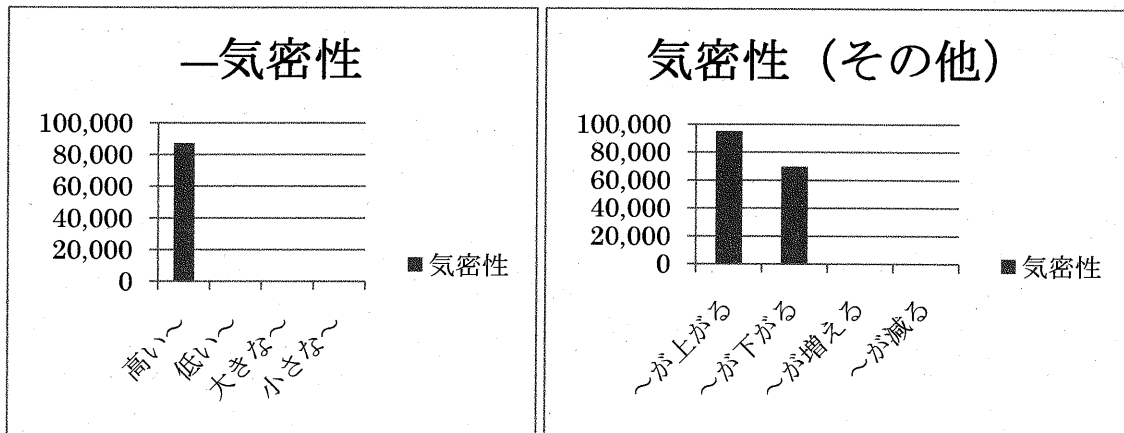
「気密性」の検索結果と表は以下のようになった。（表 7）（図 8）

	気密性（件）
〜が高い	607,000
〜が低い	214,000

～が大きい	6
～が小さい	0
～の高い	748,000
～の低い	129,000
～の大きな	1
～の小さな	0
高い～	87,200
低い～	105
大きな～	9
小さな～	64
～が上がる	95,100
～が下がる	69,800
～が増える	0
～が減る	0

(表 7)





(図 8)

「気密性」という言葉についても「高い・低い」形でしか言い表すことが出来ない。これは「気密」という語がもともと「気体がいっぱい出入りができない」状態を表しているからではないだろうか。すでにいっぱいの状態、一つのできあがった状態に対しては「大きい」や「増える」という3次元の言葉では表しにくいのではないだろうか。

また「気密性」という語は「危険性」「可能性」という語に比べ、科学的・学術的な場面で使われることが多いと考えられる。ゆえに上下の関係で、数値化して考えることになる「高い」が多く使われていると考えられる。このため科学的な意味としては曖昧となる「大きい・小さい」の関係では言いにくく、認識として広がっていかない概念であると考えられる。

「高い気密性」という言葉は、逆の「低い気密性」とは言いにくい。このため「高い気密性」で一つの状態を表したまとまりを持っていると言える。

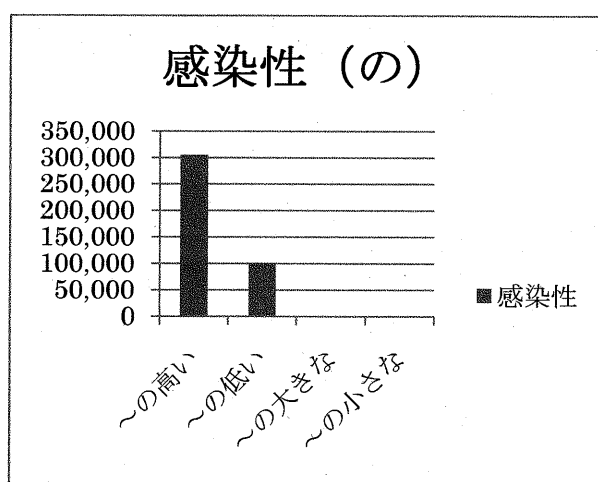
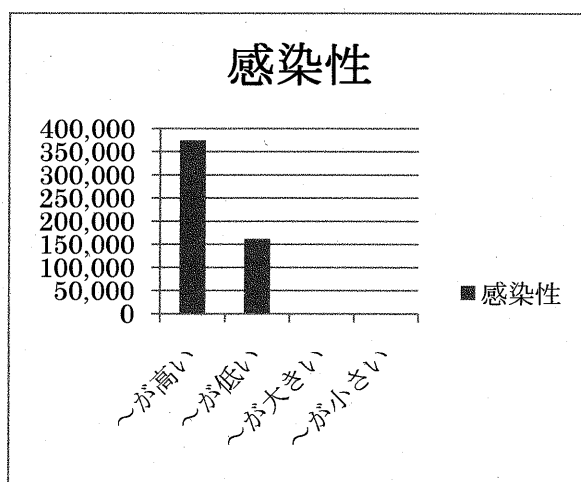
⑧感染性

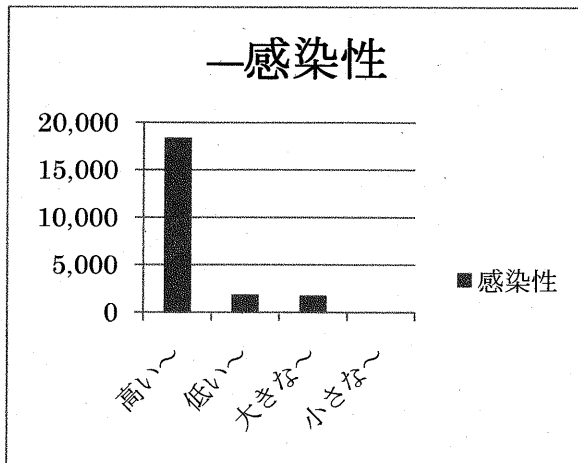
「感染性」の検索結果と表は以下ようになった。(表 8) (図 9)

	感染性 (件)
〜が高い	374,000
〜が低い	162,000
〜が大きい	1

～が小さい	0
～の高い	305,000
～の低い	101,000
～の大きな	6
～の小さな	1
高い～	18,400
低い～	1,880
大きな～	1,790
小さな～	8
～が上がる	1
～が下がる	0
～が増える	0
～が減る	1

(表 8)





(図 9)

「感染性」は主に「高い・低い」でしか言い表すことが出来ない。これも「感染性」と言う語が科学的な用語であることと、「感染」というある状態がすでにある状態では「物体」の量を表せないことから「大きい・小さい」では言い表せないと考えられる。

しかし、「大きな感染性」という言葉は若干ではあるが使われている。これは「感染性」という言葉が「感染性を持つ」というような言い方が出来るためである。これは「感染性」という概念が「物体」としての比喩を持つことで、重大性があるものとして認識させるためではないかと考えられる。

一方で使用数が多い「高い感染性」という言葉は、科学的に、具体的な数値として「感染性」と言う概念が認識されていることを表す。「低い感染性」というものも少し使用があるものの重要視されているものは「高い感染性」である。このため「高い感染性」というものが一つのまとまりを持った語として認識されていると考えられる。

また、「感染性」という概念は「〜が上がる・下がる」、「〜が増える・減る」という使用がない。これは「感染性」が、程度の変動のあるものとしての認識はなく、「高い・低い」という状態でしか考えられない。これは「感染」するものが、一定の程度をもともと持っており、途中で変化することがないからだと考えられる。

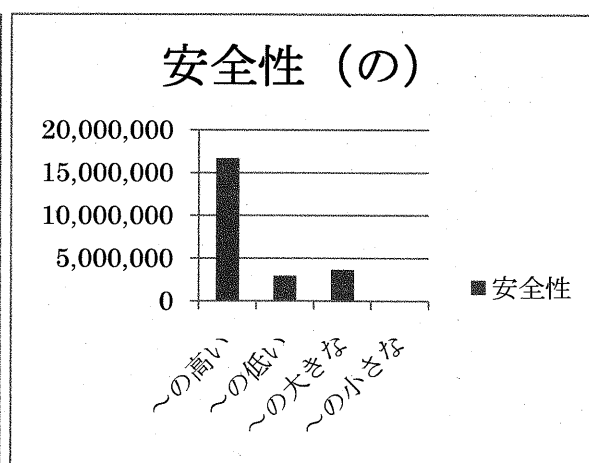
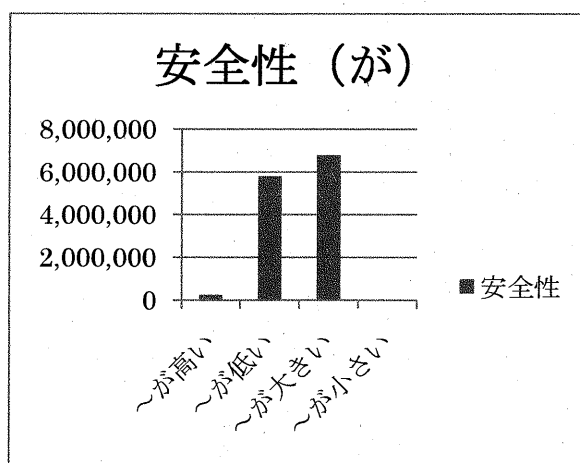
⑨安全性

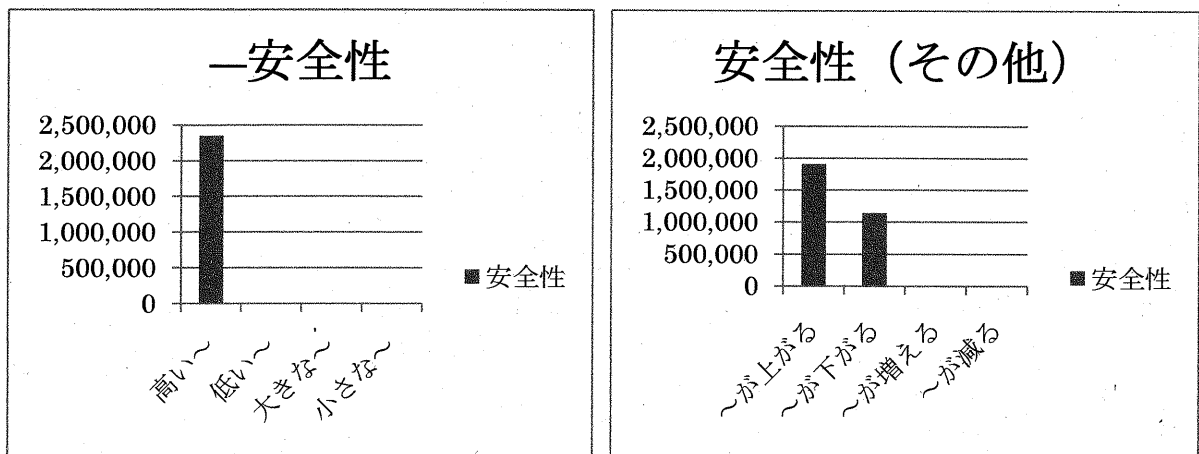
「安全性」の検索結果と表は以下ようになった。(表 9) (図 10)

	安全性 (件)
--	---------

～が高い	252,000
～が低い	5,800,000
～が大きい	6,780,000
～が小さい	2
～の高い	16,700,000
～の低い	2,940,000
～の大きな	3,640,000
～の小さな	1
高い～	2,350,000
低い～	11,500
大きな～	12,300
小さな～	447
～がある	25,300,000
～がない	16,500,000
～が上がる	1,910,000
～が下がる	1,140,000
～が増える	10
～が減る	4

(表 9)





(図 10)

「安全性」については「安全性が高い」よりも「安全性が大きい」の方が圧倒的に使用されている。しかし、一方で「安全性が小さい」等、「小さい」形で使われることはほとんどない。

これは「安全性」というものが、空間的な3次元方向で表したほうがより「安心」であることを表せるからだと考えられる。数値的な比喩で表される「高い」よりも空間的に「大きな物」として「安全」を捉えることで「安心感」を与えていると考えられる。一方で「安全性が小さい」という言い方が出来ないのは、人々に「安全でない」「危険である」ということを伝えるためには、「物体」というもので知らせるよりも、数値的に「低い」と認識させるほうがはっきりと伝わるためではないだろうか。

また「小さい」が持つ情報としての「価値性」というものが、「大きい」に比べて伝わりにくいのも、「小さい」が使いにくい理由になると考えられる。「安全性が大きい」ということを伝えるよりも「安全性が小さい」と伝えることは少ない。それを伝える際には「危険性が高い」、「危険性が大きい」を用いるためである。

しかし「高い」「大きな」では「高い安全性」が多く用いられる。「大きな安全性」という言葉は使用例が少ない。これは「大きな安全性を持つ」等の言葉が、あまり認知されないためである。これらの言葉が考えにくい理由として、「大きい」という言葉が3次元的な空間的に広がりがある一方で、「漠然としている」という認識を与えてしまうからではないだろうか。「大きな安全性」より、具体的、数値的なものを表している「高い安全性」のほうが伝わりやすいためだと考えられる。

また「高い安全性」は言葉として一つのまとまりを持っていると考えられる。一方で「大

きな安全性」はこのようなまとまりを持っていない。このために「安全性が高い」よりも「高い安全性の～」と言う用法が多いと考えられる。

以上「～性」という概念について分析を行った。その結果、「高い・低い」形が用いられる概念、「大きい・小さい」形が用いられる概念それぞれ異なっていた。「安全性」と「危険性」では対義語関係にあるがその語における語の用いられ方には違いがあることが示された。

「高い・低い」が用いられる概念と「大きい・小さい」が用いられる概念では「評価」の面が強く関わっている。また、概念によって認識のされ方が変わっていることが分かる。

「～性」が付く概念は具体的に数字で表せることが少ない。そのため、「物体」的な比喻で認識されるものは「増える・減る」が使えるが、認識されないものについては使えないというものがはっきりと表れている。

3. 「～度」

まず、「～度」の辞書的な意味を確認する。

〈日本国語大辞典精選版〉

①物事の程度をさしている。ほど。限り。また、基準。きまり。

④測量、器具にしるされる目盛。また、その単位。

このように「度」という概念は、その前のさまざまな名詞の「程度」の量を示している。これらのつく語にどの程度「高い・低い」、「大きい・小さい」が結びつくかを見ていく。

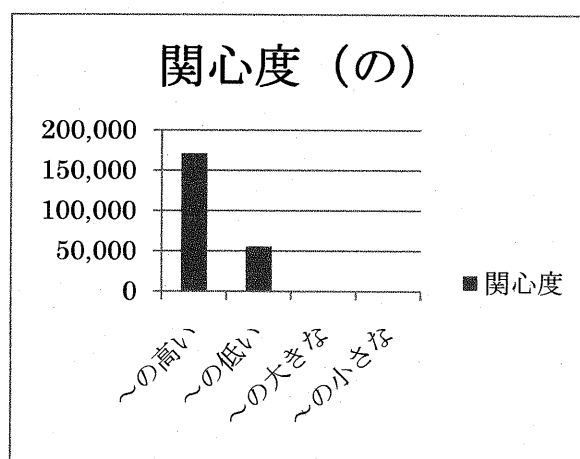
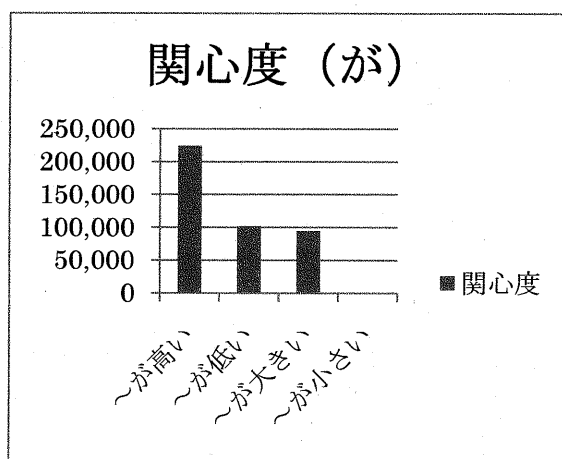
①関心度

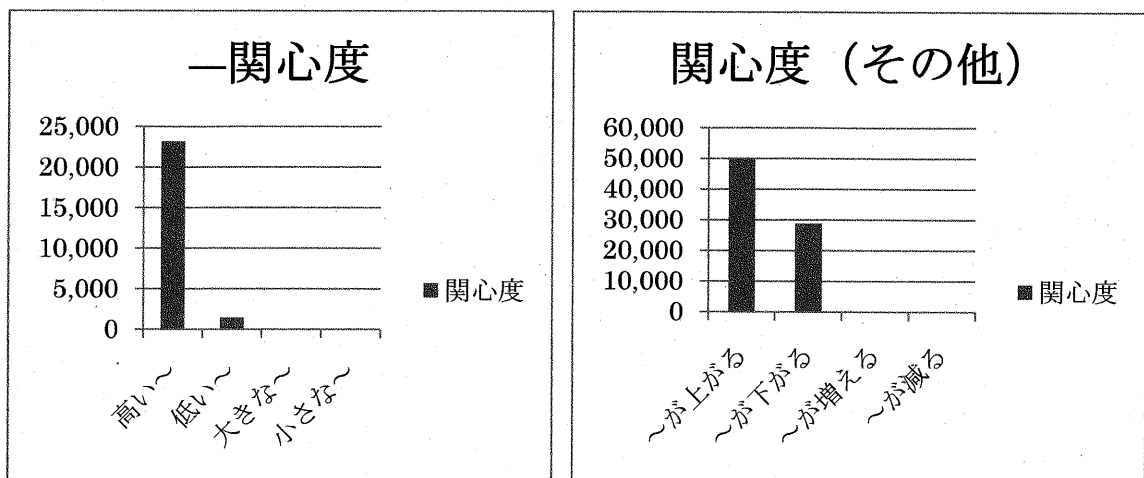
「関心度」の検索結果と表は以下ようになった。(表 10) (図 11)

	関心度 (件)
--	---------

～が高い	224,000
～が低い	102,000
～が大きい	94,800
～が小さい	4
～の高い	143,000
～の低い	482,000
～の大きな	2
～の小さな	0
高い～	23,200
低い～	1,450
大きな～	5
小さな～	0
～が上がる	49,900
～が下がる	28,900
～が増える	0
～が減る	0

(表 10)





(表 11)

「関心度」は「関心度が大きい」のみ、「大きい」形で表すことができるが、その他の「関心度の大きな」や「大きな関心度」という使用は少ない。

「関心度が大きい」は、あることに対する「関心」についての評価が「大きい」として表されていると考えられる。一方で「関心度が高い」は、「関心」の度合いについて、数値があるかのように表されている。そのため、人の評価がより表しているものが「関心度が大きい」であると考えられる。

「関心度の大きな」が使われないのは、句中に「大きな」がくると「大きい」が持つ価値性が失われてしまうためではないだろうか。また主語の場合は、価値性について言いやすいが、「の」で後ろに続く場合、価値性について言いづらくなることも考えられる。

「大きな関心度」については、「大きな関心を持つ」とは言えるが「大きな関心度を持つ」とは言いづらい。このため、「関心」については物体として比喻できても、「関心度」となると「物体」として認識されづらく、「高い・低い」の上下関係で認識されやすいことが分かる。「関心度が上がる・下がる」しか使えず、「関心度が増える・減る」が言えないのもこのためである。文末に「価値」として認識される場合のみ、「大きい」が用いられる。

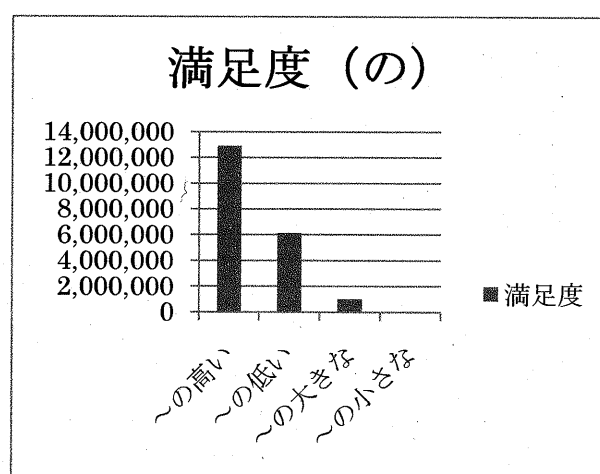
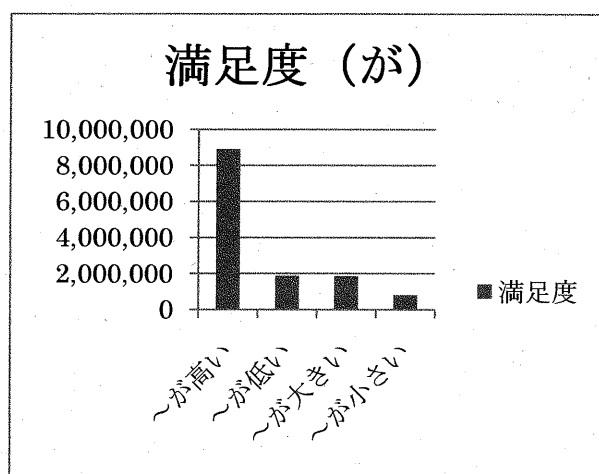
一方で「高い関心度」というものは数値的に関心が高いことを暗に示しており、「関心度」の高さに科学的根拠があるように、認識される。そのことも「高い関心度」のみが使用される背景にあるのではないかと考えられる。

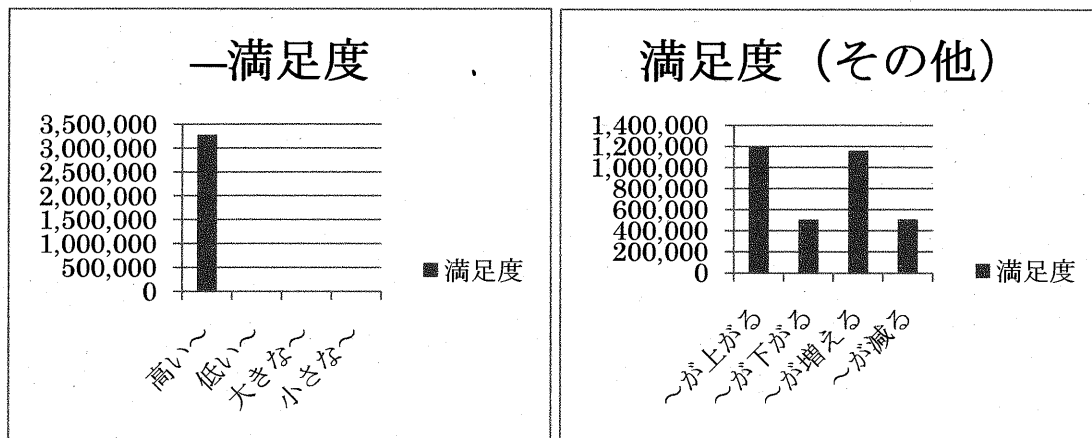
②満足度

「関心度」の検索結果と表は以下ようになった。(表 11) (図 12)

	満足度（件）
～が高い	8,910,000
～が低い	1,880,000
～が大きい	1,860,000
～が小さい	804,000
～の高い	12,900,000
～の低い	6,140,000
～の大きな	1,020,000
～の小さな	0
高い～	3,280,000
低い～	8,730
大きな～	19,300
小さな～	1,210
～が上がる	1,200,000
～が下がる	506,000
～が増える	1,160,000
～が減る	511,000

(表 11)





(図 12)

「満足度」は「満足度が高い・低い」とも、「満足度が大きい・小さい」とも言うことができる。また動きを表す「満足度が上がる・下がる」「満足が増える・減る」も使用している。このことから、「満足度」という概念が上下の関係でも、3次元の空間を持つものとしても認識されていることが分かる。

なぜ、「満足度」と言う語がどちらにも認識されているのか。それは「満足」という言葉がもともと一定の人としての評価を表すと同時に、「満足度」のように「度」がつくことで数値化して認識しているためだと考えられる。そのため、「評価」を表す「大きい」と、「数値」を表す「高い」が同時に使われる。

しかし、「満足度が大きい」は言えるが、「大きな満足度」は「高い満足度」より使用例は少ない。「満足度」は「物」としての比喩はされてはいない。「大きな満足度を持つ」というような言い方は見つからなかった。「満足度」を曖昧な「物」として認識するよりも、「数値」があるような上下関係で認識される方がより相手に伝わりやすいと考えているからではないだろうか。また「高い満足度」というものは、数値的に「満足」している人が多く、科学的に根拠を持っているという意味を表している。このため「高い満足度」は一つのまとまりをもって使用されている。

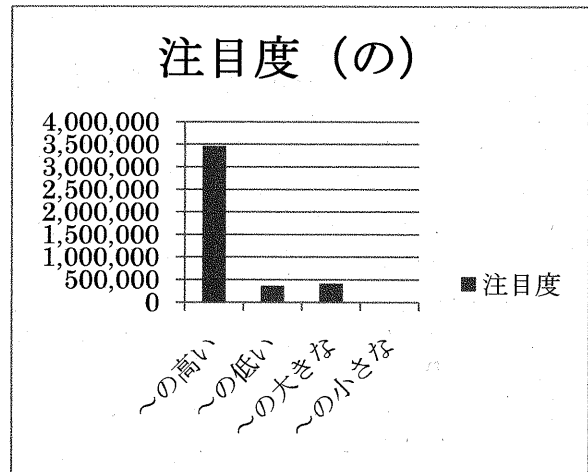
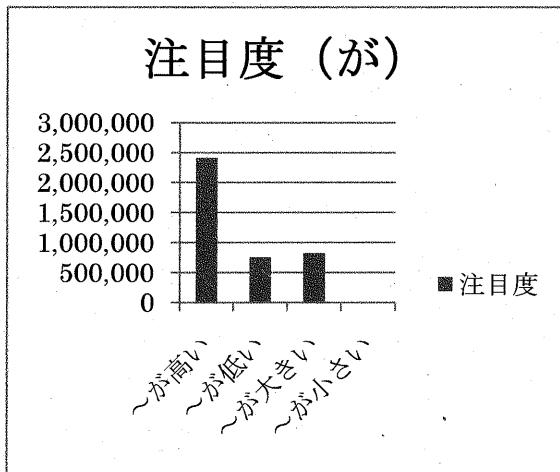
③注目度

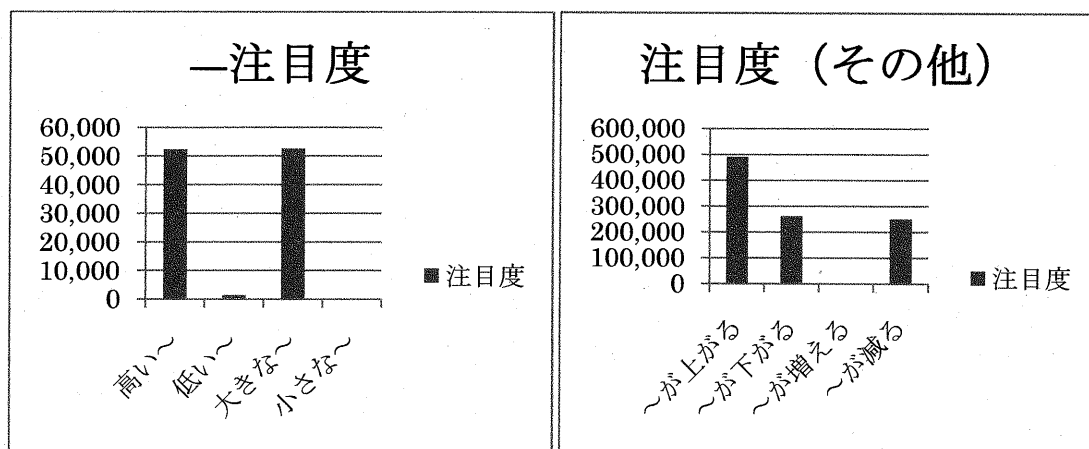
「注目度」の検索結果と表は以下のようになった。(表 12) (図 13)

	注目度 (件)
--	---------

～が高い	2,410,000
～が低い	758,000
～が大きい	824,000
～が小さい	10
～の高い	3,460,000
～の低い	369,000
～の大きな	419,000
～の小さな	0
高い～	52,400
低い～	1,400
大きな～	52,600
小さな～	1
～が上がる	491,000
～が下がる	261,000
～が増える	7
～が減る	250,000

(表 12)





(図 13)

「注目度」という概念は、「高い」でも「大きい」でも言うことができる。特に「高い注目度」と「大きな注目度」はどちらも同じくらいの頻度で用いられている。「大きな注目度を集める」「大きな注目度を誇る」等の言い方は、「注目度」という概念を空間的な広がりを持つ「物体」として比喩的に認識していることを表している。そのような「物体」として比喩されるのは、「注目」されているものの評価が「大きな」ものとして認識されているからだと考えられる。ゆえに情報としてあまり必要とされない「注目度が小さい」という言葉はほとんど使われることがない。

また、「注目度の高い〜」はよく使用されているが、「注目度の大きな〜」はあまり使われていない。名詞に繋がる場合は評価を表す「大きい」が使用されにくいためだと考えられる。名詞に続く場合は上下関係を表す「高い」のほうが、受け取り側に数値的に、具体的に「高い」という認識を与えることが出来るためである。

「注目度が増える」という使用が少ないのに対して、「注目度が減る」が多く使われている。「注目度」が3次元の動きで認識されるとき、「減る」という言葉を使うことによって、言葉の受け取り手にとって「減る」ことが何かマイナス面に繋がるような、重要な情報となるためであると考えられる。

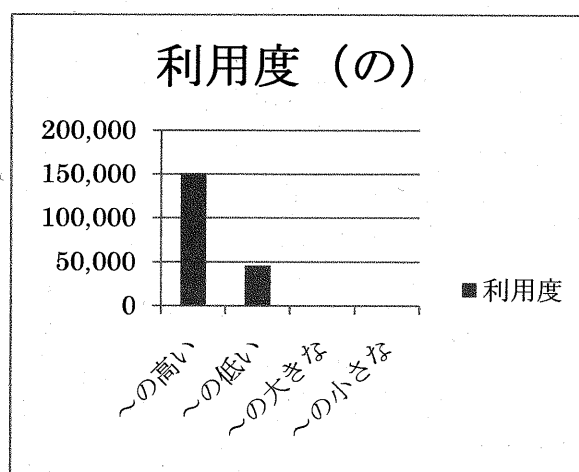
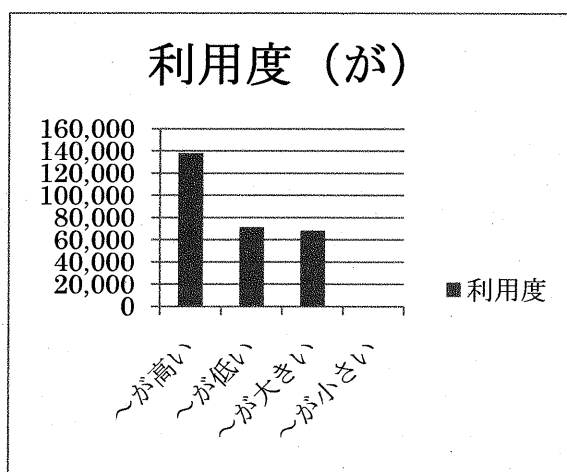
④利用度

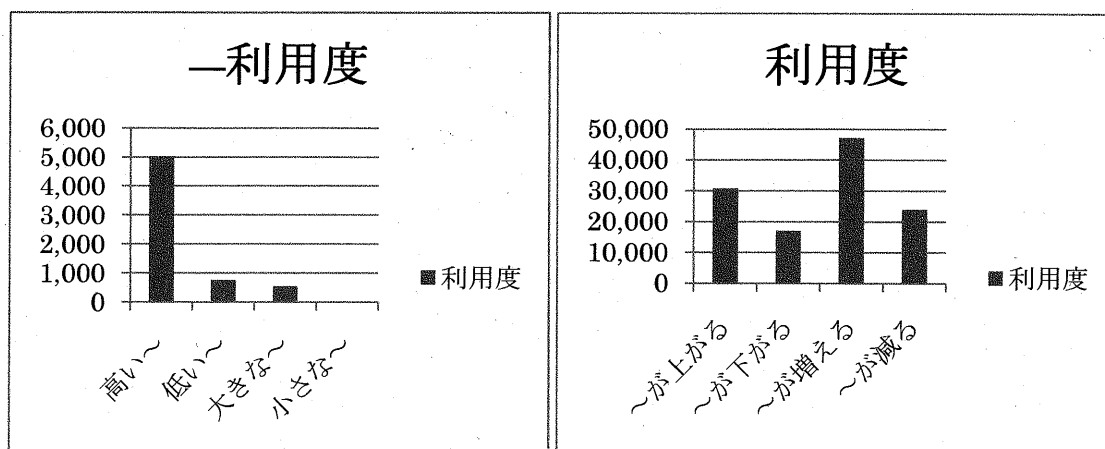
「利用度」の検索結果と表は以下ようになった。(表 13) (図 14)

	利用度 (件)
--	---------

～が高い	138,000
～が低い	71,200
～が大きい	68,200
～が小さい	5
～の高い	151,000
～の低い	45,900
～の大きな	3
～の小さな	1
高い～	5,020
低い～	759
大きな～	551
小さな～	1
～が上がる	30,800
～が下がる	17,000
～が増える	47,200
～が減る	24,000

(表 13)





(図 14)

「利用度」については「利用度が高い・低い」は言うことができる。しかし、「利用度が大きい」は言えるが、「利用度が小さい」とは言えない。「利用度が大きい」が言えるのは、利用の量が「大きい」ことで何らかのプラスの効果を伝えるためであると考えられる。そう考えると「利用度が大きい」の「大きい」は、人の「評価」が「大きい」ことを表している。「評価」を表す「大きい」はあまり名詞の前では用いられないため、「利用度の大きな・小さな」は言うことが出来ないと考えられる。

しかし、「利用度が小さい」は言えないが、「利用度が減る」という言い方は若干使用が見られる。これは、「利用度が増える・減る」というものが、具体的な「数値」で表すことが可能となるため、その「数値」の「増減」を表しているためだと考えられる。

「利用度」については「高い利用度」という表現を多く用いる。これは利用する割合を具体的な数値で表すことが出来るためである。数値的に考えず評価的に考える「大きな利用度」という言い方は用例が少ない。このため、「利用度」は、数値的に考えられている概念と言える。

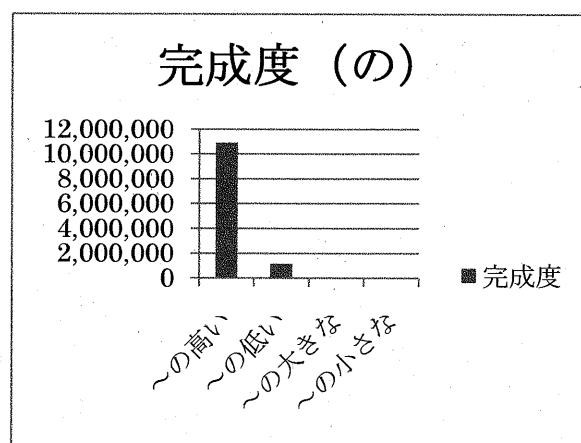
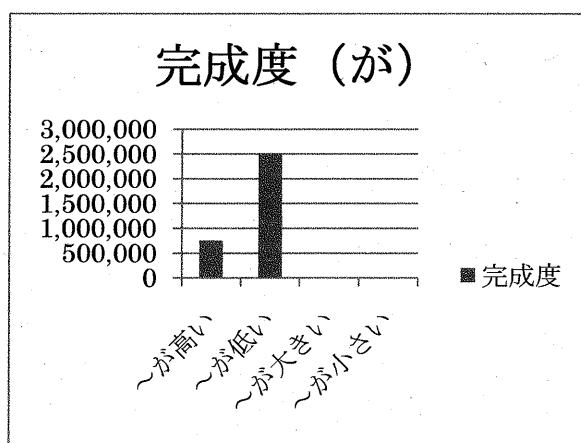
⑤完成度

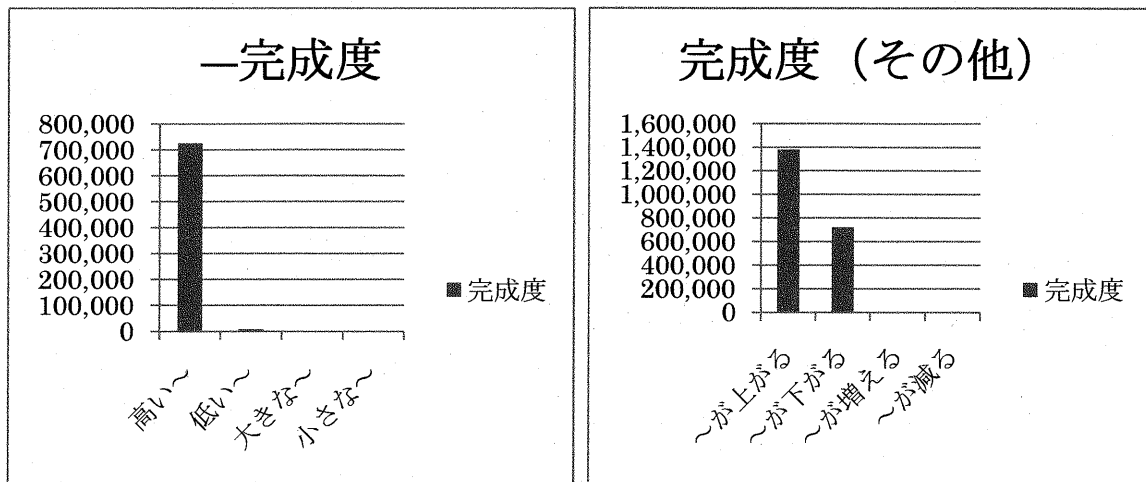
「完成度」の検索結果と表は以下のようになった。(表 14) (図 15)

	完成度 (件)
〜が高い	728,000

～が低い	2,360,000
～が大きい	10
～が小さい	1
～の高い	10,900,000
～の低い	1,170,000
～の大きな	6
～の小さな	0
高い～	726,000
低い～	8,300
大きな～	97
小さな～	63
～がある	8,060,000
～がない	6,050,000
～が上がる	1,380,000
～が下がる	721,000
～が増える	4
～が減る	0

(表 14)





(図 15)

「完成度」という概念は、「完成度が高い・低い」は言うことができる。しかし、「完成度が大きい・小さい」とは言うことが出来ない。これは「完成度」という概念が空間的な量としては捉えられておらず、「完成度」という抽象的なものを「数値化」して表していると言える。

「完成度が上がる・下がる」は使えるが、「完成度が増える・減る」が言えないため、「完成度」を「物体」としては認識できない。しかし、「評価」に対して、「大きい」ことは言うことができる。

また「高い完成度」のように名詞形に付く形では、「高い」のみが用いられている。これは「高い完成度」で一つのまとまった語として、使われているためだと考えられる。「高い完成度を誇る〜」等の言い方がまとまった形で出現している。つまり「完成度」は一つのまとまりを持った状態であると考えられる。「完成度」というものは実際の数値では表せないが、「完成」するための尺度を数値的な上下関係で示していると考えられる。このため「大きな完成度」は用例が少なくなる。

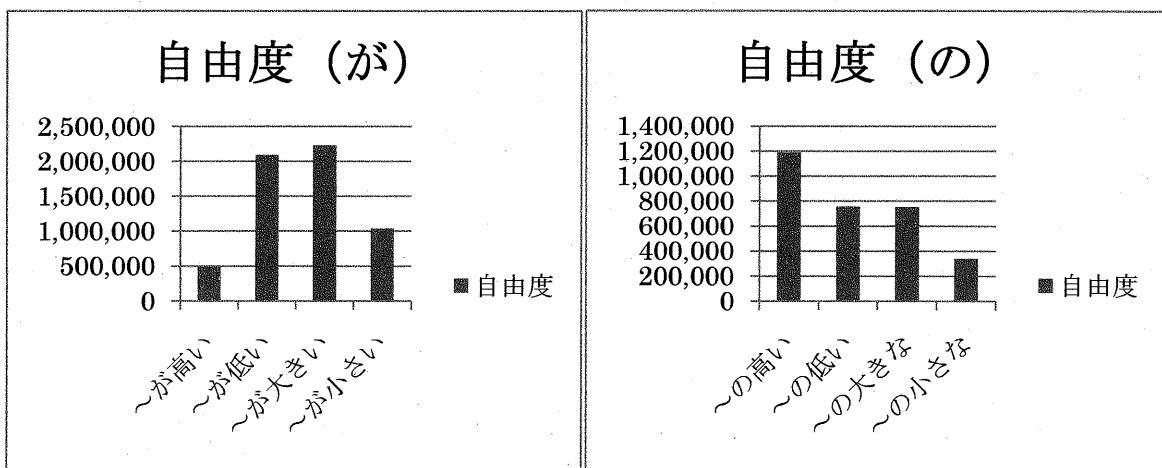
一方で「低い完成度の〜」という言い方はあまりされていない。この場合は「完成度が低い〜」のほうがよく使われる。

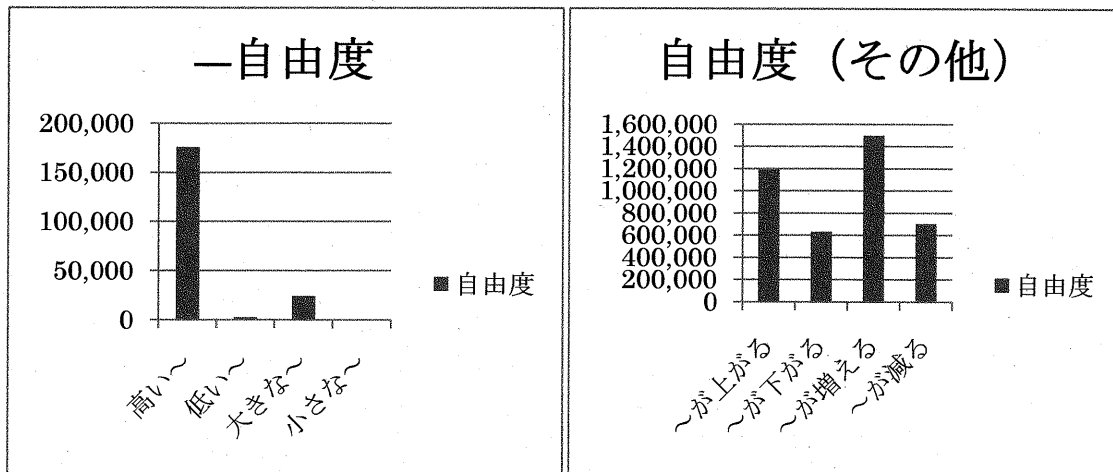
⑥自由度

「自由度」の検索結果と表は以下ようになった。(表 15) (図 16)

	自由度（件）
～が高い	490,000
～が低い	2,090,000
～が大きい	2,230,000
～が小さい	1,040,000
～の高い	1,190,000
～の低い	757,000
～の大きな	752,000
～の小さな	340,000
高い～	176,000
低い～	2,520
大きな～	24,200
小さな～	652
～が上がる	1,190,000
～が下がる	633,000
～が増える	1,500,000
～が減る	703,000

(表 15)





(図 16)

「自由度」という概念は、「高い・低い」形、「大きい・小さい」形、どちらも使用されている。また「自由度が上がる・下がる」、「自由度が増える・減る」とどちらも言うことが可能である。これは「自由度」という概念が 1 次元、数値的なものとしても、3 次元の「物体」の比喩としても認識されている、ということになる。

「自由度」という概念は、「自由」に「度」のついた形となるため、「自由」が 3 次元的な「空間」を広がりのあるものとして認識されているため、「大きい・小さい」形で表せると考えられる。特に「自由度が大きい」という形は「自由度が高い」よりも多く用いられる。

一方で「高い自由度」は「大きな自由度」よりも多く用いられる。「自由度が大きい」と言うと、評価の「大きさ」を表すことが出来る。一方「高い自由度」のほうは「大きな自由度」よりも、「自由度」が数値的に、具体的に「高い」ことを表すために用いられるのではないだろうか。

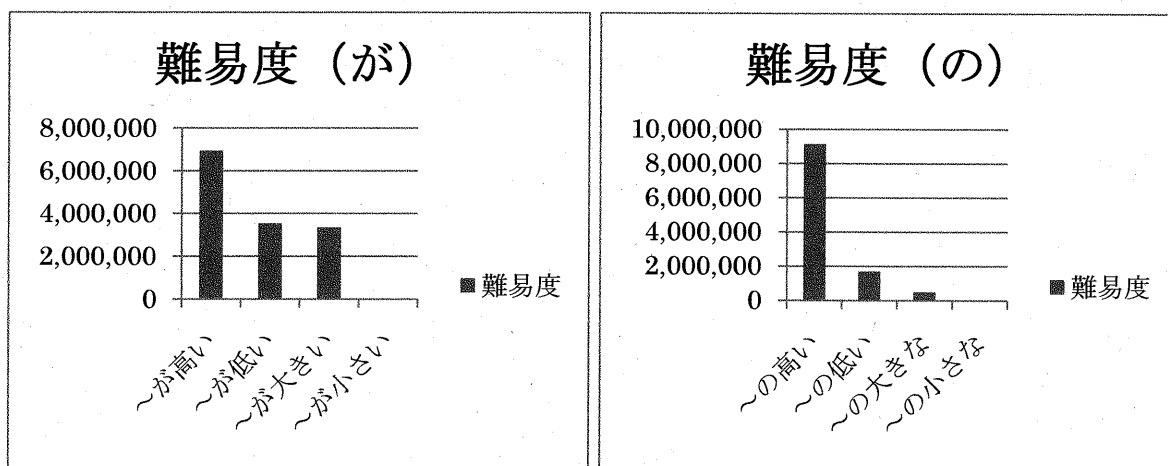
⑦難易度

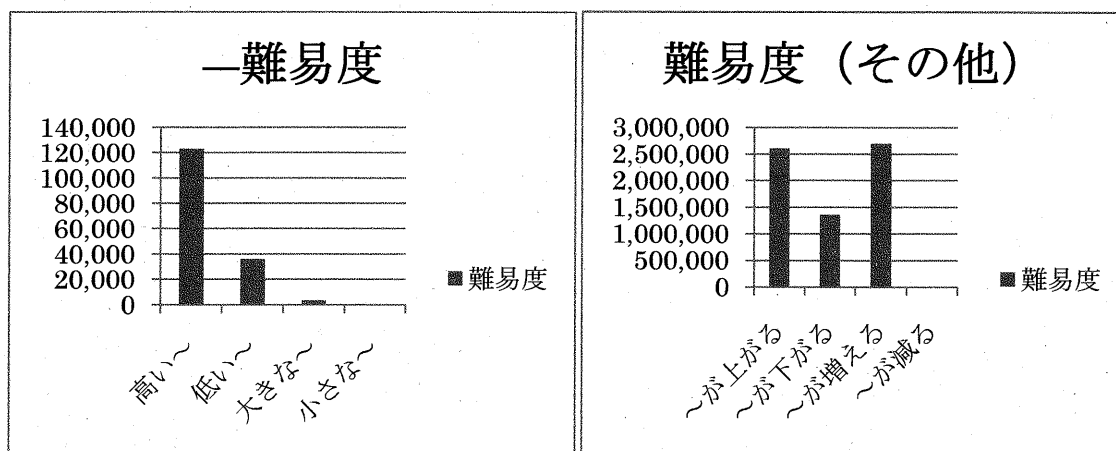
「難易度」の検索結果と表は以下のようになった。(表 16) (図 17)

	難易度 (件)
〜が高い	6,940,000
〜が低い	3,540,000

～が大きい	3,350,000
～が小さい	4
～の高い	9,130,000
～の低い	1,700,000
～の大きな	505,000
～の小さな	10
高い～	123,000
低い～	35,900
大きな～	3,530
小さな～	7
～がある	12,400,000
～がない	8,850,000
～が上がる	2,610,000
～が下がる	1,360,000
～が増える	2,700,000
～が減る	8

(表 16)





(図 17)

「難易度」の概念においては、「難易度が大きい」は言うことができる。これは「難易度が大きい」ということで「難易度」表されるものの困難さや大変さを「大きい」として人が評価していると考えられる。「難易度が高い」は一般的に客観的に難しさの量を表したものであると考えられる。

「難易度が増える」という言い方が確認できたが、これについては3次元の方向で「増える」と考えているわけではないと考えられる。これらの使用例を見ると、ゲームでの選択肢において、「難易度が増える」というものが目立った。このため、3次元で難易度が捉えられているとは考えにくい。

「高い難易度」というものは、数値的に具体的な難しさのレベルを表している。「大きな難易度」は使用数が少ない。これは評価的に、感情的に「難易度」という言葉を用いる機会が少ないためであると考えられる。

「難易度」は上下の関係である「高い・低い」と、人の評価を表す「難易度が大きい」で表されている。

以上「～度」の付く概念について、「高い・低い」形と「大きい・小さい」形がどのように用いられるかについて考察を行ってきた。その結果「～度」が付くから、「高い・低い」「大きい・小さい」を使うということではないということが分かる。その用いられ方は概念によって異なっている。「自由度」は「～の大きな・小さな」も用いることができるが、「利用度」では「～の大きな・小さな」では言えない。

また「難易度が増える」のようにテレビゲームの影響等で語の用いられ方も変化する。
社会変化によって、語の使用が変化することも注目しておきたい。

4. 「～率」

まず名詞の後ろにある「率」についての意味を確認する。

〈日本国語大辞典精選版〉

りつ **【率】**

割合。歩合。比率。また、確率。度合。可能性。

このように「率」は、「割合」や「度合い」を表すとある。名詞の後について、その概念の割合や程度の度合いを表していると言える。それらが、どのように「高い・低い」「大きい・小さい」と結びつくのか。以下、「～率」のつく語について分析を行う。

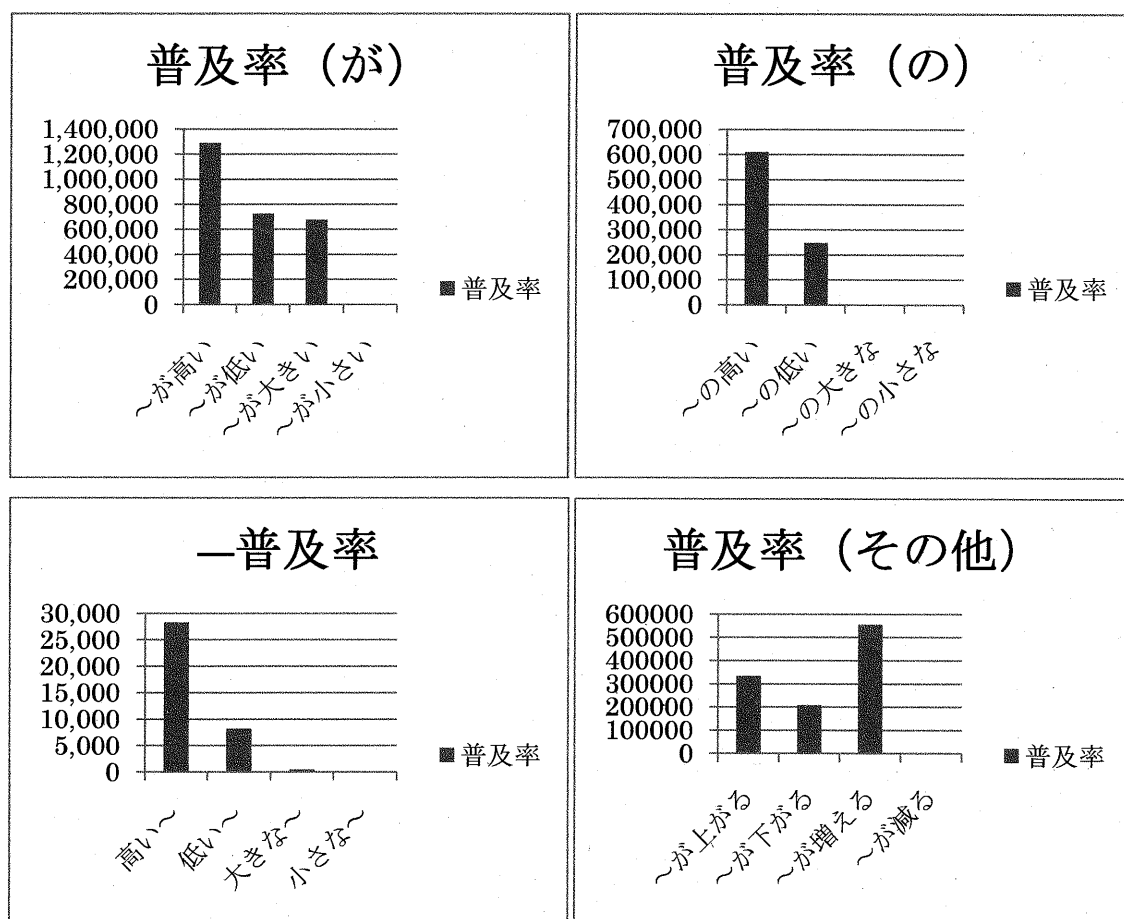
①普及率

「普及率」の検索結果と表は以下ようになった。(表 17) (図 18)

	普及率 (件)
～が高い	1,290,000
～が低い	726,000
～が大きい	679,000
～が小さい	9
～の高い	611,000
～の低い	248,000
～の大きな	9
～の小さな	0
高い～	28,300
低い～	8,250

大きな～	486
小さな～	2
～が上がる	334000
～が下がる	209000
～が増える	555,000
～が減る	4

(表 17)



(図 18)

「普及率」という言葉は、「高い・低い」形で表せ、「大きい・小さい」形では、「普及率が大きい」という形で言うことができる。これは「普及率が大きい」という言葉が、我々の「普及するもの」に対する評価が現れているためだと考えられる。一方で「普及率が高い」は、具体的な数値によって、「普及しているもの」が「高い」ことが表されていると考えられる。「普及率の大きな」や「大きな普及率」が言えないのは、「評価」を表す「大き

い」が「～が大きい」でしか表せないためであると言える。また「大きな普及率を持つ」等の言い方ができないため、3次元の空間を持っている「物」としても比喻できないと考えられる。

一方で、「普及率が増える」という言い方は可能である。これは「普及率」が「率」という具体的な「割合の量」の数字で表せるため、その数字が「増える」という言い方を可能にしていると言える。

「高い普及率」という言葉や「低い視聴率」という言葉はあるが、「大きな普及率」という用例は少ない。これは「普及率」と言う概念が数値的に考えられているためであり、評価性を表す「大きな普及率」とは言うことが出来ないと考えられる。

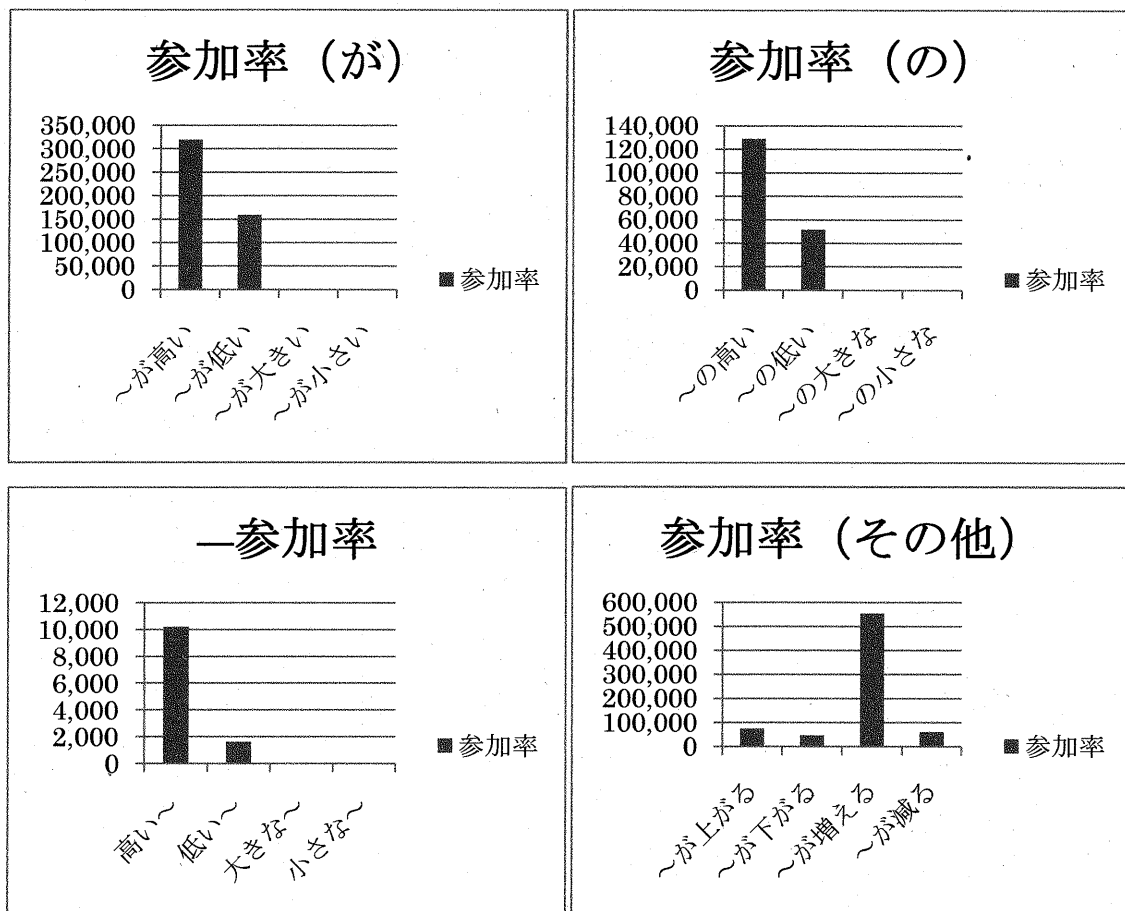
②参加率

「参加率」の検索結果と表は以下のようになった。(表 18) (図 19)

	参加率 (件)
～が高い	319,000
～が低い	159,000
～が大きい	1
～が小さい	1
～の高い	129,000
～の低い	51,700
～の大きな	1
～の小さな	0
高い～	10,200
低い～	1,620
大きな～	1
小さな～	0
～が上がる	74,800
～が下がる	47,300
～が増える	555,000

～が減る	61,600
------	--------

(表 18)



(図 19)

「参加率」については、「高い・低い」形のみが使用されている。これは「参加」という言葉について「大きい」等で評価する機会がほとんどないためであると考えられる。また、「評価」されることもないことから、「参加」を 3 次元の空間を持つ「物」として認識することも出来ない。そのために「大きい・小さい」形では言い表すことができないと考えられる。

一方で、「参加率が増える・減る」という言い方が可能である。これは「参加率」が数字で表せ、またその数字が「増減」の関係で言い表せるためであると考えられる。その増減が重視されるために「参加率が上がる」という言葉の使用数が少ないと考えられる。

「高い参加率」「低い参加率」ということは言うことができる。これは、「参加率」と言

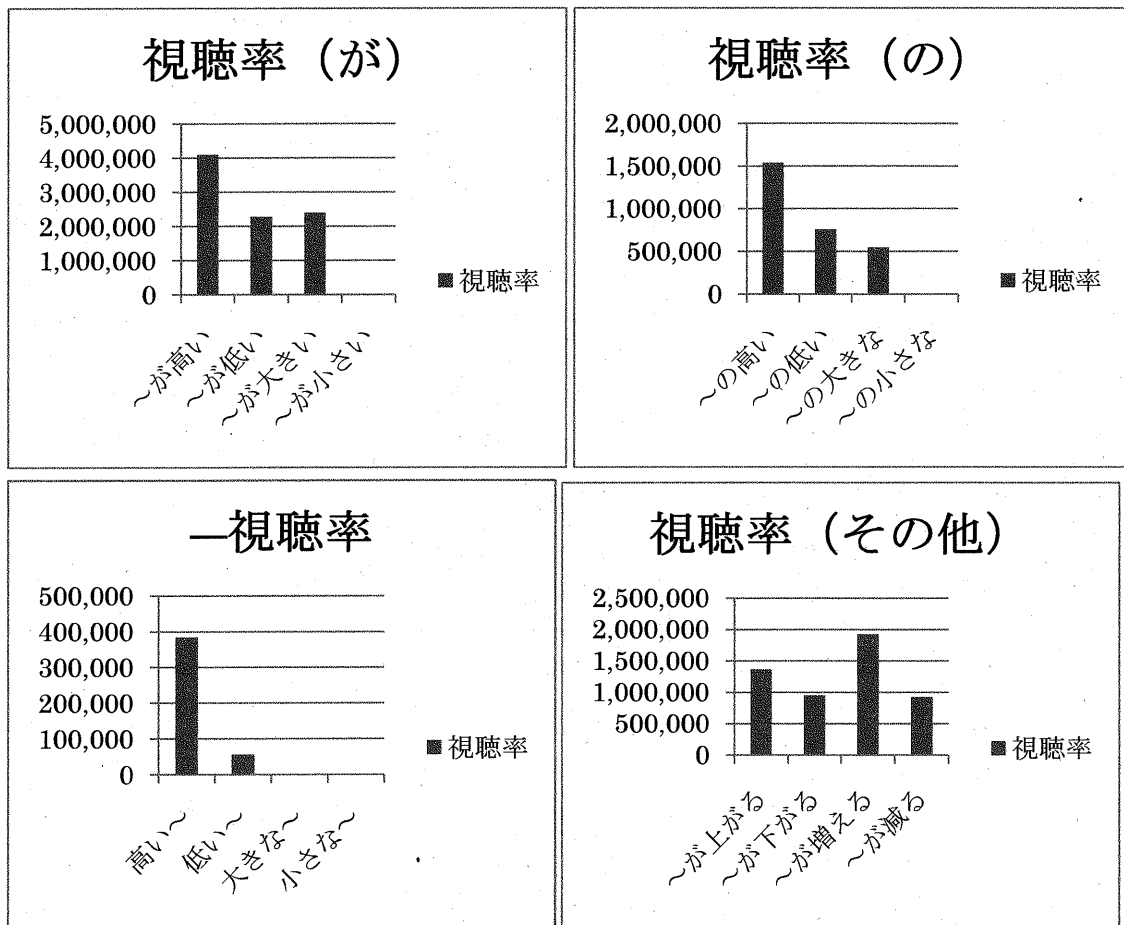
う概念が数値的に表されているためであると考えられる。

③視聴率

「視聴率」の検索結果と表は以下のようになった。(表 19) (図 20)

	視聴率 (件)
～が高い	4,100,000
～が低い	2,280,000
～が大きい	2,400,000
～が小さい	4
～の高い	1,540,000
～の低い	759,000
～の大きな	549,000
～の小さな	0
高い～	384,000
低い～	55,900
大きな～	2,450
小さな～	80
～がある	8,150,000
～がない	6,460,000
～が上がる	1,370,000
～が下がる	951,000
～が増える	1,930,000
～が減る	929,000

(表 19)



(図 20)

「視聴率」については、「高い・低い」形が言える。しかし、「大きい・小さい」形では、「大きい」形でのみ言うことができる。これは「大きい」が評価を表しており、また「視聴率が大きい」ことの情報が、「小さい」ことよりも重視されるためである。

一方で具体的な数字を客観的に表す場合には「視聴率が高い」という言い方をしていると考えられる。

また「視聴率の大きな番組」や「大きな視聴率を獲得する」等の言い方は、「視聴率」を3次元の空間を持つ「物体」として比喻していると言える。

だが「高い視聴率」に比べて、使用がまだ少ないため、そこまで使い方としては広く浸透していないと考えられる。「高い視聴率」という言葉は、数値的に表されており、一つのまとまりを持った言葉として認識されている。

「視聴率が上がる・下がる」や「視聴率が増す・減る」という言い方ができるのは「視聴率」が「～%」という数字で表せ、その数字の動きが「上がる・下がる」「増える・減る」

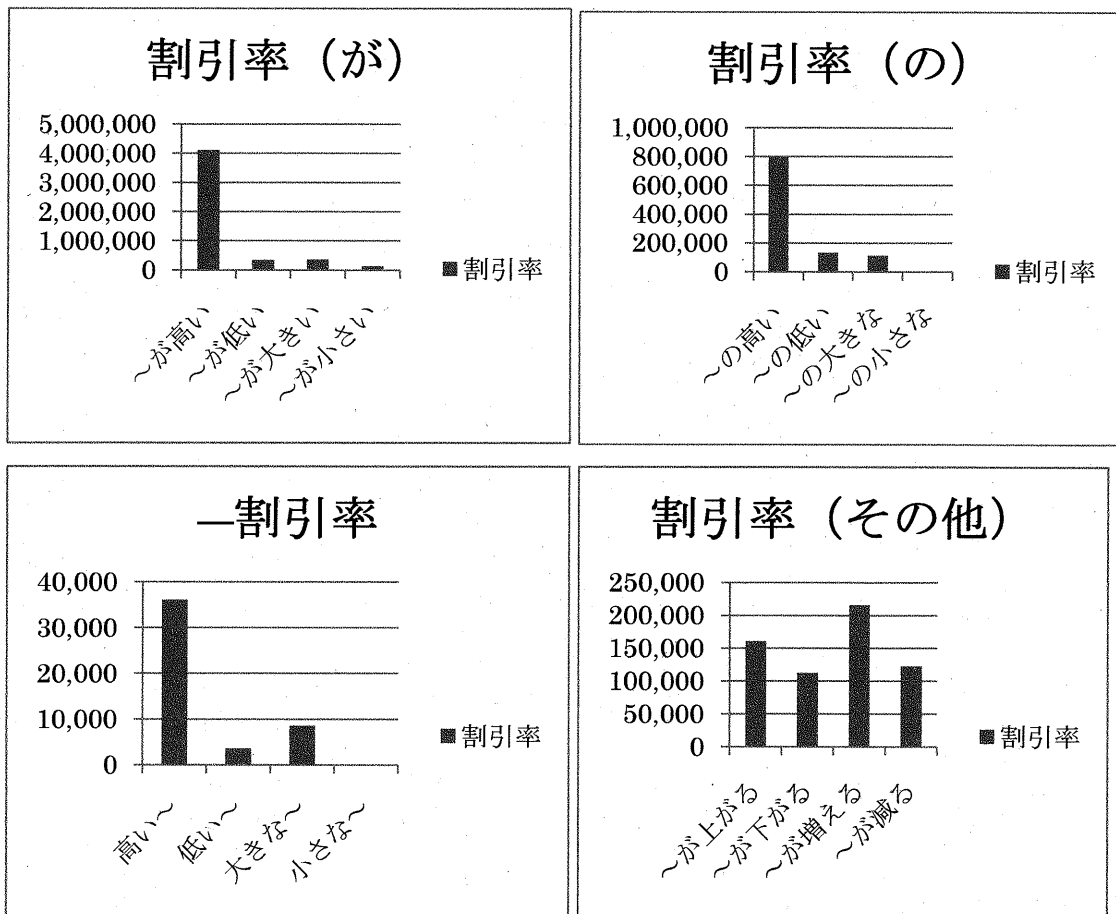
で表されると考えられる。

④割引率

「視聴率」の検索結果と表は以下のようになった。(表 20) (図 21)

	割引率 (件)
～が高い	4,110,000
～が低い	349,000
～が大きい	357,000
～が小さい	143,000
～の高い	798,000
～の低い	134,000
～の大きな	114,000
～の小さな	2
高い～	36,100
低い～	3,620
大きな～	8,570
小さな～	32
～が上がる	161,000
～が下がる	113,000
～が増える	216,000
～が減る	123,000

(表 20)



(図 21)

「割引率」は「高い・低い」で言うことが通常であるが、「大きい・小さい」形でも割合は低くなるが、使用例は見つけられる。これは「割引率」という概念に対して、我々が「評価」という面で「大きい・小さい」と言うことがあるためであると考えられる。

「割引率」の場合、「大きい」はプラスの「評価」として、「小さい」はマイナスの「評価」として、それぞれ情報として、重視されていることが分かる。しかし、「大きな割引率」は言えるが、「小さい割引率」になると使用数が少なくなる。情報として「割引率が大きい」というプラスの情報の方を我々が重視しているためであると考えられる。

「割引率」という概念は「大きい・小さい」で表されるとき、概念として3次元空間を持つ「物体」として、比喻されていると考えられる。「大きな割引率を適用する」「大きな割引率となる」等の言い方は、若干「物」として考えにくい、「大きな割引率」と言えること自体が、「物体」として「大きな割引率」という概念を比喻していると考えられる。

これに対して、「高い割引率」という言葉は、実際の数値をもつものとして表されてお

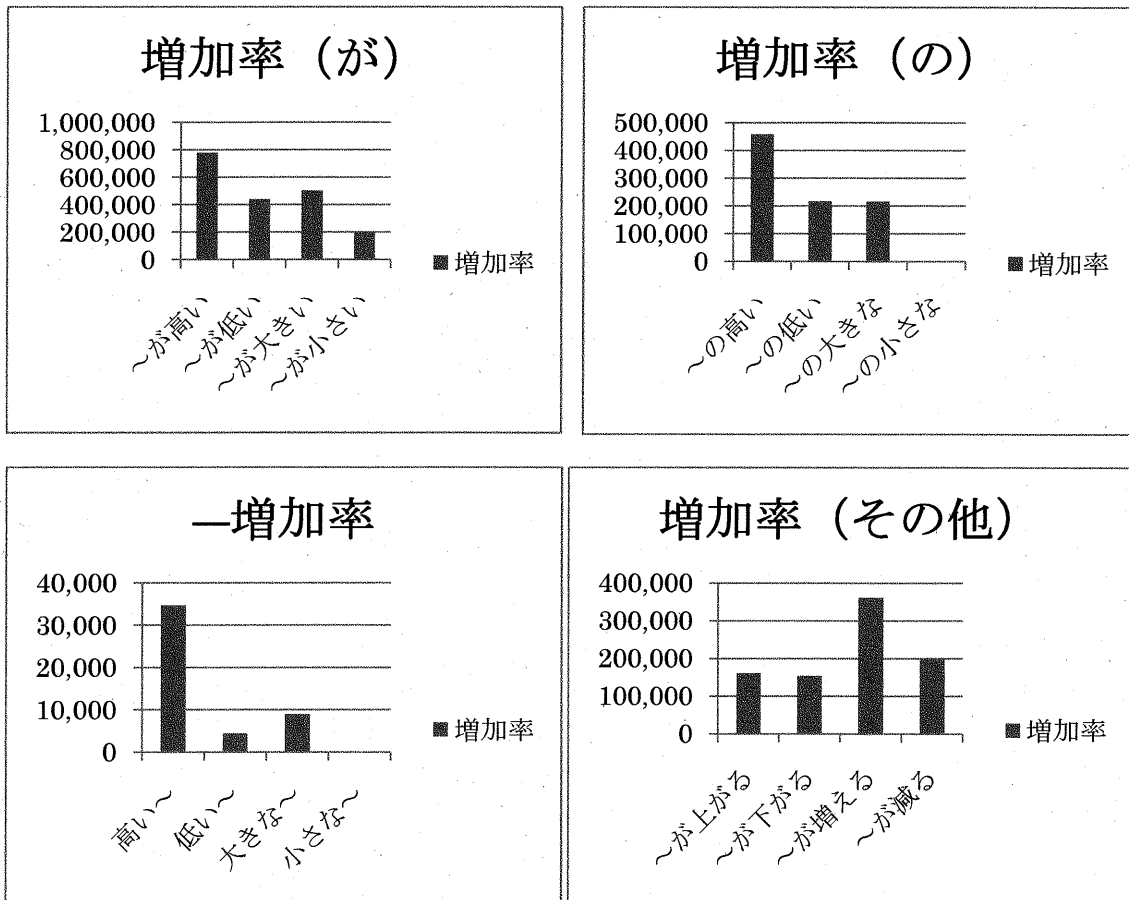
り、評価的な背景はない。我々はどちらかというと数値的に「割引率」という概念を認識していると言える。

⑤増加率

「増加率」の検索結果と表は以下のようになった。(表 21) (図 22)

	増加率 (件)
～が高い	779,000
～が低い	440,000
～が大きい	503,000
～が小さい	197,000
～の高い	458,000
～の低い	217,000
～の大きな	216,000
～の小さな	3
高い～	34,700
低い～	4,400
大きな～	8,990
小さな～	176
～が上がる	161,000
～が下がる	154,000
～が増える	362,000
～が減る	199,000

(表 21)



(図 22)

「増加率」という言葉は、「高い・低い」形でも「大きい・小さい」形でも、言うことができる。しかし、「増加率が小さな」はほとんど言うことができず、「小さな増加率」は他に比べ使用される数が少ない。

これは「増加率が大きい」ことが「増加率が小さい」ことに比べ、「情報」として「重要」であるからと考えられる。「増加率が大きい」は、プラスであれ、マイナスであれ、何かしらの「評価」を表している。その「評価」が3次元空間を持った「物体」として比喻され、「増加率の大きな～」や「大きな増加率」という言い方が出来るようになる。

一方で「増加率が小さい」ということは「評価」として言うことができるが、「物体」として比喻されるところまでは認知されていないのだと考えられる。

「高い増加率」は「低い増加率」より使用が多い。これも、量が多いことの方が我々にとって重要な情報であることを表していると言える。また「大きな増加率」という言葉の使用が少ないことから、評価的というよりも数値的に「増加率」は認識されていると考え

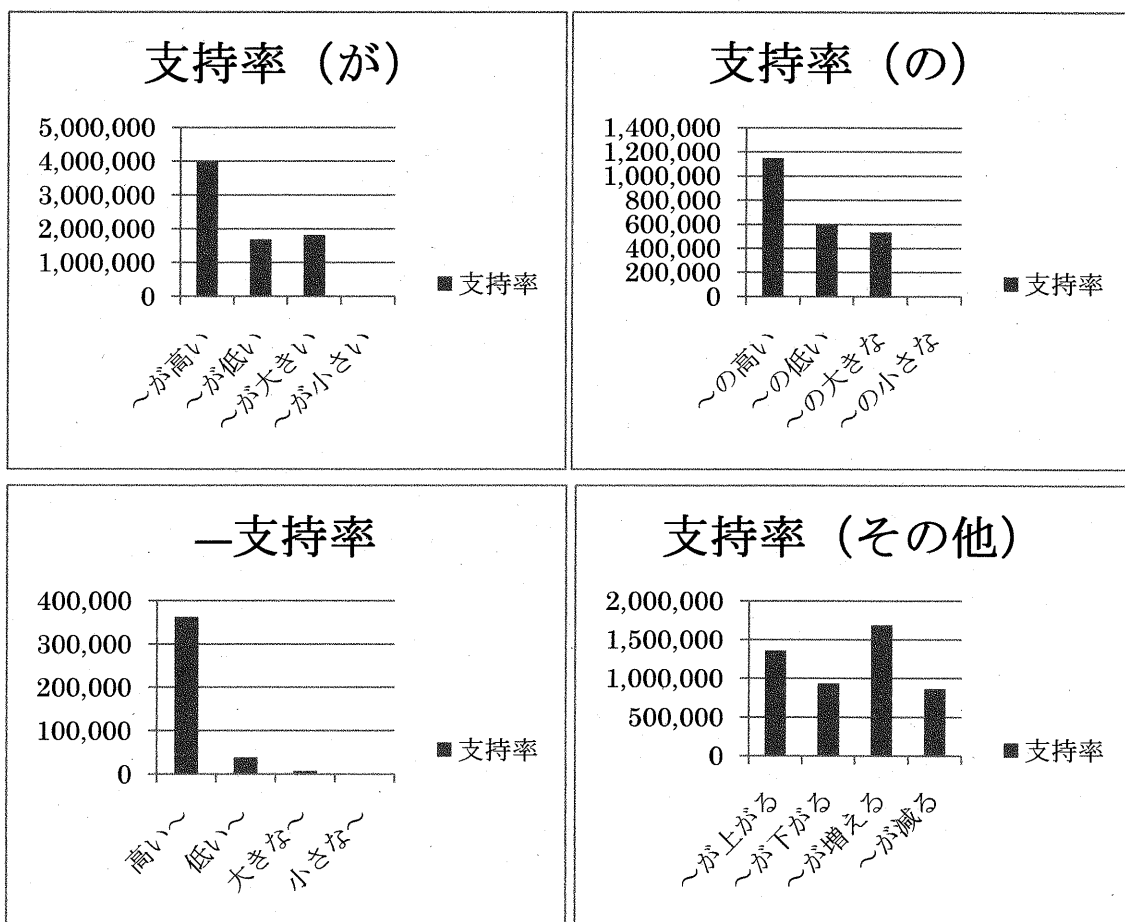
られる。

⑥支持率

「支持率」の検索結果と表は以下のようになった。(表 22) (図 23)

	支持率 (件)
～が高い	3,990,000
～が低い	1,680,000
～が大きい	1,820,000
～が小さい	2
～の高い	1,150,000
～の低い	602,000
～の大きな	536,000
～の小さな	1
高い～	362,000
低い～	38,200
大きな～	6,890
小さな～	119
～が上がる	1,360,000
～が下がる	937,000
～が増える	1,690,000
～が減る	864,000

(表 22)



(図 23)

「支持率」という言葉は「高い・低い」形の言葉の他、「支持率が大きい」「支持率の大きな～」等、「大きい」形で言うことが可能である。これは「支持」されているものの評価が「支持率が大きい」等で言い表せるためであると考えられる。「大きな支持率」や「支持率の大きな」は、その「支持率」の「評価」の「大きさ」が、3次元空間を持つ「物体」として比喻されていると考えられる。

しかし、「支持率が小さい」等、「小さい」で表すことが出来ない。これは「支持率」が「大きい」ことが情報として重視される一方で、「小さい」と言うことに対しては、情報として重視されていないためであると考えられる。また「支持率が低い・小さい」よりも「支持率がない」という言い方が多いことから、「低い」「小さい」よりも「ない」という言葉で重大さを表しているのではないかと考えられる。

「支持率」は「高い支持率」という用法がよく用いられている。それは「高い支持率」ということで概念を数値的に表しているためである。「高い支持率」は、一つのまとまりを

持った状態の言葉として認識されていると考えられる。

以上「～率」という概念について考察を行ってきた。「～率」でも「高い・低い」形、「大きい・小さい」形を使う語は様々であった。「評価」を表す「大きい・小さい」を用いるものは概念に対する我々の認識によって異なっていた。

「～率」においては具体的に数字で表されるものがあつた。そのため、「物体」として比喻されているものの他にも「増える・減る」が用いられる概念が多い。「参加率」等の概念がこれらに入る。比喻されているものか、数字で表されるものかで「増える・減る」の用法が異なってくる。

5. 「～力」

始めに、名詞の後ろにある「力」についての意味を確認する。

〈日本国語大辞典精選版〉

ちから 【力】

③物事に作用するはたらきかけや、その結果をさしいう。

「力」は、「物事にはたらきかけ」やその効果を表す。名詞の後について、その概念のはたらきかけを、物理的なものにも、精神的なものにも使うことができる。それらが、どのように「高い・低い」「大きい・小さい」と結びつくのか。以下、「～力」のつく語について分析を行う。

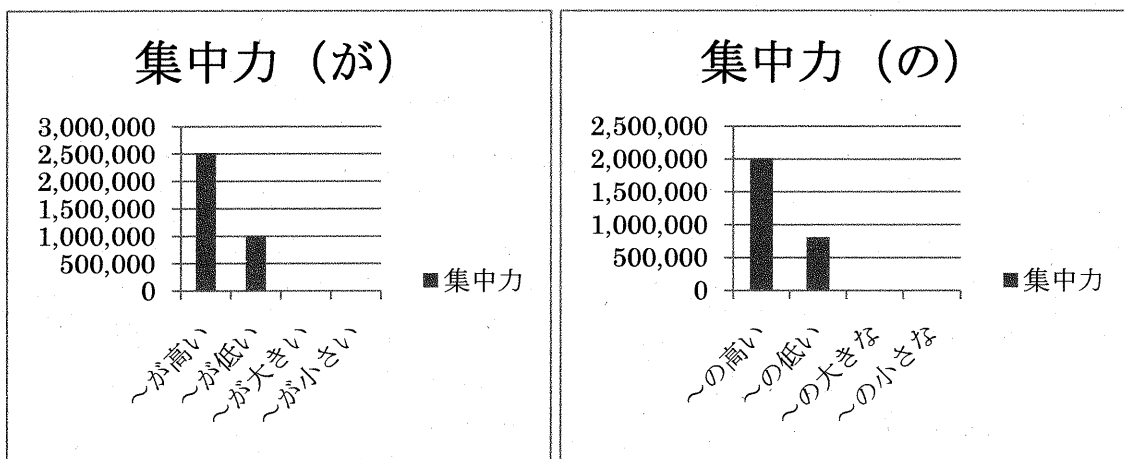
①集中力

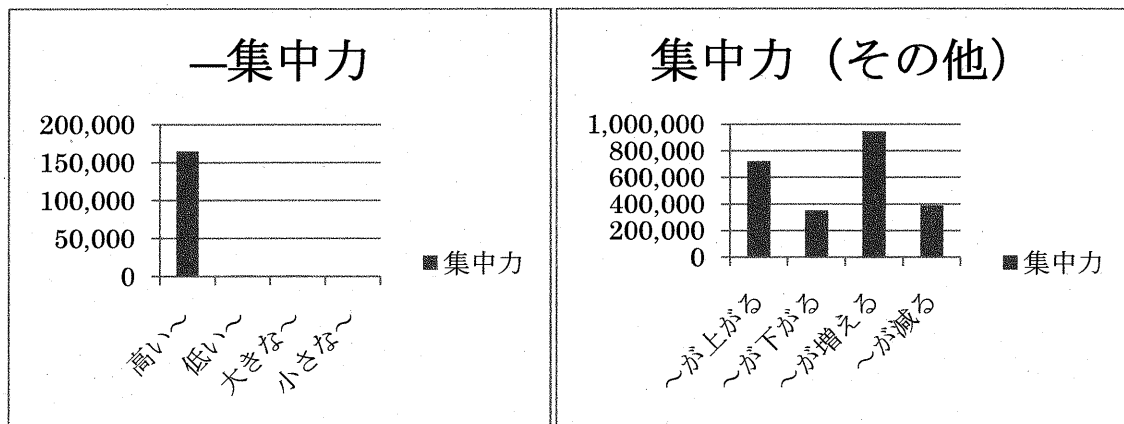
「集中力」の検索結果と表は以下ようになった。(表 23) (図 24)

	集中力 (件)
--	---------

～が高い	2,520,000
～が低い	996,000
～が大きい	10
～が小さい	3
～の高い	2,010,000
～の低い	812,000
～の大きな	7
～の小さな	0
高い～	165,000
低い～	1,610
大きな～	1,620
小さな～	47
～が上がる	723,000
～が下がる	351,000
～が増える	947,000
～が減る	390,000

(表 23)





(図 24)

「集中力」という言葉は、ほとんど「高い・低い」形でしか言うことができない。これは「集中力」という概念がほとんど「高い・低い」という上下の関係でしか認識されていないためであると考えられる。

なぜ「集中力」が「大きい・小さい」で表しにくいのか。それは「集中力」は個人の精神的な部分を表すためであると考えられる。個人の精神的な部分を「評価」によってはかることはできにくい。また「集中」する対象は個人の人となるため、「評価」することが少ないからであると考えられる。

しかし、「集中力が増える・減る」というのは使用例が存在している。これは「集中力」を 3 次元の空間のある「物体」として比喻しているのではなく、「集中力」を数値的に測れるものとして比喻することで、言えるようになったと考えられる。

「一集中力」においては「高い集中力」のみが使用されている。これは「大きい・小さい」形が用いられないこともあるが、「集中力」という概念が数値的なものとして認識されていると言える。

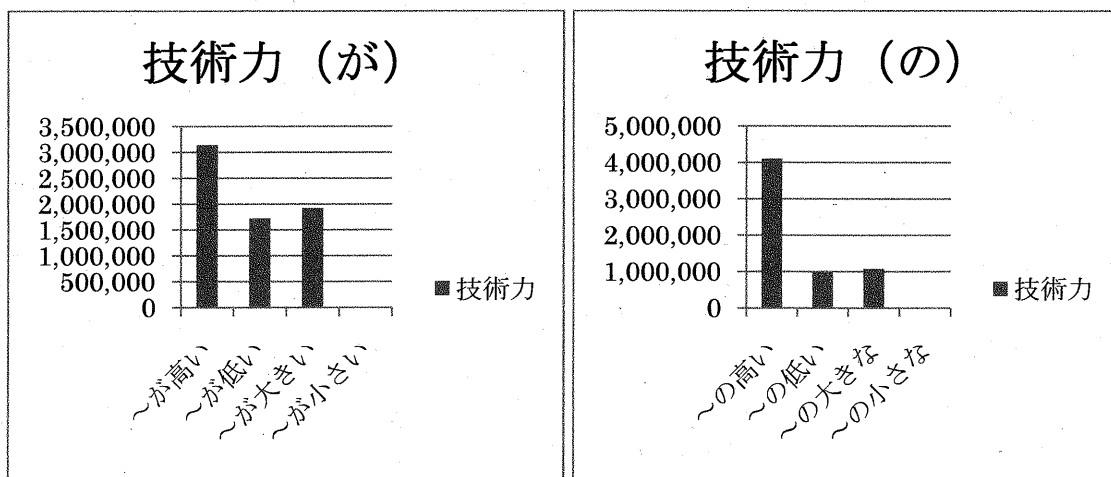
②技術力

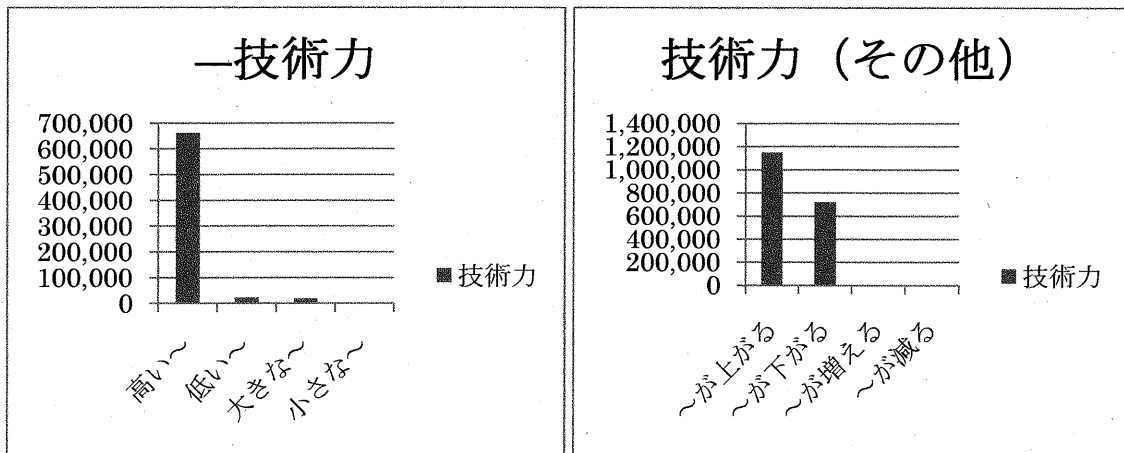
「技術力」の検索結果と表は以下ようになった。(表 24) (図 25)

	技術力 (件)
～が高い	3,140,000
～が低い	1,720,000

～が大きい	1,920,000
～が小さい	2
～の高い	4,100,000
～の低い	978,000
～の大きな	1,080,000
～の小さな	0
高い～	663,000
低い～	22,800
大きな～	18,800
小さな～	9
～が上がる	1,150,000
～が下がる	719,000
～が増える	1
～が減る	0

(表 24)





(図 25)

「技術力」という言葉は「高い・低い」形その他、「大きい」形で使用することが分かる。これは「技術力」が数値的な上下関係で表される一方で、「技術力が大きい」等、「大きい」形によって、我々の「評価」を表していると言える。「技術力が小さい」等、「小さい」形で表せない理由は、「技術力」について「大きい」ことが情報として重視される一方で、「小さい」ことは我々の中であまり情報として重視されないためであると考えられる。

「技術力」については「上がる・下がる」という言葉は用いても、「増える・減る」で言うことは少ない。これは、「技術力」が数値的な上下関係で表せる一方、数字が具体的に出ている訳でもなければ、3次元の空間を持つ「物体」としても認識されないためであると考えられる。

「高い技術力」と言うことはできるが、「低い技術力」はあまり使われない。これは「技術力」と言う概念は量が多いことのほうが重要視されるためである。「大きな技術力」の用例が少ないのは、「技術力」が数値的なものとして、捉えられることが多いからだと考えられる。

そのような点から「高い技術力」は一つのまとまりを持った言葉として、認識されているのではないかと考えられる。

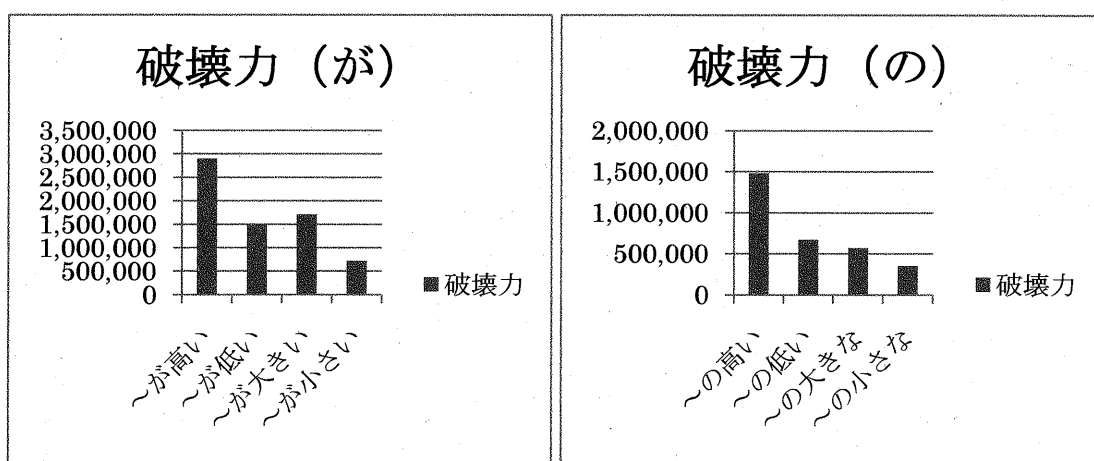
③破壊力

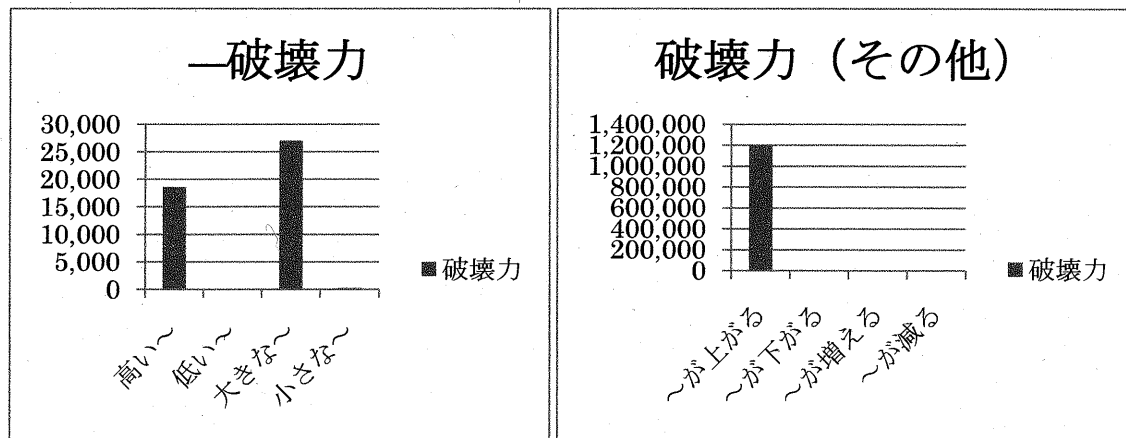
「破壊力」の検索結果と表は以下のようになった。(表 25) (図 26)

	破壊力 (件)
--	---------

～が高い	2,900,000
～が低い	1,490,000
～が大きい	1,710,000
～が小さい	721,000
～の高い	1,480,000
～の低い	673,000
～の大きな	573,000
～の小さな	354,000
高い～	18,600
低い～	173
大きな～	27,000
小さな～	314
～が上がる	1,200,000
～が下がる	9
～が増える	4
～が減る	7

(表 25)





(図 26)

「破壊力」という言葉については、「高い・低い」形でも、「大きい・小さい」形でも用いることができる。これは「破壊力」という概念が数値的な上下関係でも、3次元の空間の広がりも表すことが出来るためである。特に「大きな破壊力を持つ」や「破壊力の大きな・小さな〜」と言えることから「破壊力」という概念は3次元の空間を持つ「物体」として比喻されていると言える。

「破壊力が高い」は、「破壊力」を具体的で数値的に認識している一方で、「破壊力が大きい」は「破壊力」を抽象的で評価的に認識していると言える。「破壊力が大きい」は我々に「破壊力」という「物体」として認識させることで我々に「危険」等の情報の「大きさ」も伝えている。

「破壊力」については「高い破壊力」とも「大きな破壊力」とも言うことができる。これらはどう違うのだろうか。「高い破壊力」は数値的に考えられていて、「大きな破壊力」は感情面に訴えてくる表現である。ゆえに科学的に「破壊力」を示すときには「高い破壊力」を、「破壊」からくる「不安感」といった感情面に働きかけたいときには「大きな」破壊力が用いられると考える。

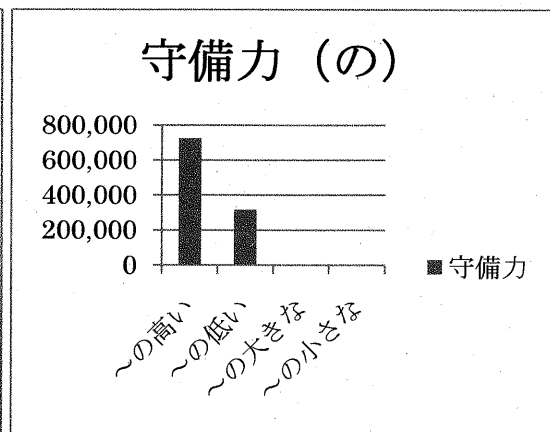
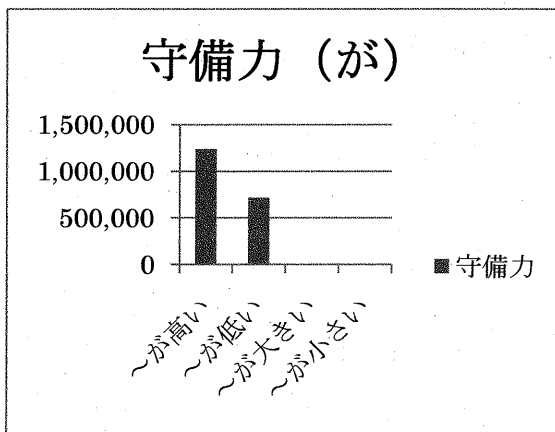
また、「破壊」という概念は、もともと3次元の広がりとしての「イメージ」を持っているのではないだろうか。このため3次元に広がり動きを表す「破壊力が増える・減る」ということが言いにくいのではないかと考えられる。

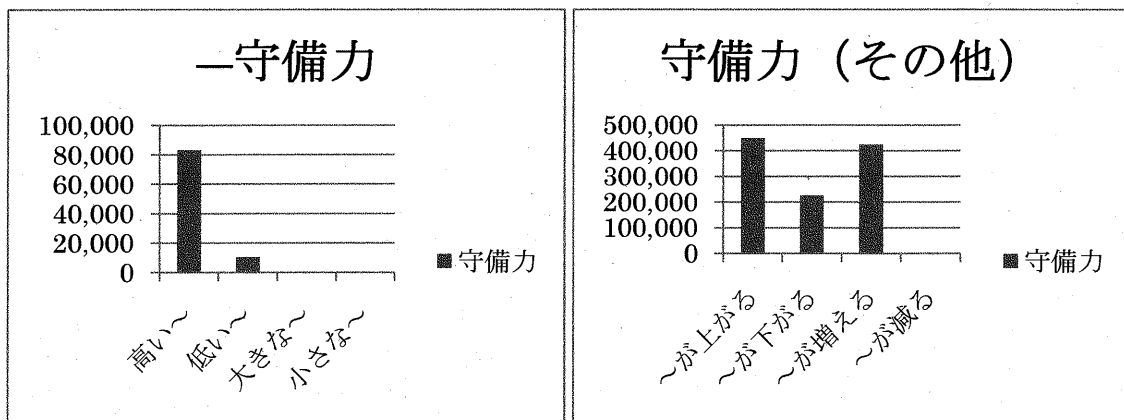
④守備力

「破壊力」の検索結果と表は以下ようになった。(表 26) (図 27)

	守備力（件）
～が高い	1,240,000
～が低い	716,000
～が大きい	7
～が小さい	3
～の高い	724,000
～の低い	316,000
～の大きな	5
～の小さな	0
高い～	83,300
低い～	10,400
大きな～	149
小さな～	0
～が上がる	450,000
～が下がる	226,000
～が増える	425,000
～が減る	10

（表 26）





(図 27)

「守備力」という言葉はほとんど「高い・低い」形でしか表すことが出来ない。これは「守備力」という概念が、3次元の空間を持つものとして認識できず、数値的な上下関係でしか認識できないことを表している。また、「守備力」という言葉に対して我々があまり「評価」の観点で見る機会が少ないことを表している。

しかし、「守備力が増える」という言葉は使うことができる。これは「守備力」がテレビゲーム等において数字で表すことが可能になっているためで、その数字が「増える」ことを表していると考えられる。

このように「守備力」は「高い・低い」形で表し、1次元的な上下関係のみで認識されていると考えられる。

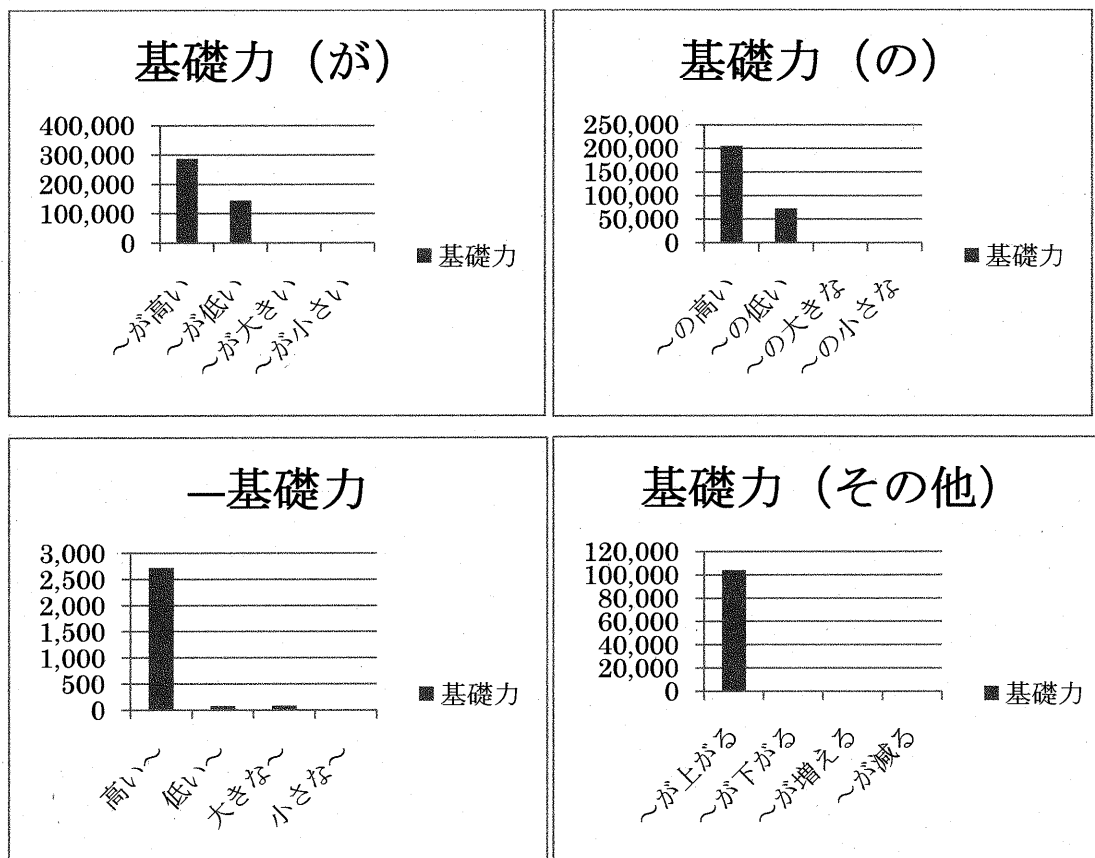
⑤基礎力

「基礎力」の検索結果と表は以下のようになった。(表 27) (図 28)

	基礎力 (件)
〜が高い	287,000
〜が低い	145,000
〜が大きい	1
〜が小さい	1
〜の高い	205,000
〜の低い	72,300

～の大きな	1
～の小さな	0
高い～	2,720
低い～	77
大きな～	86
小さな～	4
～が上がる	104,000
～が下がる	0
～が増える	1
～が減る	1

(表 27)



(図 28)

「基礎力」という言葉は、「高い・低い」形で表されることが多い。これは「基礎力」という概念が数値的な上下関係で認識されているためであると考えられる。一方で「大きい・小さい」形で表すことが出来ないことから、3次元空間の広がりでは認識されていないと言える。これは「基礎力」が我々の評価として認識する機会があまりないためであると言える。

「基礎力」については、その上下の動きについては「上がる・下がる」が用いられるはずである。しかし「基礎力が上がる」は言うことができるが、「基礎力が下がる」と言うことはできない。これは「基礎力」という概念の性質によるものであると考えられる。「基礎力」は「上がり」、一定になったら「ある」状態となり、それに達すると「下がる」ということがほとんどなくなるからではないだろうか。つまり一定になるまでの状態は「ある・ない」の関係で「上がり」はするが「下がる」ものではないと言える。

「高い基礎力」とは言うことができるがその他の用法は見られない。これは「高い基礎力」という語が一つのまとまりとなっているからだと考えられる。「基礎力」が数値的なものによって表されるためであると考えられる。

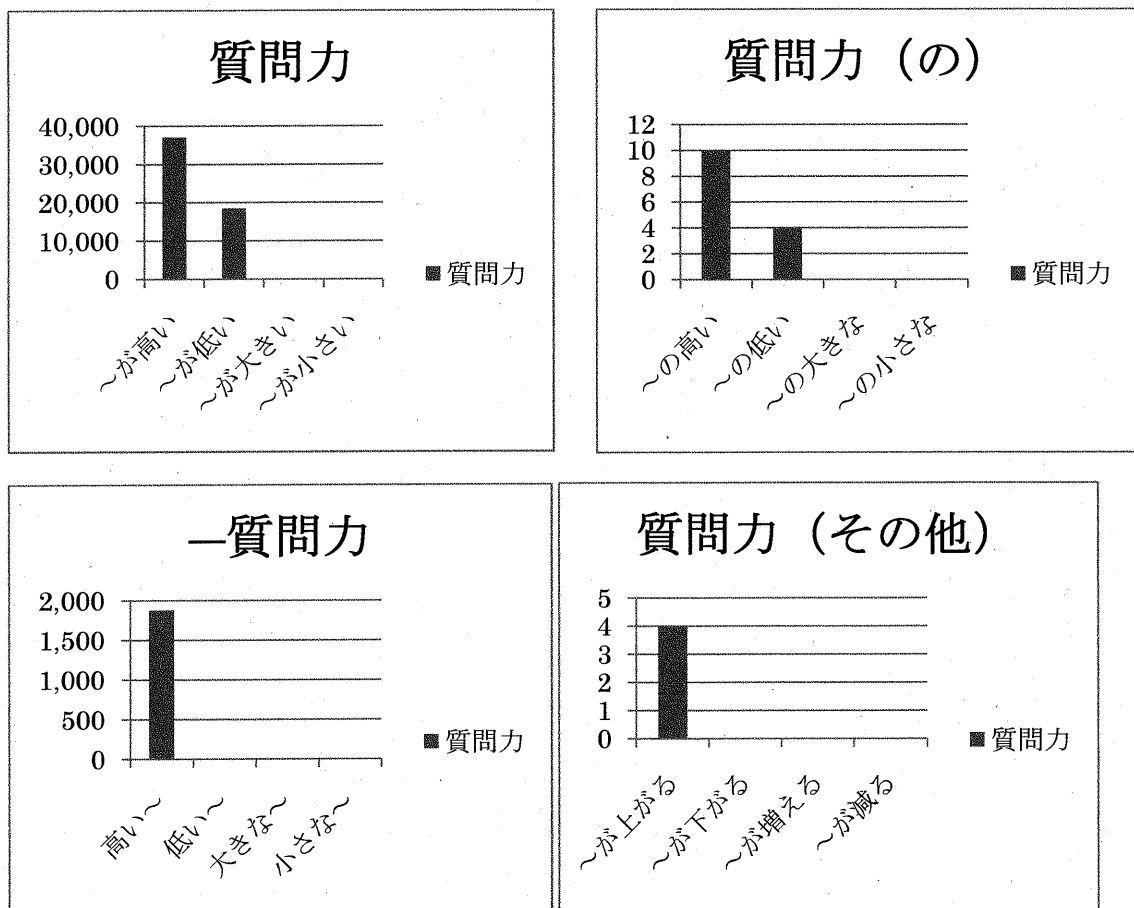
⑥質問力

「質問力」の検索結果と表は以下のようになった。(表 28) (図 29)

	質問力 (件)
～が高い	37,100
～が低い	18,500
～が大きい	0
～が小さい	0
～の高い	10
～の低い	4
～の大きな	0
～の小さな	0
高い～	1,880
低い～	2
大きな～	0

小さな～	0
～が上がる	4
～が下がる	0
～が増える	0
～が減る	0

(表 28)



(図 29)

「質問力」は全体的に使用数が少ない語である。このような概念にはどのように「高い・低い」「大きい・小さい」が使われるのだろうか。

「質問力」という言葉は「高い・低い」形で表される。「大きい・小さい」形では使用が見られない。「質問力」という概念については「高い・低い」という数値的な上下関係で認識されているということが分かる。我々の「評価」を表す「大きい」やそこからの3次元

空間の広がりのあるものとして言い表すことは出来ない。

ここから、「質問力」のようにまだ使用数が少ない概念は「大きい・小さい」で表すことが少ない。これは我々の評価を表す「大きい」がある程度広く使われてからでなくては言うことが出来ないためではないかと考えられる。

以上「～力」について「高い・低い」形と「大きい・小さい」形がどのように用いられているかについて考察を行ってきた。やはり概念ごとに認識が異なっており、評価的に判断できるかどうか語の使用に影響を与えている。

「～力」については「質問力」のような使用数が少ない語も調査した。その結果、概念の広がり方は語の使用数にも関わりがあるのではないかと考えられる。

6. 概念の量を表す「高い・低い」と「大きい・小さい」

この章では、概念を「～性」「～度」「～率」「～度」のように「高い・低い」形が言える語に対して、どれほど「大きい・小さい」形で言うことが出来るのかということについて考察を行ってきた。

「高い・低い」については、数値的な概念を上下関係で表すことから、科学的な背景を持ったものとして認識されている。一方で「大きい・小さい」は評価的な、価値的な大きさを比喩的に表している。

また、どちらが用いられるときでも、「高い」や「大きい」のように量が大きいほうの使用数がかなり多くなっている。これは量が大きいもののほうが、我々の認識として重要視されやすいためである。全ての分析において、「高い」「大きい」形のどちらかのほうが「低い」「小さい」よりも用例が多くなった。

これらのことを特に語としてのまとまりがある「高い・低い～」「大きな・小さな～」の面から検討する。

「高い～」 「大きな～」 がどれも数の上で一番多くなることが表から分かる。(表 29)

	可能性	危険性	注目度	破壊力	信憑性	利用度	割引率	増加率
高い～	△	○	○	○	○	○	○	○
低い～	△	△	×	×	×	△	△	△
大きな～	○	○	○	○	△	△	△	△
小さな～	×	△	×	×	×	×	×	×
	難易度	視聴率	支持率	参加率	普及率	守備力		
高い～	○	○	○	○	○	○		
低い～	△	△	△	△	△	△		
大きな～	×	×	×	×	×	×		
小さな～	×	×	×	×	×	×		
	安全性	公共性	合理性	気密性	感染性	自由度		
高い～	○	○	○	○	○	○		
低い～	×	×	×	×	×	×		
大きな～	×	×	×	×	×	×		
小さな～	×	×	×	×	×	×		
	完成度	集中力	基礎力	質問力	技術力			
高い～	○	○	○	○	○			
低い～	×	×	×	×	×			
大きな～	×	×	×	×	×			
小さな～	×	×	×	×	×			

(○：使用が多いもの △：○よりも使用が半分～10分の1までのもの ×：使用が○の10分の1以下のもの)

(表 29)

「高い～」と「大きな～」のどちらも言える語がある。「可能性」「危険性」「注目度」「破壊力」のような言葉である。これらの言葉がなぜ両方使われるのだろうか。これは「高い～」が数値的で科学的に用いられることに対して、「大きな～」が評価的に感情に訴えるような使われ方がされている。

たとえば「可能性」については「大きな可能性」という言い方によって「可能性」とい

うものに対する「期待感」「希望」を意味の中に含んでいる。一方で「危険性が大きい」という「不安感」が表れる。(しかし、それとは逆の「安全性」は「高い安全性」が用いられる。これは「安全」が科学的・数値的に根拠のあることを示すためであると考えられる。)

これとは逆に「高い～」は概念について評価的に言えないことと、科学的、数値的な根拠を持っていることを暗に示している。「完成度」や「集中力」と言う概念は具体的に数値では表しづらいが、それを比喩的に数値で表している。

「低い～」が少し言えるものについては、その概念が量の少ないものに対しても言うことがあることを表している。「視聴率」「支持率」ということは、「低い」ことにもある程度我々が、関心をもっているものであると言える。

「高い・低い」形は数値的で具体的な概念を示す。一方で「大きい・小さい」形で言えるものには、その概念について我々が評価を行っていることが分かった。そして評価を表すことから3次元空間を持った「物体」として比喩的に認識されている。

しかし、それが「～性」や「～度」といった接尾辞に関連するものではなく、その概念全体に対する我々の概念が関わっていることが分かった。その概念全体でどのように認識されているのかを考えることが重要であると考えられる。

また概念の認識には広がりや段階があることも示唆された。なぜなら、「～が小さい」が言えて、「～が大きい」が言えないという概念は存在していないからである。我々の概念の認知にはレベルのようなものが存在し、それが使い分けの鍵になるのではないかと考えられる。

次章ではそのような概念の認知の広がりという面でもう一度「高い・低い」形が言える概念と「大きい・小さい」形が言える概念について考えていきたい。

第3章 形容詞の比喩的用法の分析2

—「高・低」関係と「大・小」関係の概念構造—

第2章では、「～性」「～度」「～率」「～力」に分けて、どのような概念に「高い・低い」「大きい・小さい」を用いるのか、またどのようにその周辺の語で表せるかについて分析してきた。

その結果、「高い・低い」が上下関係に認識されることで数値的・具体的に概念を表している一方で、「大きい・小さい」は抽象的に、物的に概念を表していることが考えられた。

「大きい・小さい」は我々の「評価」の量で概念を表し、そこから3次元の空間を持つ「物体」として認識されている。

この章では、第2章で調査した概念を「大きい・小さい」で表される度合いで分類して考察している。そうすることでさらにその概念の「評価」の面や、我々にとっての情報の「重要度」について解明することが可能であり、また我々の概念の認識について考えることが可能である。

「大きい・小さい」がどちらも言えるものは「大小の評価の関係」においてどちらも重視される情報である。また「～の大きな・小さな」「大きな・小さな～」が言えるものはその「評価の大きさ」から実際の「物体」として比喩されるようになったものである。

「大きい」のみが言えて、「小さい」が言えない言葉については、「大きい」ことが情報として重視される。また、「大きい」形についても「～が大きい」のみが言える語と「～の大きな」「大きな～」も言える語の、2つのパターンがある。

「大きい・小さい」形では表せない概念は、我々の「評価」に関わらない概念と言える。そのため「高い・低い」形でのみしか表せない。「高い・低い」形で表せることから、数値的な上下関係で概念が認識されている。

以上のことを、以下それぞれ概念の分類ごとに考えていきたい。

1. 「～が大きい」「～が小さい」で言い表せる群

ここでは、「高い・低い」形でも、「大きい・小さい」形でも表すことができる概念について記述していく。

これらの概念についての検索数の一覧を確認する。(表30)(表31)

～が大きい○ ～が小さい○				
	可能性	危険性	自由度	破壊力
～が高い	11,800,000	30,900,000	490,000	2,900,000
～が低い	36,500,000	7,700,000	2,090,000	1,490,000
～が大きい	49,100,000	16,200,000	2,230,000	1,710,000
～が小さい	16,600,000	2,750,000	1,040,000	721,000
～の高い	60,900,000	23,700,000	1,190,000	1,480,000
～の低い	14,000,000	2,800,000	757,000	673,000
～の大きな	17,800,000	8,720,000	752,000	573,000
～の小さな	6,490,000	951,000	340,000	354,000
高い～	454,000	55,900	176,000	18,600
低い～	281,000	6,380	2,520	173
大きな～	1,580,000	94,500	24,200	27,000
小さな～	55,500	4,250	652	314
～が上がる	16,900,000	3,380,000	1,190,000	1,200,000
～が下がる	9,870,000	2,120,000	633,000	9
～が増える	27,100,000	8,170,000	1,500,000	4
～が減る	11,400,000	2,680,000	703,000	7

(表 30)

～が大きい○ ～が小さい○				
	生産性	満足度	割引率	増加率
～が高い	4,100,000	8,910,000	4,110,000	779,000
～が低い	2,330,000	1,880,000	349,000	440,000
～が大きい	2,400,000	1,860,000	357,000	503,000
～が小さい	1,080,000	804,000	143,000	197,000
～の高い	5,370,000	12,900,000	798,000	458,000
～の低い	1,510,000	6,140,000	134,000	217,000
～の大きな	646,000	1,020,000	114,000	216,000
～の小さな	7	0	2	3
高い～	452,000	3,280,000	36,100	34,700
低い～	33,200	8,730	3,620	4,400
大きな～	14,000	19,300	8,570	8,990
小さな～	984	1,210	32	176
～が上がる	1,380,000	1,200,000	161,000	161,000
～が下がる	854,000	506,000	113,000	154,000
～が増える	1,660,000	1,160,000	216,000	362,000
～が減る	992,000	511,000	123,000	199,000

(表 31)

まずこの群を 2 つに分けておく。「～の小さな」が言えるグループと言えないグループとである。

言えるグループでは、「可能性」「危険性」「自由度」「破壊力」というような概念が取りあげられる。

これらのグループの共通性は、まず、「大きな可能性を持っている」や「大きな危険性をはらんでいる」等、概念が比喩的に表され、あたかも「可能性」や「危険性」という「物体」がそこにあるかのように表現されていることである。また、「自由度」「破壊力」のように「自由」や「破壊」等、接尾辞がつく前の概念が 3 次元の広がりがあることも共通性

として挙げられる。

そして、これらのグループは「～の小さな」や「小さな～」で表されることから、情報として「低い・小さい」という情報も重視されていると考えられる。特に評価を表す「小さい」という情報が重視されて、「物体」としての比喻を持つようになったと考えられる。

たとえば、「危険性」では「危険性が低い・小さい」は情報の受け手にとって、必要な情報になるし、「自由度が低い・小さい」も「動けない・動かせない」という重要な情報を表している。

次に「～の小さな」がほとんど使えない語のグループについて考察する。

このグループには「生産性」「満足度」「割引率」「増加率」「利用度」といった概念が入る。

このグループの共通性は概念を 3 次元の空間で考えることができ、「大きな割引率」や「大きな満足度」のように概念を比喩的に表すことが出来ることである。

しかし、上記のグループと異なり、「～の小さな」「小さな～」がほとんど言えないことから、「高い・大きい」という情報に対して、「低い・小さい」という情報は重視されていないと考えられる。

たとえば、「割引率」という概念では、「割引率の大きな」「大きな割引率」が言えるが「割引率の小さな」「小さな割引率」とは言わない。「割引率」が「大きい」ことは我々にとって一般的に喜ばしい情報として認識されるし、関心を払う。しかし、「割引率」が「小さい」ことについて我々は関心を払う機会が少ない。そのため、「割引率が小さい」は使うことがあっても、3 次元空間を持った「物体」として比喩されることがないのだと考えられる。

このように「大きい・小さい」で表せる概念は共通して概念を「評価的」な要素があるものとしてみることができる。「評価」として「～が大きい・小さい」がどちらも言うことができる。そしてそこから 3 次元空間の「物体」として認識を行う比喩が起こっている。その結果、3 次元空間の量の動きを表す「～が増える・減る」が言える場合も多い。

しかし、「～の小さな」「小さな～」が言える概念と言えない概念が存在している。その差は「評価」としての情報の重要度の差であると考えられる。

2. 「～が大きい」は言えるが「～が小さい」が言えない群

ここでは、「高い・低い」形で表せるが、「大きい・小さい」形では、「～が大きい」は言えるが、「～が小さい」は言えない概念について考える。

これらの概念についての検索数の一覧を確認しておく。(表 32) (表 33)

～が大きい○ ～が小さい×						
	公共性	安全性	注目度	難易度	視聴率	支持率
～が高い	1,050,000	252,000	2,410,000	6,940,000	4,100,000	3,990,000
～が低い	477,000	5,800,000	758,000	3,540,000	2,280,000	1,680,000
～が大きい	548,000	6,780,000	824,000	3,350,000	2,400,000	1,820,000
～が小さい	4	2	10	4	4	2
～の高い	1,650,000	16,700,000	3,460,000	9,130,000	1,540,000	1,150,000
～の低い	33,000	2,940,000	369,000	1,700,000	759,000	602,000
～の大きな	403,000	3,640,000	419,000	505,000	549,000	536,000
～の小さな	0	1	0	10	0	1
高い～	43,500	2,350,000	52,400	123,000	384,000	362,000
低い～	780	11,500	1,400	35,900	55,900	38,200
大きな～	4,820	12,300	52,600	3,530	2,450	6,890
小さな～	1,250	447	1	7	80	119
～が上がる	0	1,910,000	491,000	2,610,000	1,370,000	1,360,000
～が下がる	0	1,140,000	261,000	1,360,000	951,000	937,000
～が増える	1	10	7	2,700,000	1,930,000	1,690,000
～が減る	0	4	250,000	8	929,000	864,000

(表 32)

～が大きい○ ～が小さい×					
	技術力	信憑性	関心度	利用度	普及率
～が高い	3,140,000	5,510,000	224,000	138,000	1,290,000
～が低い	1,720,000	2,880,000	102,000	71,200	726,000
～が大きい	1,920,000	3,080,000	94,800	68,200	679,000
～が小さい	2	1	4	5	9
～の高い	4,100,000	2,840,000	171,000	151,000	611,000
～の低い	978,000	1,510,000	55,300	45,900	248,000
～の大きな	1,080,000	0	2	3	9
～の小さな	0	0	0	1	0
高い～	663,000	6,370	23,200	5,020	28,300
低い～	22,800	240	1,450	759	8,250
大きな～	18,800	3,020	5	551	486
小さな～	9	0	0	1	2
～が上がる	1,150,000	1,850,000	49,900	30,800	334000
～が下がる	719,000	1,210,000	28,900	17,000	209000
～が増える	1	4	0	47,200	555,000
～が減る	0	8	0	24,000	4

(表 33)

この群に入るグループの共通点として、評価を表す「～が大きい」が言えることが挙げられる。しかしこの群に入る概念は「～が小さい」という言い方はできない。

これは「大きい・小さい」が概念の数値的なものを表すのではなく、評価を表しているということが関係している。つまりこの群に入る概念は評価的に「～が大きい」が言えても「～が小さい」が言えないことになる。

たとえば、「安全性が大きい」というが、「安全性が小さい」とは言えない。「安全性が大きい」という受け手にとって安心を与え、評価的によい「価値」として認識されている。

一方で「安全性が小さい」は、「危険」であることを連想させる。その場合は警鐘を鳴らす面から「危険」という表現を用いるのではないだろうか。そのため「安全性が小さい」ということについて評価的に認識されることもない。そのため「安全性が小さい」は使用されないと考えられる。

ゆえにこの群に入る概念は「～が大きい」のほうは、評価的に概念を認識し使用されているが、「～が小さい」は評価的に概念を認識することがないため、使用されないと考えられる。

なおこの群についても 2 つのグループに分けることが可能である。「～の大きな」で言えるグループと、「～の大きな」が言えないグループとである。

まず「～の大きな」が言えるグループには「公共性」「安全性」「注目度」「難易度」「視聴率」「支持率」「技術力」というような概念が挙げられる。

これらの概念に共通していることは評価を表す「～が大きい」から、そこから 3 次元空間を持つ「物体」のように比喩的に認識されていることである。「安全性の大きな製品」「公共性の大きな事業」等の言い方は、評価的な認識からそれが「物体」のように比喩されることで生まれると考えられる。

一方、「信憑性」「関心度」「利用度」「普及率」というような概念は、「～の大きな」が言えない。また「大きな～」というような言い方も前のグループに比べると言いにくくなる。

これは評価的に「～が大きい」ということはできるが、そこから「物体」を表す比喩的な表現では表さないということである。そのため 3 次元空間の量の動きを表す「～が増える・減る」で表されることがほとんどない。まだ、評価が「物体」の比喩で表されていない概念と言える。

これらの概念が「名詞」につく際には「～の高い・低い」が使われている。そのことから、名詞につく際にはこれらの概念は数値的で具体的な面が重視されていることになる。「信憑性の高い話」や「関心度の高いニュース」等は、「信憑性」や「関心度」という概念の数値的な面が表されるように認識されている。このような数値的な面が重視されている概念のため、「～の大きな」が言えないのではないだろうか。

3. 「～が大きい」「～が小さい」では言い表せない群

ここでは、「高い・低い」形で表せるが、「大きい・小さい」形では表せない概念につい

て考えていく。

これらの概念についての検索数の一覧を確認しておく。(表 34) (表 35)

～が大きい×					
	合理性	気密性	感染性	完成度	参加率
～が高い	1,950,000	607,000	374,000	728,000	319,000
～が低い	1,020,000	214,000	162,000	2,360,000	159,000
～が大きい	7	6	1	10	1
～が小さい	0	0	0	1	1
～の高い	1,560,000	748,000	305,000	10,900,000	129,000
～の低い	623,000	129,000	101,000	1,170,000	51,700
～の大きな	2	1	6	6	1
～の小さな	0	0	1	0	0
高い～	9,410	87,200	18,400	726,000	10,200
低い～	5	105	1,880	8,300	1,620
大きな～	387	9	1,790	97	1
小さな～	46	64	8	63	0
～が上がる	521,000	95,100	1	1,380,000	74,800
～が下がる	1	69,800	0	721,000	47,300
～が増える	0	0	0	4	555,000
～が減る	0	0	1	0	61,600

(表 34)

～が大きい×				
	集中力	守備力	基礎力	質問力
～が高い	2,520,000	1,240,000	287,000	37,100
～が低い	996,000	716,000	145,000	18,500
～が大きい	10	7	1	0
～が小さい	3	3	1	0
～の高い	2,010,000	724,000	205,000	10
～の低い	812,000	316,000	72,300	4
～の大きな	7	5	1	0
～の小さな	0	0	0	0
高い～	165,000	83,300	2,720	1,880
低い～	1,610	10,400	77	2
大きな～	1,620	149	86	0
小さな～	47	0	4	0
～が上がる	723000	450,000	104,000	4
～が下がる	351000	226,000	0	0
～が増える	947,000	425,000	1	0
～が減る	390,000	10	1	0

(表 35)

この群に入る概念は「合理性」「気密性」「感染性」「完成度」「参加率」「守備力」「基礎力」「質問力」というものである。これらの概念には評価的な価値を表している「大きい・小さい」で言い表すことが出来ない。

なぜ「大きい・小さい」形の言葉で表せないのでしょうか。それは、その語が使用されている範囲と、評価的な価値で言えるかどうかということが関係していると考えられる。

まず、語の使用範囲であるが、「合理性」という少し学術的な語や「気密性」や「感染性」といった科学的な用語がある。これらはどちらかというと専門的であり、使用の範囲が限

られてくると考えられる。「守備力」もスポーツ関係かテレビ関係等が使用される範囲となる。また、「基礎力」や「質問力」もそこまで使用数としては多くない。

このような概念については「大きい・小さい」形で表しづらい。

そのこととも関連するが、評価的な価値の問題も挙げられる。「参加率」というような言葉は「参加率」に関しては高かろうが低かろうがあまり評価的に判断されないように考えられる。「参加率」については評価的な情報としても、受け手は重要視しないのではないだろうか。また先ほど述べたように使用機会が限られれば、それだけ評価的に判断される機会は少なくなる。専門性が高く、使用機会が少ない語彙は、評価の「大きさ」では認識されないと考えられる。

以上から、「大きい・小さい」形で言い表せない概念というのは、専門性が高く使用頻度が少ないことと、評価的な判断として認識されないことが特徴として挙げられる。

これらの概念には「～が増える・減る」で述べられているものがあるが、それらの概念は数字で表せるからであり、「物体」の比喩として認識されているのではないと考えられる。

4. 「高・低」概念と「大・小」概念の認知の広がり

ここまで、「高い・低い」形が言い表せる概念について、「大きい・小さい」形がどれほど使用されているかについて考察してきた。

その結果、「高い・低い」は具体的な数値的な意味を、「大きい・小さい」は抽象的な、評価的な、価値的な意味を表していることが分かった。また「大きい・小さい」はそこから比喩的な認識によりあたかも「物体」であるような表現で用いることが可能である。

そのことをまとめていくと「高い・低い」と「大きい・小さい」に関する使い分けと、概念の広がり方が明らかになってくる。

ここでは、「高い・低い」形から「大きい・小さい」形で表現されるまでの認識の広がりについて、述べていく。

まず、「高い・低い」で表現される概念のうち、評価的に認識できるものは「～が大きい」で表現できるようになる。

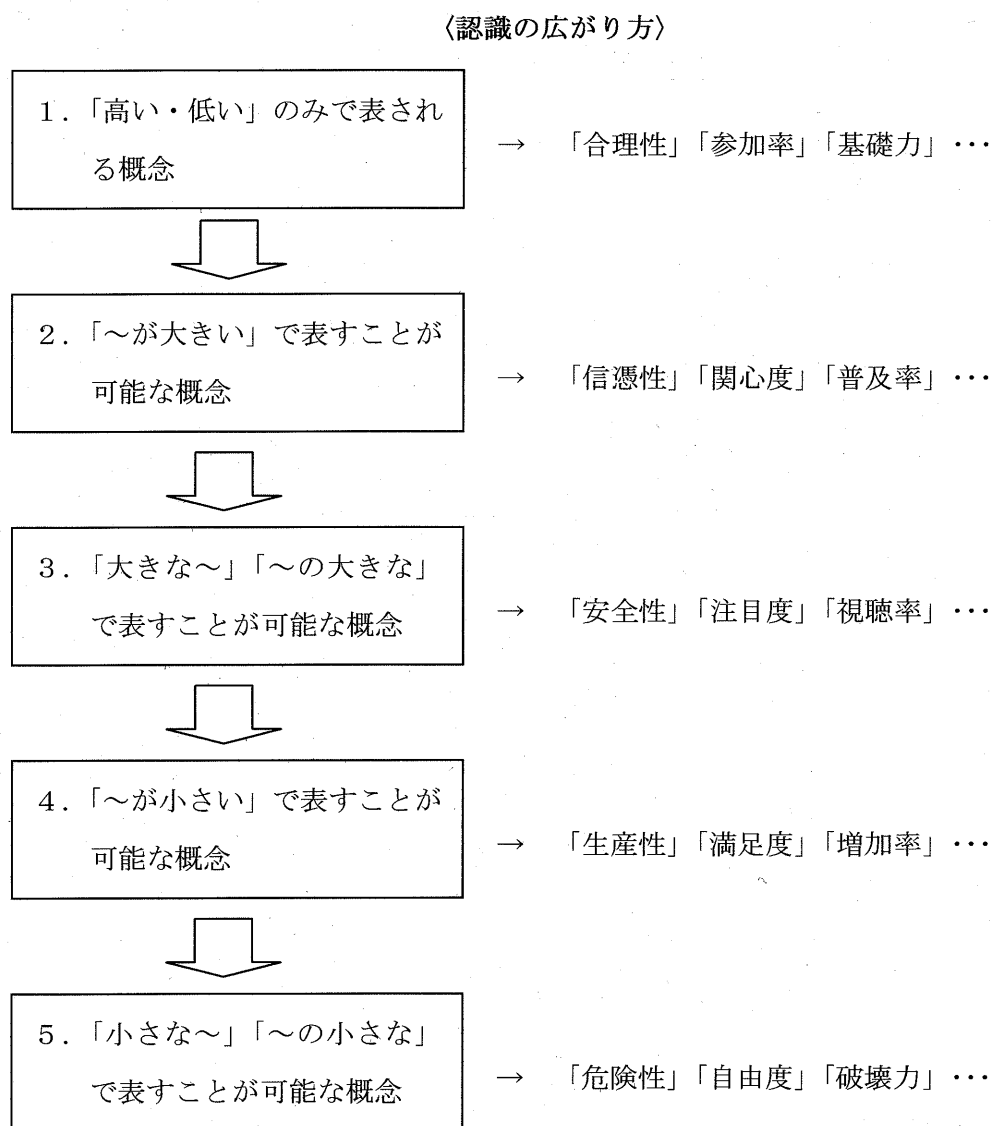
次に評価的に表された「大きい」は比喩的に「物体」のように認識され、「大きな～」や「～の大きな」のような使用が可能となる。

そしてその中で反対の意味も重要と認識されるものについては評価的に「～が小さい」

と言えるようになる。

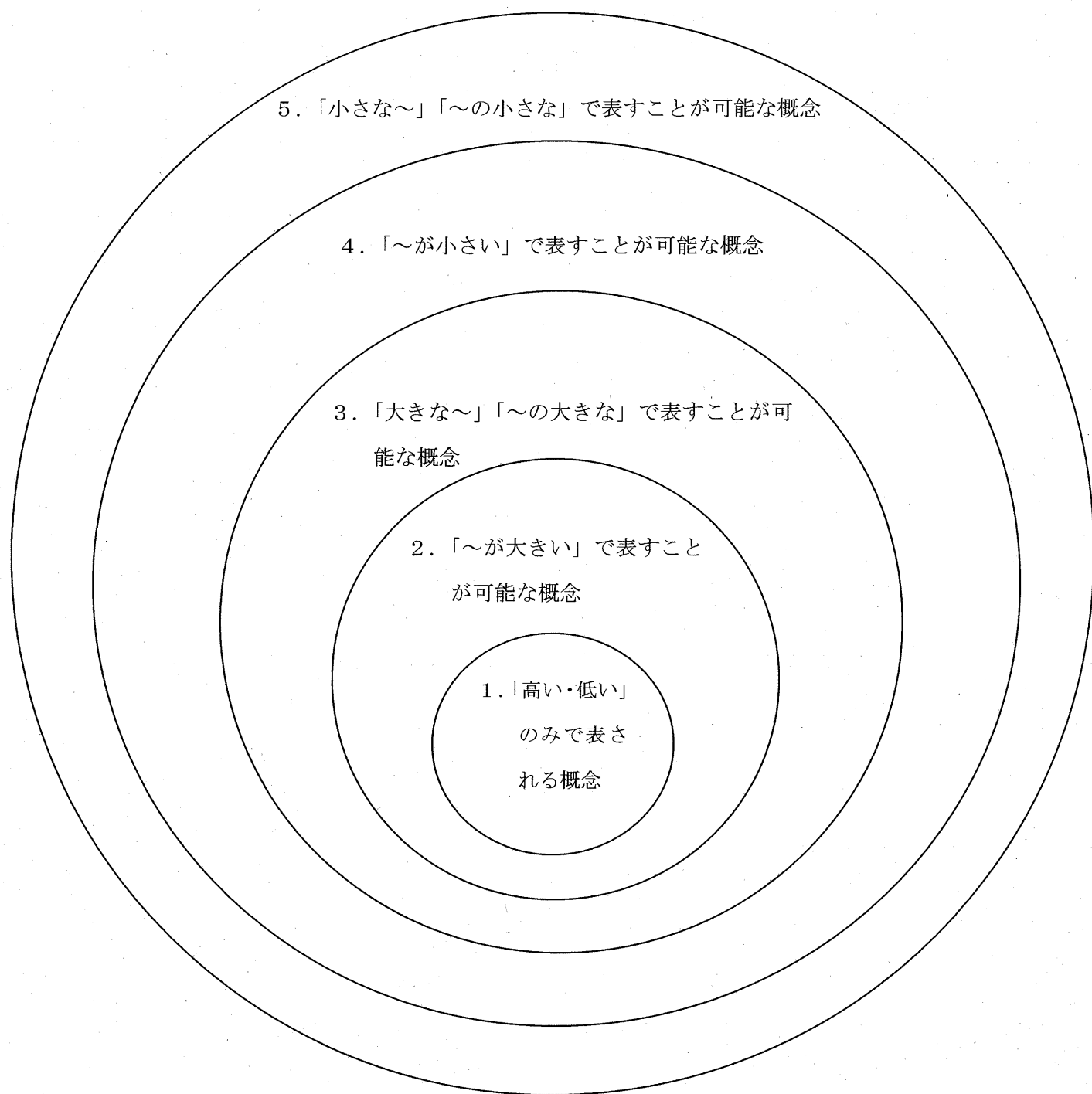
それが広がると「小さい」形も比喩的に「物体」のように認識され、「大きな～」や「～の大きな」のような使用が可能となる。同時に「～が増える・減る」といった用法も可能となる。

これを図にまとめると次のようになる。(図 30)



(図 30)

また、円形で表すと次のようになる。(図 31)



(図 31)

このように「高い・低い」と「大きい・小さい」で表される概念における空間認知は「大

「大きい・小さい」形で言えば言えるほど広がっていく。我々は気付かないうちに言葉の概念の認識を広げて言葉を用いている。

「大きい・小さい」形がどこまで使えるのかは、その概念が上の図においてどここの範囲まで認知されているのかによって変わってくる。逆にある概念において、どこまでの範囲で使用されているかが分かれば、その概念がどのように認知されるかが分かるようになる。

「高い・低い」と「大きい・小さい」という形容詞が抽象的概念を表して使用されている際には、我々の認知が数値的に働いているのか、評価的に働いているのかによって、その使用が異なってくる。また、その認知は、段階的な広がりを持っており、我々の概念の比喩認識と大きく関わりを持っているのである。

第4章 熟語構成と認知の関係

ここまでの章では、「高い・低い」と「大きい・小さい」の認知とその比喻の関係について考えてきた。

この章では、その周辺にある物事として、「高い・低い」と「大きい・小さい」における熟語関係について考えていく。

「高い・低い」についても「大きい・小さい」についても熟語の構成について、概念の比喻を考えたとき、まず情報として重要になってくるのが「高い」「大きい」のほうであった。

「高い完成度」「大きな危険性」というように名詞に付く形では、ほとんどが「高い～」「大きい～」形でしか表れなかった。そのことから重要視されているのは、量が大きい方であると考えられる。

その関係が熟語構成においても同じなのかどうかについて考えたい。

1. 「高・低」の語構成

まずは「高・低」の熟語構成について考える。

日本国語大辞典を中心に、概念や状態を表す「高・低」の熟語を取り出してみた。下がその一覧表である。(表 36)

	高い形	低い形
1	高次元	低次元
1	高位	低位
1	高温	低温
1	高緯度	低緯度
1	高価	低価
1	高額	低額
1	高気圧	低気圧
1	高級	低級

1	高給	低給
1	高金利	低金利
1	高血圧	低血圧
1	高調	低調
1	高度	低度
1	高次	低次
1	高確率	低確率
1	高率	低率
1	高学年	低学年
2	高運	
2	高恩	
2	高括り	
2	高義	
2	高議	
2	高客	
2	高興	
2	高教	
2	高訓	
2	高見	
2	高言	
2	高才	
2	高察	
2	高志	
2	高手	
2	高尚	
2	高説	
2	高節	
2	高相	
2	高談	

2	高聴	
2	高庇	
2	高批	
2	高評	
2	高品	
2	高文	
2	高聞	
2	高弁	
2	高望み	
2	高味	
2	高名	
2	高妙	
2	高諭	
2	高慮	
2	高論	
2	高話	
2	高邁	
3		低回
3		低語
3		低姿勢
3		低質
3		低衰
3		低俗
3		低頭
3		低能

(表 36)

まずは、第1群として「高・低」のどちらも用いる熟語についてである。これらに該当するものに

「高位」「低位」「高給」「低給」「高調」「低調」「高次元」「低次元」「高確率」
（「低確率」）

等の語が挙げられる。

これらの語に特徴として挙げられるのは、数値化して表せるものが多いことである。「高確率」「低確率」や「高気圧」「低気圧」は数値化されている。値段の関係である「高級」や「低級」も一種の数値として考えられていると言える。

次に第2群として「高～」があり、「低～」がない語について取りあげる。この中には

「高運」「高察」「高品」「高評」「高志」「高説」「高尚」「高話」
「高邁」「高名」

等の語が挙げられる。

これらの語は数が多い。これは熟語の面でも「高い」が「低い」ことよりも重要視されているためであると考えられる。

「高」がつく語は「プラス」の評価で使われていることが多い。例外として「高望み」が挙げられる。「高望み」は希望が自分に合っていない、高すぎる場合に使われる。しかし、「高望み」のように「高すぎる希望」については「マイナス」の評価になる。それだけ我々の認識が「高くなりすぎてはいけない」ということを表していると言える。しかしながら、ほとんどの語が「高い」ことが「良い」という「プラス」の評価で考えられている。

「高」が付く熟語には必ずしも「高い」に直して言えるものではない。たとえば「品が高い」ということは言えるが、「高運」や「高話」では「運が高い」や「話が高い」のように熟語にならないと使えない語も多い。このように熟語と実際の形容詞を用いる用法とは異なる場合もある。

最後に第3群として、「高～」が言えず、「低～」のみが存在する熟語について考える。これらの語に挙げられるのは、

「低質」「低衰」「低俗」「低能」「低頭」「低姿勢」

等の語が挙げられる。

これらの語は「高～」のみが言える語に比べて数が少ない。「低い」という語が「高い」に比べて熟語になりにくいのは、我々が「低い」ことに関して、「高い」ことより関心が払われにくいためであると考えられる。

また「低～」は「低俗」「低能」等、「マイナス」の評価の語が多い。「高～」と対立している。基本的に「高～」等、量が大きいもののほうが「プラス」評価となることが分かる。

しかしながら例外の語も存在している。「低頭」や「低姿勢」というような姿勢を「低～」で表わしている語である。このような語は、我々が相手を慮ることで、自分がへりくだっていることに「プラス」の評価が与えられているためである。このように例外はあるものの基本的に「低～」は少なく、「マイナス」のイメージを我々に与える語である。

2. 「大・小」等の語構成

ここでは、「大・小」の熟語の関係について考える。概念の評価を表す場合、「大きい・小さい」ではまず「大きい」が情報として重視されている。そこから、逆の「小さい」へと認識が広がっている。

では、語の構成ではどのようなになっているだろうか。

ここでは日本国語大辞典を中心に、「大・小」の付く熟語を調べた。「大～」で概念や状態を表しているもののみを考える。

下がその一覧である。(表 37)

	「大」形	「小」形
1	大型	小型
1	大形	小形
1	大括弧	小括弧
1	大規模	小規模
1	大雨	小雨
1	大火星	小火
1	大金持ち	小金持ち
1	大口	小口
1	大国	小国
1	大降り	小降り
1	大股	小股
1	大回り	小回り
1	大見出し	小見出し

1	大物	小物
1	大技	小技
1	大宇宙	小宇宙
1	大火	小火
1	大休止	小休止
1	大金	小金
1	大悪	小悪
1	大異	小異
1	大恩	小恩
1	大器	小器
2	大欠伸	
2	大汗	
2	大甘	
2	大荒城	
2	大荒れ	
2	大慌て	
2	大急ぎ	
2	大一番	
2	大威張り	
2	大嘘	
2	大海原	
2	大がかり	
2	大看板	
2	大怪我	
2	大袈裟	
2	大喧嘩	
2	大困り	
2	大込み	
2	大錦	

2	大間違い	
2	大見得	
2	大紅葉	
2	大安売り	
2	大喜び	
2	大患い	
2	大悪人	
2	大往生	
2	大概念	
2	大火災	
2	大家族	
2	大恐慌	
2	大嫌い	
2	大紅蓮	
2	大効	
2	大好物	
2	大国民	
2	大好き	
2	大都市	
2	大人気	
2	大好物	
3		小生意気
3		小粋
3		小間怠い
3		小機転
3		小気味
3		小賢しい
3		小細工
3		小寂しい

3		小意地
3		小温い
3		小甘い

(表 37)

まず第1群として「大・小」が互いに対義関係になっている語について見ておく。これらの語に該当するのは、

「大括弧」(「小括弧」)「大規模」(「小規模」)「大回り」(「小回り」)「大宇宙」(「小宇宙」)「大技」(「小技」)「大器」(小器)

等の語である。

これらは評価的な面が上記にある「大」よりも評価性が少ないように思われる。「大括弧」は記号の名称であるし、「大規模」はその量を表しているだけで評価的に語を用いることが少ない。「大技」「小技」は、少し評価性があるように思われるが、スポーツ等でのランクで考えられることもあるので、上記の熟語らに比べて少し評価性が薄くなるのではないかと考えられる。

「大器」「大恩」等は評価性があるが、日常の言葉として用いる機会は少ない。またこれらの語は数が少ないと考えられる。

このように対義関係のある熟語で、評価的に用いる語は少ないことが分かる。

次に第2群として「大～」のつく熟語について、その逆の「小～」で言えないものを集めてみると、

「大一番」「大悪人」「大火事」「大火災」「大災害」「大往生」「大看板」「大喜び」「大がかり」「大人気」「大欠伸」「大好物」「大金持ち」

等が挙げられる。この群に当たる数は非常に多い。

これらの熟語は「大」を取っても意味をなす。しかし「大」がつくことでその量や規模が大きいことを表している。

またそれだけではなく、これらの熟語には我々の「評価」が意味の中に入っているのではないかと考えられる。

たとえば、「大喜び」「大好物」といった言葉には、量や規模が「大きい」だけでなく、それを扱う我々の「プラス」の「評価」が働いていると考えられる。「大一番」「大看板」といった言葉にも表しているものに対する「期待」や「価値」が「大きい」ことを表して

いる。

逆に「マイナス」の「評価」が「大きい」言葉にも「大」は付く。「大火事」や「大悪人」、「大災害」というような言葉は、「被害」が「大きい」ことから、我々に「悲しみ」や「怒り」の感情をかきたてている。このように「マイナス」の「評価」が「大きい」ことにも「大」という言葉がつく。

このように「大」がつく概念には「評価的」な価値が付いてくることが多い。

また、これらの概念は逆の「小」をつけて言うことができない。「小看板」や「小一番」「小災害」ということは言うことが出来ない。これは、我々の「評価」の認識がまず「大」を中心として考えているからである。

このように熟語構成の面からも「大きい・小さい」では「大きい」の方が重要視され認識されていることが分かる。

最後に第 3 群として、「小～」しか言わず、「大～」が言えない熟語において、「小」はどのように認識されているかを考える。

「小」がつく熟語を集めてみると、

「小生意気」「小粋」「小間怠い」「小機転」「小気味」「小賢しい」「小細工」「小寂しい」

のような熟語が挙がる。

これらの「小」は「大」の対義の関係ではない。「普通（接頭語なし）」と「小～」が対応する形となっている。また、「小生意気」「小賢しい」のようにただ量や規模が小さいだけではなく、「小さいこと」が他人に対する「侮り」の意味になり、「マイナス」の評価を持つ語が多い。例外として「小粋」は「プラス」の評価となる。これは、我々が過度の「粋」を好まず、「ちょっとした粋」というものを好むためである。

このように「大きい・小さい」は常に対義関係にあるわけではない。特に「小」は熟語について、評価的に扱われるときは「大」と対にはならない。「大」の方も評価的に使われて、熟語を構成する際には対で「小」を言うことが出来ない。

「大きい・小さい」を評価的に概念に用いる際には、熟語構成で言うと、「大」の意味で使われていることが多い。「プラス」であれ「マイナス」であれ、情報として重要視されるのは、「大きい」の方であった。

このように熟語構成の面からも、人間の認識というものは、自然に「大きい」方を重要視しているということが分かる。

3. 熟語構成と認知

以上のようにここでは「高・低」関係と、「大・小」関係における熟語の構成を確認した。熟語の関係が第2章や第3章で確認した通り「高い」「大きい」のほうが「低い」「小さい」よりも我々が重要視していることが語の数から分かる。

そして熟語の問題を考える際にも「評価的」に考えることで大まかではあるが分類をすることが可能である。

「高～」のみが言える語では「プラス」の評価を持つ語が多く、「低～」のみが言える語では「マイナス」の評価を与えることが多い。しかし、「高望み」や「低姿勢」等、我々の道徳や文化による認識によって、それが逆転するときもある。

また、「大～」のみしか言えない語は、はた低度の量が大きいことではなく、その背景には「プラス」であれ「マイナス」であれ、我々の評価として判断されうるものが多い。「小～」しか言えない語では、ただ量や規模が小さいだけではなく、「小さいこと」が他人に対する「侮り」の意味になり、「マイナス」の評価を持つ語が多い。

このように我々の認識は熟語を構成する面でも、語を使用する面と同様にまず量が「大きい」ものから考えられる。

ただし、後にくる概念によって、我々の道徳や文化的な背景で量が大きいことが批判的になるもの（「姿勢」や「望み」、「粋」等の語）は例外的に逆になってしまうことに注意しなければならない。

以上から熟語構成の面からも我々の認識が語を比喩的に捉え、そこに「評価的」な判断があるということが示しうると考える。

第5章 概念認知の比喻と語彙教育

この章では、ここまで扱ってきた概念認知が国語教育における語彙教育にどのように関わっていけるのかについて考察する。

語彙は国語教育において「聞く・話す・読む・書く」という言語活動を行う上での基盤となる。語彙を獲得することで言語活動の幅を広げていくことが可能となる。

その中で概念の認知や比喻というものはあまり触れられてこなかったように思われる。これらの概念は教科書中に自然と出てきているし、それらを集中して学ぶ機会はそれほどなかったのではないだろうか。

それらを学ぶことで語彙をさらに組織的に見ることが可能になってくると考えられる。そしてその認識が他の言語（英語等）と結びつくことでさらに言葉の世界を広げていくことが可能となる。概念の比喻について日本語を考えることが日本語だけでなく言語全体として考えることに繋がっていくと考えられる。

1. 学習指導要領における語彙の獲得

まずは国語教育で行われている語彙教育について確認しておく。学習指導要領において、語彙の学習に関連するものを挙げておく。ここでは、小学校高学年から中学校3年までを取りあげる。（平成20年度版）

〈小学校高学年〉

（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

イ言葉の特徴やきまりに関する事項

- (エ) 語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。
- (オ) 文章の中での語句と語句との関係を理解すること。
- (カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。
- (ク) 比喻や反復などの表現の工夫に気付くこと。

〈中学校1年〉

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

イ言葉の特徴やきまりに関する事項

(イ) 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くこと。

(ウ) 事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもつこと。

(エ) 単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意すること。

(オ) 比喩や反復などの表現の技法について理解すること。

〈中学校2年〉

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

イ言葉の特徴やきまりに関する事項

(イ) 抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

い

(ウ) 文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えること。

(エ) 単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること。

〈中学校3年〉

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

イ言葉の特徴やきまりに関する事項

(イ) 慣用句・四字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

このように、学習指導要領には語彙の教育についてまとめられている。特に小学校高学年から中学校1年には「比喩」の理解について、繰り返し述べられている。それだけ比喩が重視されているということになる。比喩の理解については学習指導要領の解説にはこのように述べられている。

〈小学校高学年〉

具体的な表現の工夫には、比喩や反復をはじめとして様々なものが考えられる。擬声語・擬態語、語句の反復、誇張などは低学年の児童が読んだり書いたりする文章中にも頻繁に見られる。学年が進行するにつれて直喩、隠喩などの比喩やユーモア、また、省略、倒置、対句など構成上の工夫も多くなる。そこで、多様な文章に表れる様々な表現の工夫に気付いたり、自分の表現に活用したりするように指導することが大切である。

〈中学1年〉

「比喩や反復などの表現の技法」としては、比喩や反復に加えて、省略、倒置、対句などが挙げられる。これらについては小学校段階で具体的な表現に即して指導しているが、「比喩」や「反復」などの名称と結び付けて、表現の技法の意味や用法を改めてまとめて指導する。

このように比喩については小学校高学年から中学校1年にかけて重点的に指導を行っていくことが述べられている。しかし、普段の語の使用から来る概念の比喩に関しては具体的な記述はなかった。

抽象的な概念を表す語彙の指導については中学1年と中学2年で重点的に書かれている。これらについて、学習指導要領の解説では次のように述べられている。

〈中学校1年〉

(ウ)は、事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもつことをねらいとしている。日常使用している語句は、多様なレベルで語彙を形成する。使用範囲の側面から考えると、まず事象や行為など、具象的で比較的身近な事柄を表す語句が多く存在することに気付く。さらに、それらが、実際の言語活動において、話や文章の中でどのように関連付けて使用されているか、自分が理解したり表現したりするときにどのように活用すればよいかについて考えさせていくことが重要である。

〈中学校2年〉

抽象的な概念を表す語句や、類義語と対義語、同音異義語、多義的な意味を表す語句についての理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにすることについて示している。「抽象

的な概念を表す語句」とは、第1学年で学習した「事象や行為などを表す多様な語句」よりも、一般的で抽象性の高い語句である。ここでは、抽象的な概念を表す語句を取り上げて、それが表す具体的な中身を考えさせるなどして語感を磨くようにする。また、「C読むこと」(1)の「ア抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むこと。」との関連を図る必要がある。

このように「身近にある事象や行為の語句」から「抽象的な概念を表す語句」に広げていく語彙の系統性が示されている。また、それを読解への手がかりになるように、「読むこと」とも関連して述べられている。しかし、抽象的な概念の「具体的な中身を考えさせる」とあるが、その概念が言葉の使用の中で「どのように認識されて用いられているか」ということについての記述はなかった。

以上から、概念を表す語句と比喩についてどの学年で指導していくべきかが明らかになる。概念を表す語彙とその認知、比喩を考えていく際には、その2つを連携させて考えていかなければならない。それらを扱っていくのは、中学校の1年から2年までの間が必要であると考え。またそれらに至るまで、比喩についての学習をしっかり身につけておくべきであるし、中学3年以降も、概念を分かりやすく身につけるために、比喩を理解しながら身につけていく必要があると考えられる。

2. 教科書に見られる概念認知と比喩

ここでは、国語教科書において、どのように概念の比喩が扱われているかについて考察を行っていく。つまり「～のように」といった直喩や擬人法のような独特な表現ではなく、我々が日常に用いている表現の中に入り込んでいる比喩について考える。今回調査に使用したのは現行(H16検定)の光村の国語教科書である。前節と同様に小学校高学年から中学校3年生までの国語教科書を対象としている。

まずは学年ごとにどのような概念の比喩が見られるかを確認する。

小5上

- ・何百万年という長い長い時間をかけて、それぞれが、おたがいの利益になるように体の形を変えたり、生活周期を調節したりして、強い結び付きを築いてき

たのです。(『サクラソウとトラマルハナバチ』)

- ・このように、生き物はみなつながり合っているのです。(『ㄱ』)
- ・生活に根ざした感じがして(「言葉の研究レポート」)
- ・物語は、わたしたちを現実には体験できない世界へと連れていってくれます。
(「本は友達」)
- ・あなたの心には、どんな思いが広がっているでしょう(「ㄱ」)
- ・自分が気づかなかった読み方が深まったり、友達の感じ方・考え方を発見できたりする。(「ㄱ」)

小5下

- ・観光客に不安をあたえてしまうのではないか(「ニュース番組作りの現場から」)
- ・大造じいさんは、強く心を打たれて、(「大造じいさんとガン」)

小学校5年では生き物同士が何かもので「結び」ついているわけではないが、生き物同士が、自然界の中で互いに利点になる働き方をしているという点で、互いに助け合っているという点で「結び付き」という比喩が使われている。

また「物語を読むことによって自分の想像力が培われていく」ことを「本が連れていってくれる」という比喩で表現されている。本自体がどこかへ動いて我々を連れ出すということはない。

また「感動する」といった心の感じ方を、「どんな思いが広がっているでしょう」や「心を打たれる」詳細に読んでいくことを「読み方を深める」といった表現で表されている。この他に「不安」という言葉を「物体」のように認識しているような「不安をあたえる」という概念の比喩も見られる。

このように小学校5年段階の概念の比喩は、「生き物」や「心の動き」、「読書に関するもの」が多い。

小6上

- ・生き物はつながりのなかに(「生き物はつながりのなかに」)
- ・今日のあなたに大きな力をあたえてくれるような言葉や文章との出会いが待っています。(「本は友達」)

- ・できるかぎり多くの人が使えるということに重点を置いて考えましょう。(「みんなで生きる町」)

小6下

- ・原爆ドームが平和を築き、(「平和のとりでを築く」)
- ・規模が小さいうえ、歴史も浅い遺跡であることから、(「」)
- ・原爆ドームは、それを見る人の心に平和のとりでを築くための世界の遺産なのだ。(「」)
- ・そこからもれてくる夕食のみそしるのにおいは、腹の底までしみ通るものでした。(「言葉の橋」)
- ・外国のいろんな人や文化にふれる機会がある(「今、君たちに伝えたいこと」)
- ・そんな豊かな自然のひびきに引かれる心があれば(「」)

小学校6年の段階では、小学校5年での「つながり」という比喩が再び現れる。今度は説明文教材中の題名になっている。

同様に「平和を築く」のように「平和」という概念を建築物のように扱う比喩も登場する。それも「平和のとりでを築く」のように間に建物を入れることでより建造物としての比喩が明らかになるような題をつけている。この教材では「歴史が浅い」という表現もある。歴史の時間軸を上下に考え、「深さ」で認識している表現である。また、小学校5年と同じく本との「出会い」というような本を「人」として認識しているような比喩もある。

この他、「においは、腹の底にしみ通る」「人や文化にふれる」「自然のひびきに引かれる心」等の比喩が見られる。

中学1年

- ・目は少女に引きつけられる(「ちょっと立ち止まって」)
- ・未来をひらく微生物(「未来をひらく微生物」)
- ・微生物のこうした働きは、地球環境を支えるうえでも大きな役割を果たしている。(「」)
- ・微生物はわたしたちに未来をひらく技術を教えてくれるだろう。(「」)
- ・二百年前の江戸の暮らしをほんの一部だけのぞいてみた。(「江戸からのメッセ

ージ」)

- ・ともすれば忘れがちな「心の豊かさ」というメッセージを受け取ることができる。(「〃」)
- ・言葉との出会いを大切にしてほしい。それは一生の、そして君だけの心の友になるかもしれないものなのだから。(「胸の底の人と言葉たち」)

中学1年でも「題名」が比喩を表しているものがある。「未来をひらく微生物」「江戸からのメッセージ」というものである。

「未来をひらく」という表現は「未来」を扉のような前にある「物」として比喩されている。それを「ひらく」と表現することで未来が「努力」によって、良いものになっていくことを暗示している。この表現は「未来を切り開く」等の表現に繋がるものである。

「江戸からのメッセージ」は、「江戸時代の史料」を我々が読み解いていくことで江戸時代を知ることが出来ることを比喩したものである。ゆえにその中では「江戸時代をのぞく」というようなあたかも実際に見ているような比喩も見られる。

このように「題名」で概念の比喩を用いて、読解からその比喩を理解させるということを繰り返し、行っていることが分かる。

中学2年

- ・作者は寝床の中にいて、明るくのどかな気分に入っているのです。(「漢詩の風景」)
- ・異郷の明るい春景色の中で、悲しみに沈む作者の姿が強く印象づけられます。(「〃」)
- ・こう歌い放つことによって、別離の悲しみは尽きずに漂うのです。(「〃」)
- ・モアイは語る (「モアイは語る」)
- ・モアイの秘密に迫っていきたい。(「〃」)
- ・このことは、ヤシの森が消滅していったことを物語っている。(「〃」)
- ・地球の人口が八十億を超えたとき、食料不足や資源の不足が恒常化する危険性は大きい。(「〃」)
- ・その先に待っているのはイースター島と同じ飢餓地獄である。(「〃」)
- ・そこには、現代建築の地平をひらく「科学技術」が秘められていたのである。

(「五重の塔はなぜ倒れないか」)

- ・町や家を見る目が変わってくる、発見に満ちた本。(「読書案内」)
 - ・文章からも、深い愛情が伝わってくる。(「〃」)
 - ・その国や地域の深い歴史と文化につながっていく(「〃」)
 - ・現代社会が抱える多くの問題を投げかける、壮大な物語。(「〃」)
-
- ・一語一語のささやかさそのものの大きな意味が実感されてくるのではないだろうか。(「言葉の力」)
 - ・古典への硬い壁を楽に乗り越えることができる(「古典の心に近づく」)
 - ・そこ(古典)には、わたしたちが二十一世紀を生きるためのかぎがたくさん詰まっていることに気付くでしょう。(「〃」)

中学 2 年でも題名で比喩が用いられているものがある。「モアイは語る」といったものである。中学 1 年での「史料や調査」から解き明かしたことを「モアイ」というものが「人」であるかのような比喩で扱われている。

中学 2 年では心情に関する概念の比喩が多い。「のどかな気分に入る」「悲しみに沈む」「別離の悲しみが尽きず」「深い愛情」といったように心の動きに関する多くの表現が出てきている。

それだけでなく、「言葉の力」では言葉の認知に関する記述が出てきている。

- ・言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。(「言葉の力」)

「言葉の力」では「言葉が語彙だけでなく、人間世界の全体をいやおうなしに背負っている」という表現で「言葉」の背景にある「人間世界」を見ることの必要性が述べられている。

このように比喩表現だけでなく、言葉の認知に対する内省を求める教材も登場する。

中学 3 年

- ・政治問題や季節の気分を共有する機会を与えてくれる(「メディア社会を生きる」)
- ・メディアを受けることと送ることは、ばらばらではなくて、互いに深く結びついているということを認識すべきだ。(「〃」)
- ・メディア社会には、よいことばかりでなく問題もたくさんあること、光の部分と影の部分があることを忘れないようにしよう。
- ・これからのメディア社会を切り開いていってほしい(「〃」)
- ・洗髪という日常のささいなことが、俳句を作るときの大きな感動の源になるということを教えてくれる句だ。(「俳句の可能性」)
- ・わたしたちが便利さだけを追求していくのは、生き物らしさを捨てるということにもなる。(「生き物として生きる」)
- ・失われた文化だけは取り戻したいと。(「炎を見る」)
- ・瓦職人にとって、あまりにも高いハードルだった。(「〃」)
- ・何度となく危篤状態に陥り、生死の淵をさまよった。(「〃」)
- ・息子が首里城の瓦作りを買って出たことを喜ぶ父の笑顔が浮かんでいた。(「〃」)
- ・「やめろ」という言葉の裏には、一流の職人としての冷静な判断と、息子の将来を思う親としての愛情とが込められていた。(「〃」)

中学校3年では「互いに深く結びついている」と度々登場する「つながり」「結び付き」の比喩がまた出てきている。それだけでなく、「利点と欠点」を「光と影」という比喩で表したり、「高いハードル」のように「難所」を比喩したりしている表現が見られる。「生死の淵」等も日常で見られる表現もある。

義務教育の最後の学年ということで多くの概念の比喩が見つけられる。また、中学校2年のように言葉に対する認識が表れている教材が出ている。

- ・生き物である野菜が「育つ」のである。ところがわたしたちは、「野菜を作る」といういい方をする。「作る」という言葉には、思いどおりになるとか思いどおりにしたいという気持ちが入っている。(「生き物として生きる」)
- ・以前は「子供を授かる」といういい方が多く使われていたが、「子供を作る」というのが普通になってきた。(「〃」)

このように言葉の用い方や比喩の認識が我々の「概念」や「物」に対する考え方があるということについて述べられている。

以上のように小学校5年から中学3年生にかけて多くの概念の比喩が見つけれられる。

教科書における概念の比喩は、「題名」から比喩を用い、その詳細について文章を読むことで解明し、理解させるという方法が取られている。その比喩を読み取ることで文章の読解を助けることにもなる。特にそれは小学校6年から中学校2年まで同じような方法を取っている。初期においては文章を読解させながら、概念の比喩の理解につなげていることが分かる。

また心情に対する表現で比喩を用いることが多い。「本を読むこと」で「心に感じ取ること」がある場合、それについて比喩を用いて表現することで「心の変化」を分かりやすく表現していると言える。

もう一つ多いものに「結び付き」という表現がある。実際に目に見えて「つながって」はいないものの、この社会や自然界が互助関係によって成り立っていることを述べている。これを各学年で繰り返し、「つながり」「結び付き」の比喩で表現していることから、それだけ重要視していると考えられる。

また、中学校2年、3年では言葉が人間の認識に関わっていることを教材として扱っている。それだけ言葉の認識について、重要視していることが分かる。

このように国語教科書では、概念の比喩が取り扱われている。

3. 文体の差と語彙の選択

ここまでは教科書を中心に概念の比喩について確認をした。ここでは実生活の中で、状況や場の違いによって使い分けられる言葉を、国語教育でどのように扱っていくかについて言及する。

このような新聞記事から抜き出した文がある。

古い店舗が密集して火災の危険性も高く、再開発の必要性が長年唱えられてきた。

(asahi.com 2011年01月18日)

この事件を巡っては、「アブドラ・アッザム旅団」を名乗るイスラム過激派組織の犯

行声明が4日に見つかったが、複数の専門家は信憑性（しんぴょうせい）に疑問を呈していた。

(asahi.com 2010年08月06日)

これらをそれぞれやさしく直すと、

「古いお店が集まっていて火事になる危険があつて、もう一回開発する必要が長い間話されていた」

「この事件については（中略）何人かの専門家は信じられるかどうかということを確認している。」

というようになる。

このように「危険性が高い」「信憑性が低い」等は必ずしもその言葉でしか表せないということはない。新聞は、文字数が決まった中で内容を伝えなければいけないという条件のために、このように短い言葉で内容を表すことで成り立っているためにこのように言葉をできるだけ短くするように語が選ばれている。

話し言葉では特に使われづらいだろう。「危険性が高い」や「信憑性が高い」、そして「気密性が高い」等はあまり話し言葉では見あたらない。「危険が多い」や「信じられない」という言葉のほうが話し言葉では多く出現するだろう。

このように我々は文体を選びながら、話す内容や文章を考えている。このことを子どもたちに国語教育の中で気付かせていくことが重要であると考えます。

まず「危険性」や「信憑性」のように概念を表す言葉の意味を理解し、どのような意味なのか、自分で言い直せるかどうかが必要である。次にそれが「高い」で考えられるのか「大きい」でも言うことができるのかというようなどのような言葉と共に用いられるのかということを考えなければいけない。そのように語を理解した上で、話し言葉ではどのように言うのか、別の言い方がないか等について考える。

このように意味の理解と表現の仕方を学んでいくことで言葉の力、語彙の力を伸ばしていけると考える。同じ意味を表す多くの表現を学んでいくことで、どんなときにも対応することができる言葉を学んでいくことができると考えられる。そしてそのような力が社会に出た際の「生きる力」に結びついていくと考えられる。

子どもたちにとって抽象的な概念は理解しにくい。しかしどのように言い換えられるかや比喩的に用いられていることを学び、それらを積み重ねて整理しながら学ぶことで、理解の助けになるのではないと思われる。

4. 概念認知と言語の理解

ここでは国語教育における語彙獲得と比喩の理解がどのように繋がっていくのかについて考える。

国語教育の語彙獲得の面を考える。語彙の獲得は大きく分けて、「理解語彙」と「表現語彙」とに分かれる。ただ語彙を「理解」するだけではなく、どのように語彙が使用されるのか、そして語彙を自分で使っていく「表現」の面で獲得できなければその語彙を「獲得」したとは言えない。

概念を表す語彙も同様である。

まず、概念を「理解」するだけでなく、その概念がどのような比喩で表されているのかについて考えて、その表現に繋げていかなければならない。

第2章や第3章で扱った「可能性」という概念は、「高い」でも「大きい」でも言うことができる。そこには「大きな可能性を持っている」「可能性が広がっている」等様々な言うことができる。つまり「可能性」については、数値的にも、物質的にも、面積的にも認識されている。その結果、「可能性」については様々な表現することが可能である。しかし、「大きい」を使うことで「評価」の面が表れる。そのことを知っておく、教えておくことで表現の幅が広がることが考えられる。

当然、これだけではなく前章から述べているように様々な概念の比喩を我々は表現の中で知らず知らずのうちに扱っている。これらの比喩に目を向けていくことで我々の言葉の認識や表現が広がっていることに気付くことができるし、自ら広げていくことも可能となる。

国語教育の語彙教育で概念の比喩を教えていくことは日本語の仕組みについて考えることに繋がる。前節にある「未来をひらく」「未来を切り開いていく」とった表現や「気分に入る」「悲しみに沈む」「別離の悲しみは尽きずに漂う」のように「気持ち」を「水中を動くもの」として認識しているものもある。

このように概念の比喩を集めていくと、日本人が概念をどのように見ているかを知るこ

とができる。概念の比喩を知ることは、自らが「聞く・話す・読む・書く」の言語活動に大きく役立っていく。

我々がコミュニケーションを取るときにはこれらは知っていることとして表現するし、これらを知っていないとおたがいの気持ちのやりとりができない。また文章中の心情表現もこれらの比喩が使われている。このことから「読む」ことにも必要なスキルである。そして「書く」ことで表現の幅が広がっていく。

日本人の認識、認知のあり方を知ることは国語教育の言語活動に繋がるだけではない。そこからは国語教育だけではない。外国語教育にもこれらの認識は役立てることが可能である。

母語である日本語と他の言語を比べることで認識が同じところ、違うところに気付くことでそれぞれの認識を深めることが可能である。

『中学校学習指導要領解説 外国語編』では「日本語」という言葉が 25 件あり、そのどれもが「日本語との違い」に関するものであった。『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』でも次のような記述がある。

国語科との関連については、日本語とは異なる外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることで、言葉の大切さや豊かさに気付かせ、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせることにつながるものであることから、国語力向上にも相乗的に資するように教育内容を組み立てることが求められる。例えば、外来語の成り立ちや語源である外国語との違いに気付かせたり、発表などを通して、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の考えと比べることができるようにしたりするなどの工夫が考えられる。

このように外国語を学ぶ上でも日本語との関連を学ぶことで相乗的に効果を上げていくことの必要性が述べられている。

では概念の比喩はどのように外国語を学ぶ上で役立てていけるのだろうか。

たとえば心情の表現では日本語と英語では少し異なっている。

日本語では落ち込んでいるときに

・重い気持ち を引き立てて、検問所内へ。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

・そんなワタシの 沈んだ 気持ちを励ますつもりなのか。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

等のように用いる。

同じように英語では、

・ *I'm feeling down.* (気持ちが沈んでいる) (G・レイコフ&M・ジョンソン: 著 渡
辺昇一・楠瀬淳三・下谷和之: 訳『レトリックと人生』)

・ *I'm depressed.* (落胆している) (G・レイコフ&M・ジョンソン: 著 渡辺昇一・
楠瀬淳三・下谷和之: 訳『レトリックと人生』)

のように表現されている。

日本語と英語を比べるとどちらも「沈む」等、下の方向に向かっているのには変わりがない。しかし、日本語のほうは、「重い」という重量が加わっている。英語では「heavy」といった語例は見あたらなかった。

このように似ていても少し概念の考え方に違いがある。第2章や第3章での「高い・低い」「大きい・小さい」も英語で言う「high・low」「big・small」とは関係が同じではないと考えられる。

また全く異なるものには「with」の用例が考えられる。英語の「with」には次のような用法がある。

・ *I went to the movies with Sally.* (私はサリーと一緒に映画に行った。)

(G・レイコフ&M・ジョンソン: 著 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和之: 訳『レ
トリックと人生』)

・ *I sliced the salami with a knife.* (私はサラミを薄く切った。)

(G・レイコフ&M・ジョンソン: 著 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和之: 訳『レ
トリックと人生』)

上の例文はすぐに理解できるが、下の例文はすぐに理解できない。これは英語の概念の比

喩であり、人間が使う道具を、あたかも「一緒にいる友人」のように比喻している。これは日本語ではあまり用いない。道具は手段を表す助詞「〜で」で表す。

このように日本語と英語の違いは様々な概念に対する認識の違いを表している。このような認識の違いに気付くことで誤訳がなくなっていく。また我々が持っている日本語の認識にも気付くことができ、言葉の世界を広げることができる。

以上のように、語彙の喩を多言語的に見ることで、言葉への認識を改めて考えることができる。それが国語の語彙教育にも相互的に考えることができる。「話す・聞く・読む・書く」といった言語活動にも影響し、言葉についての理解を広げることができる。

終章 まとめと課題

この論文では『現代日本語の形容詞と認知』という題で論を進めてきた。

第1章では、現状の語彙に対する問題と、研究の方向性について述べてきた。

第2章では、日本語形容詞「高い・低い」「大きい・小さい」について調査した。「～性」「～度」「～率」「～力」という概念ごとに、どのような使い方をされているのかについて、インターネット検索を利用したコーパスから明らかにしようと試みた。

その結果、「高い～」と「大きな～」を比べることで、「高い・低い」は数値的・具体的な概念を表しているのに対し、「大きい・小さい」は物的・曖昧な概念を表しているという考察を得られた。また「高い・低い」「大きい・小さい」がどちらも言えるものは量の「大小関係」においてどちらも重視される情報であることが分かった。

「大きい」のみが言えて、「小さい」が言えない言葉については、「大きい」ことが情報として重視される。また、「大きい」形についても「～が大きい」のみが言える語と「～の大きな」「大きな～」も言える語の、2つのパターンがあるということが考えられた。

第3章では、第2章から発展させて、「大きい・小さい」で言える概念と言えない概念の差は何か、それを使い分けしている認識の差がどこにあるのかを解明した。

その結果、「大きい・小さい」形では表せない概念は、我々の「評価」に関わらない概念と言えることが分かった。そして「大きい・小さい」で言い表せる概念と言い表せない概念には我々の認識に差があり、概念が「層」のように認識が区別されていることが分かった。つまり我々の語彙の使用、つまり概念の認知には広がり方の一定の「レベル」があることが示された。

第4章では「高い・低い」「大きい・小さい」の熟語構成について考えた。

その結果、熟語構成においても同様に「高い」「大きい」という情報として重視されることについて言及した。これは「高～」「大～」が、語数の面で「低～」「小～」よりかなり多いためである。

また「高・低」「大・小」を構成する熟語についても「プラス」「マイナス」の評価が大きく関わっていることを示した。「高～」は「プラス」、「低～」は「マイナス」、「大～」は「プラス」「マイナス」どちらも、「小～」は「マイナス」の評価が多い。しかし、これらについては、我々の道徳や文化的背景によって、逆転する場合がある。

第5章ではこれまでの概念の比喩が国語教育や外国語活動の中でどのように考えていか

なければならないかを示した。

学習指導要領や教科書から小学校高学年から中学校3年までで比喩の概念を理解することについて取りあげることが大切であることについて述べた。概念の比喩の理解が「話す・聞く・読む・書く」の言語活動に大きく関わることを示した。

また話し言葉と書き言葉における文体の差が我々の生活の上で存在し、その使い分けをしっかりと指導していかなければいけないことをについて考察を行った。

そして、外国語を学ぶ上でも、日本語との関連を学ぶことで相乗的に効果を上げていくことの必要性について考えた。国語教育と外国語教育の中で概念の比喩を取りあげることによって相乗的に言葉の世界を広げていけることを示した。

このような成果を上げてきたが、まだ課題も多い。

概念の比喩については「高い・低い」「大きい・小さい」の相互関係を見たが、まだ空間を表す形容詞における「人間関係」や「心」の動きに関する相互関係までは調べられなかった。そして概念の比喩は、無限とっていいほど広がっており、まだまだ研究対象は多い。もっと多くの概念・用例にあたって分析を行っていかなければならない。

特にその他の空間を表す形容詞については分析が行えていない。

例えば「深い」では「知識」や「関係」、「心の動き」について比喩的に用いられる。

- ・この人もまた庭園について 深い知識 をもった人であったのであります。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

- ・生活習慣病は、ライフスタイルや食生活と 深い関係 があります。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

- ・二人は心に 深い傷 を負ってしまいそうであった。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

- ・その家にとっての 深い悲しみ を察してのことです。

(日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA)

このように「深い」は視覚的に見えないが、重要である情報や、内面の心（特に悲しみ）や頭脳の動きを比喩によって表している。これは「深い」が地下からの距離を表すだけでなく「地球の中心」に向かうことから、「心」や「頭」の「中心」に向かっていくことを比喩しているものと考えられる。

教育の面でもまだ課題は多い。概念の比喻をどのように指導するのか、外国語活動との連携のカリキュラムについてはまだ考えられていない。また、国語における学習障害による、比喻の理解の困難さをどのように考えるのかについても、課題として残っている。

これらの課題を教育・研究の実践の場を通して考えていきたい。

【謝辞】

この論文を書くにあたり、ご指導くださった森山卓郎先生・浜田麻里先生をはじめ、お世話になった先生方に深くお礼を申し上げます。

参考文献

- ・『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所
秀英出版 1972
- ・『意味論の方法』国広 哲彌
大修館書店 1982
- ・『レトリックと人生』G・レイコフ M・ジョンソン：著 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷
和之訳
大修館書店 1986
- (『Metaphors We Live By』George Lakoff and Mark Johnson 1980)
- ・「日本語の量を表す形容詞の意味体系と量カテゴリーの普遍性」久島 茂
『言語研究』104 1993
- ・『認知意味論 言語から見た人間の心』G・レイコフ：著 池上嘉彦 河上誓作：訳
紀伊國屋書店 1993
- (『WOMEN, FIRE, AND DANGEROUS THINGS What Categories Reveal about
the Mind』George Lakoff 1987)
- ・「次元形容詞の空間的用法と非空間用法」小出 慶一
『群馬県立女子大学紀要』 2000
- ・『日本国語大辞典』
小学館 2000～2001
- ・『分類語彙表 増補改訂版』国立国語研究所
大日本図書 2004
- ・『コーパス語彙意味論—語から句へ—』マイケル・スタッブス：著 南出 康世・石川 慎
一郎 監訳
研究社 2006
- (『Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics』Michael Stubbs 2001)
- ・『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』文部科学省
東洋館出版社 2008
- ・『中学校学習指導要領解説 外国語編』文部科学省

東洋館出版社 2008

- ・『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省

東洋館出版社 2008

- ・『中学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省

東洋館出版社 2008

- ・『国語からはじめる外国語活動』森山卓郎：編

慶應義塾大学出版社 2009

- ・『国語教育の新常識』森山卓郎

明治図書 2010

参考・調査に使用したホームページ

- ・国立教育施策研究所ホームページ

<http://www.nier.go.jp/>

- ・文部科学省ホームページ

<http://www.mext.go.jp/>

- ・KOTONOA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」検索デモンストレーション

http://www.kotonoha.gr.jp/cgi-bin/search_form.cgi?viaTopPage=1

- ・検索サイト GOOGLE

<http://www.google.co.jp/>

- ・朝日新聞

<http://www.asahi.com/>